

発行能楽の友社

名古屋市千種区千種2丁目18-18 (郵便番号 464-0858)
電話 (052) 731-7984
FAX (052) 733-2837
振替口座 00800-6-36393

購読料 1年 1100円
郵送の場合 1年 1800円
部 100円

能楽の友

NHK放送予定(平成16年1月~2月)

◆NHK-FM能楽鑑賞(毎週日曜午前7時15分~8時)
1月25日 「殺生石」(宝生流) 高橋勇ほか
2月1日 「桜川」(観世流) 武田志房ほか
2月8日 「忠度」(宝生流) 今井泰男ほか
2月15日 「井筒」(喜多流) 友枝昭世ほか
2月22日 「高砂」(金春流) 桜間金記ほか
◆NHK教育テレビ「能・狂言」番組
1月25日(日) 15:00
金剛流 「鶴亀」 シテ廣田隆一
「石橋」 シテ金剛永謙ほか

演能カレンダー

◆名古屋能楽堂◆

(TEL 052-231-0088)

[平成16年1月]

24日(土) 藤田・龍吟の会 (有料) (番組②面)
25日(日) 名古屋宝生会定式能 (有料) (番組②面)
31日(土) 万作を観る会 (有料)
[2月]
7日(土) 青陽会定式能 (有料) (番組②面)
8日(日) 名古屋観世会定式能 (有料) (番組③面)
14日(土) 名古屋能楽堂定例公演 (有料) (番組③面)
15日(日) 名古屋観世九章会能 (有料) (番組③面)
21日(土) さわってみよう能の世界 (要整理券)
22日(日) 茂山狂言会名古屋公演 (有料) (番組③面)
29日(日) 富 耀 (無料)

◆豊田市能楽堂◆

(TEL 0565-35-8200)

[1月]

17日(土) 開館5周年記念新春能 (有料)

芸術院会員に

栗谷菊生氏

日本芸術院(犬丸直院長)は、旧ろう一日、日本芸術院新会員として九人を決定。十二月十五日付で発令した。
能楽関係では、シテ方喜多流・栗谷菊生氏、能楽解説で知られる詩歌文学の馬場あき子氏が新たに会員となった。
栗谷氏は大正十一年生れ。平成八年重要無形文化財各個指定保持者(人間国宝)認定。日本能楽会副会長。

能楽協会名古屋支部

新年謡初式

能楽協会名古屋支部(福井啓次郎支部長)は一月三日午前十一時から恒例の新年謡初式を名古屋能楽堂で催し、福井支部長の発声で「四海波」を同吟、平成十六年への希望あるスタートを祝した。「写真」
ひきつづき同能楽堂の集会所で新年謡会を開催、福井支部長から平成十五年度の支部主催によるいろいろな催能に対する支部員の協力を感謝する年頭のあいさつが述べられた。

薪能は8月7日
能楽協会名古屋支部
平成16年度演能予定

能楽協会名古屋支部(福井啓次郎支部長)主催による平成十六年度の演能予定は次のとおりである。
◎熱田神宮奉納能

16年度は年6回公演
名古屋能楽堂定例公演

能楽普及事業実行委員会主催、能楽協会名古屋支部協賛による名古屋能楽堂定例公演は、平成十六年度はこれまでの年八回公演が六回公演となる。開催日程は次のとおり。
◎平成十六年五月二十一日(金)
午後六時三十分始
狂言「六地藏」井上 祐一(和泉流)

◎六月十八日(金)午後六時三十分始
(市民能楽セミナー)
能「清経」長田 駿(喜多流)
狂言「咲嘩」松田 高義(和泉流)
◎七月十六日(金)午後六時三十分始
狂言「佐渡狐」大野 弘之(和泉流)

◎三月十二日(土)午後二時始
狂言「呂蓮」野村又三郎(和泉流)
◎三月十二日(土)午後二時始
狂言「末広かり」佐藤 友彦(和泉流)
◎三月十二日(土)午後二時始
能「羽衣」和合之舞 武田 邦弘(観世流)

◎初秋能
九月五日(日) 名古屋能楽堂
◎歳末助け合い協賛能
十二月五日(日) 名古屋能楽堂
◎六月五日(土) 熱田神宮能楽殿
◎名古屋薪能
八月七日(土) 熱田神宮境内
特設舞台



能楽協会名古屋支部の新年謡初式

さらには役員から平成十六年度の支部主催の演能日程、また支部が協賛している名古屋能楽堂定例公演について、日程を発表(別項)とくに本年から定例公演の回数が六

菊之会創立公演

2月1日金剛能楽堂
廣田菊之会(廣田泰三、廣田泰能師主宰)は、来たる2月1日金剛能楽堂で「菊之会創立記念公演」を催す。
能組は次のとおり。
能「翁」二日之式・橋懸之舞・鳥帽子之祝言(シテ廣田泰能)
能「高砂」祝言之式(ワキ谷田宗二朗)

能の魅力を探るシリーズ

大槻能楽堂自主公演
大槻能楽堂では自主公演能として、「能の魅力を探るシリーズ」平安から戦乱へ)を上演する。
2月1日(日)能・復曲「松山天狗」(シテ浅見真州)
2月28日(土)能「朝長」(シテ観世鏡之丞)
当日券四三〇〇円。取扱い「電子チケット」あ、大槻能楽堂(T E L 0 6 - 6 7 6 1 - 8 0 5 5)

年 新 賀 謹

観世清和

幽謳會

片山九郎右衛門

清司

梅猶會

梅若吉之丞

大槻清韻會

大槻文蔵

名古屋観世九章會

観世喜正之

加藤保彦
高山瞭一
外山圭一

名古屋観衡會
山本勝一
名古屋正花會
山本博通

鳳鳴會
武田志房

幽花會
片山慶次郎
伸吾

井上嘉介
井上裕久

大西智久
大西礼久

邦謡會

梅田邦久

清田邦一
須部一
本島田良
高島美和
今沢美和

千466-0033 名古屋千種区台町二丁目十六番五
電話052-841-1463

藤田・龍吟の会

一月二十四日(土)午後二時始
名古屋能楽堂

舞囃子 海士 山本 博通
河村真之介 加藤 洋輝
後藤嘉津幸 藤田六郎兵衛
分林 道治
上野 雄三
味方 拓司
味方 玄

当願暮頭

第当願 観世鏡之丞
復曲能 兄尊頭 大槻 文蔵

宝生 閑
殿田 謙吉
大倉源次郎 藤田六郎兵衛

問 井上 靖浩
後見 西村 高夫 武富 康之 上野 雄三
赤松 慎美 寺沢 幸祐 上田 拓司
分林 道治 片山 清司
味方 玄 山本 博通

主催 藤田・龍吟の会
事務所 052・571・6341
052・571・6341
中日新聞社

「入場料」(全席指定・税込み)
A席 一三、〇〇〇円
B席 一、〇〇〇円
学生席(直接藤田六郎兵衛事務所へお申込み下さい)
申込み事務所又はチケットぴあ(052・320・9999)

名古屋宝生会定式能(第48期)

一月二十五日(日)午後一時始
名古屋能楽堂

能組

内藤 飛能
衣斐 正宜 橋本 幸
飯富 雅介 河村真之介 加藤 洋輝
福井啓次郎 大野 誠
問 佐藤 融

狂言

張 蛸 井上 靖浩
大野 弘之 後見 井上 祐一
佐藤 友彦

仕舞

春日龍神 和久莊太郎 鬼頭 京子
忠 度 辰巳満次郎 倉本 愛
足立 知子

能

熊 野 竹内 澄子
玉井 博祐 杉江 元 河村総一郎 鹿取 希世
後見 和久莊太郎 石森 智幸 佐藤 耕司
佐野 弘宜 地謡 柴田 賢治 辰巳満次郎
寺部 一威 内藤 飛能

主催 名古屋宝生会
名古屋市中区白鳥町二丁目三〇番
島田橋住宅二丁目三〇番
佐藤 耕司 司方

「有料」
当日券一万円(2枚綴・年内通用可)
学生券当日券二千元
電話・FAX 〇五二・八〇三・七三七二
携帯TEL 〇九〇・一七四・一六二三四

第6回万作を観る会

一月三十一日(土)午後二時始
名古屋能楽堂

狂言 蝸牛
武悪

S席 八千元 A席 七千元
B席 六千元

青陽会定式能(第48期)

二月七日(土)十一時開演
名古屋能楽堂

能組

仕舞 卷 絹キリ 今沢 美和 地謡 星野 路子
久田 勘助 飯富 雅介 河村総一郎 大野 誠
替之型 後見 上野 嘉宏 今沢 美和 須部 正邦
梅田 邦久 地謡 前野 郁子 古橋 正邦
高島 良一 加賀 敏彦 須部 正邦
八神 孝充 地謡 高島 良一 加賀 敏彦

狂言

知 章 上野 嘉宏 高島 良一 加賀 敏彦
東 北クセ 加賀 敏彦 地謡 高島 良一 加賀 敏彦
自然居士 須部 孝充 地謡 高島 良一 加賀 敏彦
車 僧 八神 孝充 地謡 高島 良一 加賀 敏彦

能

蝉 丸 清沢 一政 三村 恵子
高安 勝久 柳原富司忠 鹿取 希世
橋本 幸 杉江 元 河村真之介 加藤 洋輝
後見 今沢 美和 地謡 前野 郁子 古橋 正邦
前野 郁子 地謡 加賀 敏彦 須部 正邦
今沢 美和 加賀 敏彦 地謡 高島 良一 加賀 敏彦

狂言

太刀奪 佐藤 友彦 鹿島 俊裕
今枝 郁雄 後見 大野 弘之

能

山 姥 星野 路子 近藤 幸江
杉江 元 河村真之介 加藤 洋輝
白頭 間 相元 正樹 後藤嘉津幸 大野 誠

附祝言

主催 青陽会
名古屋市中区東区一社三の二六二
久田 勘助 司方
電話 〇五二・七〇五・一五八五

当日券三千元
学生券千円
取扱い チケットぴあ(052・320・9999)及び出演者宅



鍊仙会

観世 栄夫
観世 鍊之丞

壺泉会

泉 嘉夫

名古屋市中昭和区山手通3・8・2・306
電話(〇五二)八三三・三三二五
西宮市甲陽園目神山町二丁目二二五
電話(〇七九八)〇二四・四五八

観世芳宏門人会

観世 芳宏

観世芳伸

大江 能楽堂

大江 将董

大江 信行

財団法人 鎌倉能舞台

中森 晶三
中森 貫太

名古屋橋岡会

名古屋市中昭和区丸屋町五ノ三五
山田紀子方

淡交会
橋岡 慈観

大垣浦声会

稽古場 大垣市伝馬町大垣別院
電話 〇五八四・七三三・三六二

浦田 保利
浦田 保浩
浦田 保親
名古屋市中左京区下鴨芝本町五八
電話 〇七五七・八一七・〇三〇

名古屋修諷会

梅若修一

松音会

泉 泰孝

泉 雅一郎

春鶯会

梅若善高

豊中市新千里南町三丁目18番12
電話 〇六〇六・八三一・七八五・四
東京都杉並区高円寺南4丁目27番7
電話 〇三三三・三三二・一〇五七

山本章弘

〒560-0021 豊中市本町6-10-6
電話 〇六(八八四)六三三・三六九

初陽会

武田 宗和

稽古場 名古屋市中種区今池四丁目15-3 浅井ビル
電話 〇五二七・三三三・三七三六

上田観正会能楽堂

上田 観正会 TEL 〇七八一
社団法人 観正会 六九一・一五四・四九
上田 観正会

大公拓貴

武田謳楽会

武田 欣司
武田 邦弘

下田雄三

雄諷会中部地区連合会

名古屋和石会
一宮竹石会
岐阜花竹会
下呂雄諷会
倭文之屋社中

梅春和男

〒545-0004 大阪市阿倍野区文の里3-16-17
電話 〇六(六六二)一一二・二一九

賀水会

桑名賀水会
名鉄百貨店友の会
花農の会
加賀敏彦

〒463-0005 名古屋市中山区森孝二丁目七〇九
電話 〇五二・七七二・一八九・四五番

名古屋観世会定式能(初回)

二月八日(日)十二時半開演
名古屋能楽堂
素謡
久田 勘助 上野 嘉宏 地謡
清沢 一政 小島 一英 親世 芳伸 祖父江 修一

雲林院

片山九郎右衛門 杉江 元
高安 勝久 河村真之介 加藤 洋輝
相元 正樹 福井啓次郎 藤田六郎兵衛
松田 高義

宝之笠

狂言 野村小三郎 野村又三郎 松田 高義
後見 親世 芳宏 高島 良一 古橋 正邦
藤井 徳三 地謡 本田 勲 梅田 邦久
須部 一政 清沢 一政 武田 邦弘

高砂

観世 清和 中村弥三郎 河村総一郎 助川 誠治
後見 小島 一英 松山 幸親 祖父江 修一
片山 清司 地謡 加賀 敏彦 親世 芳宏
上野 嘉宏 久田 勘助

能組

和泉流 能 組
男 井上 祐一 兼主 佐藤 友彦
後見 佐藤 融

鞍馬天狗

飯富 雅介 河村真之介 鬼頭 好信
福井啓次郎 竹市 学

取扱所 名古屋能楽堂(0522-231-0088)
チケットぴあ(0522-320-9999)
市内プレイガイド

名古屋観世九阜会能

二月十五日(日)午後一時始
名古屋能楽堂
中所 眞吾
後見 長沼 範夫 地謡 外山 圭一 中森 貫太
親世 喜之 小島 英明 駒瀬 直也

宝の笠

狂言 井上 靖浩 今枝 靖雄 後見 鹿島 俊裕
仕舞 兼平 小林 喜久
巻絹 親世 喜正 地謡 外山 圭一 中森 貫太

能玄象

飯富 雅介 福井啓次郎 助川 誠治
後見 五木田三郎 地謡 佐久間 二郎 小島 喜正
親世 喜之 中森 貫太 駒瀬 直也

附祝言

主催 名古屋観世九阜会
名古屋事務所 名古屋南区元塩町一丁目一七

文化庁芸術団体人材育成支援事業

二月二十一日(土)午後一時半開演
名古屋能楽堂
[対象] 小学校3・4・5・6年
及び中学生とその同伴者

2004年 茂山狂言会名古屋公演

二月二十二日(日)午後二時始
名古屋能楽堂
狂言 番 組
新発意 茂山千之丞
老僧 茂山 千作

前売り S席八千円 A席五千円
問合せ [事務局] 京都市上京区中筋通石薬師上る大猪熊町346
TEL 075-221-8371

笙月会 中川 雅章
〒205 長浜市地福寺町八ノ二九
電話 〇七五〇 〇六三〇 〇番

松盛会 小松 勝憲
松舞台
〒511 三重県桑名市西別所一〇六一の五
TEL・FAX 〇五九四 二三四五八二

洗心会 奥村 富久子
〒606 京都市左京区永観堂西町二〇
電話 〇七五七 〇七六七 〇番

観修会 祖父江 修一
〒507 多治見市日ノ出町2の2
電話 〇五七二 二一三六五六

猶惠会 熊沢 惠美子
〒465 名古屋市中東区平和ケ丘3-76
日車マンション四〇四

重陽会 菊池 重郷
〒484 犬山市犬山字相生五九一-一六
電話 〇五六八 〇四四一 〇番

幸誦会 近藤 幸江
〒444 岡崎市鴨田本町十一番地ノ三
電話 〇五六四 〇二五二 九

千早会 八神 孝充
〒494 岡崎市千種区向陽町2-16
電話 〇五二二 七六二二 〇〇一

恵誦会 三村 恵子
〒445 西尾市住吉町三十一-二
電話 〇五三三 二五九四 〇番

桜月会 加藤 春枝
〒509 可児市卓ヶ丘3-113
電話 〇五七四 六四一三 〇六

名古屋観世会

〒468 名古屋市中区白鳥町二丁目三〇一
島田橋住宅 二三三 電話 〇七五七 二

宝生 英照
〒170 東京都豊島区東池袋五-二二-一八
電話 〇三三九 一五二一 三七六 番

近藤 乾之助

佐野 由於
〒150 東京都渋谷区東2-14-14
〒921 金沢市泉野町4-15-18-108

名古屋翼会 辰巳 孝
辰巳 満次郎

恵美 寿会 衣斐 正宜

衣斐 正宜 後援会

倉本 雅
〒496 名古屋市中区昭和区御器所3-23-19
御器所パークマンション802号
電話 〇五二二 八八二一 五六〇 〇番

宝生 流 嘉 宝 会
〒496 名古屋市中区昭和区川名本町二ノ五

司 宝 会
〒468 名古屋市中区白鳥町二丁目三〇一
島田橋住宅 二三三 電話 〇七五七 二

松野 恭憲 松野 洋樹
〒616 京都市右京区鴨滝泉殿町一八-一三
TEL 〇七五四 六二二四 八番
FAX 〇七五四 六二〇九 八番

(株)大阪能楽会館
〒530 大阪市北区中崎西2-3-17

金剛 永謹

廣田 鑑賞会 廣田 陸一

廣田 幸稔

菊之会 菊扇会 廣田 泰三

廣田 泰三

豊嶋能の会 豊嶋 三千春

金剛流景雲会 能を楽しむ会
宇高通成後援会 宇高通成面乃会
国際能楽研究会 宇高 通成 徳成 成成

松野 恭憲の会

松野 恭憲 松野 洋樹

(株)大阪能楽会館

〒530 大阪市北区中崎西2-3-17

戦後名古屋能楽史

〔第十三章〕

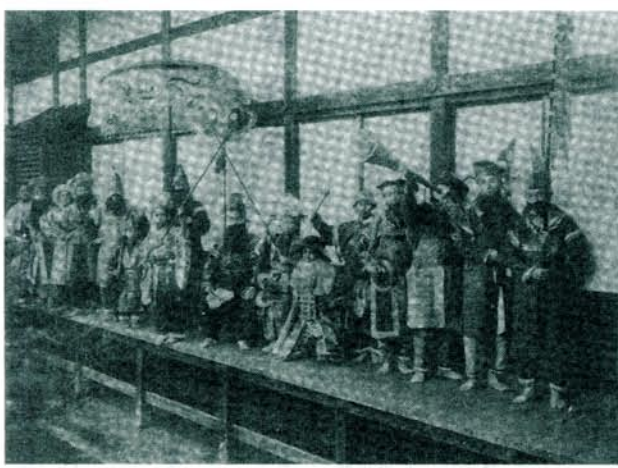
竹尾 邦太郎

昭和二十四年（一九五九）

一月三日、非公開であるが恒例となる能楽協会名古屋支部の新年謡初式。協会支部長田鍋惣太郎は「打ちとけて春のこころや窓の梅」と詠む。俳号は宗和、この名は中部日本雅楽連盟の代表を勤めるときの名でもある。この年、新年の御題「窓」を踏まえる作句である。

また、中部能楽師会理事長西村弘敬も御題に寄せ、謡曲に現われる「窓」の一端、「九識の窓の前（葵上）」の窓の梅の北面は（鉢木）「風月の窓に月を招き（雷電）」風破窓を射て燈消易く（芭蕉）など、解説を付けて「狂言」紙二十二号に蘊蓄を披露する。

一月六日、親世華雪が逝去、享年七十四歳。昭和二十七年五月二十五日、京都金剛能楽堂で親世元義二十三回忌追善能に納めとなる「道成寺・赤頭」を六十九歳で勤めたが、そのとき小鼓で相手をした田鍋惣太郎は、自著の中で「道成寺をお相手した時のこと、乱拍子の中で、素声が重なったようでしたが、後日つぎのようなお葉書をいただきました。乱拍子不都合の事少しも心付かず済ませ跡で



昭和三年、徳川邸の濡縁に勢揃いする「唐人相撲」出演者の面々。シテ王・伊勢門水「狂言」紙100号記念特集号より転載

三月十五日名匠鑑賞能に唐相撲が出来ます。名古屋では五十年振りとか言われていますが、昭和三年天皇陛下御成婚の節、秩父宮殿下が現在の徳川園當時の徳川邸へ御宿泊の時、先代野村又三郎氏の帝王にて、故井上新三郎氏の日本人、故井上菊次郎氏の通辞、其れ共同社全員出演にて御台覧に供した事があります。之は一般公開でなく御前演出でありましたから、全員徳川家所蔵の唐装束で出演しましたが、お座敷の事であり橋掛りもなく行列も余り長く出来ませんでしたし、その上時間の制限もあつて十分な演出も出来なかつたように覚えております。それから考へると今度の唐相撲は総員二十五名、立派な舞台で演出されることだと思つております。茂山千五郎氏を始めとする大蔵流の御一統の清新な演出に共同社々々の協同出演による素晴らしい唐相撲はぜひ御覧頂きたいと存じます。

では著名な医家で、古典芸能に通じ謡は親世元義に学び、小鼓は大倉宗直門で皆伝の腕、著書に「光悦の謡本」繪書店刊がある。二十四日は朝日新聞社が主催する会員制の能楽観賞の会である土曜クラブ。今回は宝生流で会場は松坂屋ホール特設舞台、舞囃子「高砂」辰巳孝、「石神」河村丘造、仕舞「春日龍神」倉本雅、「巴」内藤泰二。二十五日、山部赤人の一首「和歌の浦に」をモチーフとした土岐善磨の新作能「鶴」が喜多会で喜多実により初演され、当地では三月二十八日の第四回中日五流能に再演。

二月十五日、親世会初回は素謡「神歌」早川輝吉・国枝照清、「高砂」親世元正、「隠狸」河村丘造、「花筐」親世元正、独吟「老松」林原蔵、仕舞三番「田村」武田太加志「玉葛」山本博之「岩船」柴田初太郎、舞囃子「唐船」橋岡久太郎、「鉢木」大槻三。昭和二十七年に発会以来、名古屋親世会定式能の初回は宗家の来演が定着。

月が替り三月十四日は洩水青陽会第二期第三回。素謡「経政」真柄米次、「養老」佐藤太俊、仕舞「雲林院」柴田初太郎、独吟「草子洗小町」林原蔵、「東北」大槻秀夫、「齊菜煉」佐藤秀雄、「舍利」河村鉦二。洩水青陽会は発会以来、東西から各会員の師匠筋に当る淡交会（橋岡久太郎）九皇会（親世喜之）親正会（上田照也）親昭会（親世元昭）親衡会（山本博之）清韻会（大槻十三）などから能一番に客演があり、今回は大槻清韻会。翌十五日は三十五回を数える名匠鑑賞能で春は恒例となつて宝生流大会で宗家以下が参集するが、狂言は太鼓「唐相撲」で次の様な紹介がある。「唐相撲は当地舞台にては明治三十六年以來五十六年目の出演にて演者は二十五名にて此曲の装束は当今にては尾州徳川家と、京都茂山千五郎家よりありません。今回は特にならぬ御快諾により演じます次第、今後は当分は出ぬ曲でございます」と。この「唐相撲」上演の快挙に際し、「狂言」紙二十三号も「唐相撲について」と題し、以下の記事を載せる。

さて、番組は「巴」辰巳孝、舞囃子「嵐山」宝生九郎、「唐相撲」茂山千五郎、「千手」宝生英雄、「野口緑久」、「綾鼓」宝生九郎、三役に当地以外からワキ山崎俊助、大鼓下村英一、狂言方茂山家一門、の出演がある。因に「唐相撲」の他の主要な役は日本人・茂山千之丞、通辞・茂山七五三、髭掻き・井上松太郎で異流共演。

三月二十一日、喜多流観賞会春季能。仕舞三番「経政」中尾栄一「放下僧」岡本保道「天鼓」和谷亀二郎、独吟「田村」二井栄逸、「竹生島」女体「喜多実」、「千鳥」茂山七五三、「湯谷」後藤得三、仕舞四番「八島」狩野秀生「殺生石」粟谷幸雄「花月」粟谷新太郎「桜川」喜多節世、「石橋」和島富太郎、ワキに久保田寿の来演がある。なお此の観賞会、春季能と銘打つが秋季能は無い。

- 金剛流 名古屋周屋会 岐阜周屋会 吉川周子
- 金春信高 金春安明
- 本田光洋
- 春敲会 名古屋春楽会 金春穂高 廣瀬瑞弘 廣瀬雅弘
- 伊勢金春会 宇仁田吉邦
- 二井栄逸
- 長田驍後援会
- 喜多流 和谷衡市
- 福王茂十郎
- 高安勝久
- 宝生欣閑
- 植田和光会 植田隆之亮
- 谷田宗二朗
- 楽諷庵舞台
- 幸友会 涛華能
- 福井啓次郎 福井良治 柳原富司忠
- 葵心庵舞台
- 清水利宣
- 飯富雅介 杉江元 橋本正樹 西村信広
- 西村同門会
- 藤田龍吟の会 藤田六郎兵衛
- 大倉源次郎
- 清水利宣

- 〒516-0067 伊勢市中島二丁目26-12 電話(五九)〇一五九番
- 〒509-0817 高槻市桜ヶ丘北町11-25 電話(七三)六九四(五〇)一七
- 〒451-0041 名古屋市中区西區下2-10-9 TEL&FAX 〇五二-五七七一六三四
- 〒532-0003 大阪市淀川区宮原4-4-2 TEL 〇六三-三九七二一三三
- 〒603-8372 京都市北区衣笠街道町31-7 電話(七五)四六三(四八)七五番
- 〒673-0002 明石市松ヶ丘4の3 A6-301 電話FAX 〇七八-九二一三三三四
- 〒176-0004 東京都練馬区小竹町一-五〇-五 電話(三三)三九七二(七三)〇三(三九五五)四七九五
- 〒516-0007 伊勢市八日市場町5-16 電話(五九)六〇五二九八
- 〒515-0073 松阪市殿町1412の3 電話(五九)八二三-〇二二六
- 〒514-2211 津市高野尾町三三五一-四六 電話(五九)二〇〇-六九七番
- 〒603-8372 京都市北区衣笠街道町31-7 電話(七五)四六三(四八)七五番
- 〒516-0007 伊勢市中島二丁目26-12 電話(五九)〇一五九番
- 〒509-0817 高槻市桜ヶ丘北町11-25 電話(七三)六九四(五〇)一七
- 〒451-0041 名古屋市中区西區下2-10-9 TEL&FAX 〇五二-五七七一六三四
- 〒532-0003 大阪市淀川区宮原4-4-2 TEL 〇六三-三九七二一三三
- 〒603-8372 京都市北区衣笠街道町31-7 電話(七五)四六三(四八)七五番
- 〒176-0004 東京都練馬区小竹町一-五〇-五 電話(三三)三九七二(七三)〇三(三九五五)四七九五
- 〒516-0007 伊勢市八日市場町5-16 電話(五九)六〇五二九八
- 〒515-0073 松阪市殿町1412の3 電話(五九)八二三-〇二二六
- 〒514-2211 津市高野尾町三三五一-四六 電話(五九)二〇〇-六九七番

(4面よりつづき) 竹市秀雄が逝去、享年五十八歳。流誌「金剛」四十六号はその死を惜しむ宗家金剛殿・豊嶋弥左衛門・山田仁三郎・大塚一二の、以下の追悼文を掲載する。

竹市秀雄氏を悼む 金剛殿 名古屋に在りて当流のため活躍していた竹市秀雄氏が急逝されたことは、当流の一大損失を蒙ったものといつても過言ではない。竹市氏は、大塚一二氏とともに、老職分山田仁三郎氏を助け、中京金剛流を今日の隆盛に育て上げた当流の功業者である。申すまでもなく名古屋は寺田左門治以来金剛流の古い地盤を有している由縁深い土地柄であるが、氏のような有能の士の営々辛苦がなかったら、今日の堅実な発展は期し得なかつたらう。まだこれからも一大飛躍をしてほしいと思つていた矢先この悲報に接し海に惜しみて余りある痛恨事である。以下略

◆錦秋の舞台から(その二)◆

「忠三郎狂言会」 「名古屋能楽堂定例公演」 「豊田市能楽堂開館五周年記念特別公演」

竹尾邦太郎

「磁石」 宿屋あきらとぐるの人間はシテすつば良暢、雑踏の市で田舎者・正邦に甘言を弄し執拗に搾り寄つてゆくところ、当節の「おれ、おれ」と電話で付け入る隙を狙い、金銭を騙る輩に通じる。良暢の資質の一つとみる人の好き、力演だがそれが表に現われて他人をへてんに掛けるには少々迫力を欠く。しかし、べてんを見破つて危地を脱し、磁石ノ精と壮語して開き直る田舎者に逆襲されれば、その気魄に吞まれて怯むところなど、素直な資質は大いに活きる。一方、田舎者の正邦、はったりは抜身の太刀に垂れ、鞘に納まれば「何とやら気が遠くなる」と、拍子踏みざま飛び上がるや横臥の大仰、大胆鮮烈な技にアビール。忠三郎家と千五郎家、後嗣の激突と言えぬ熱演。(32分)

年を自視し九年ぶりに勤めるシテ太郎冠者・忠三郎、襟濃紺・茶地縞髪斗目着付・紺地半袴・萌黄地瓦履シ文肩衣。主・千五郎の都の伯父・千作へ新六駄・炭六駄を届ける任をさほど嫌がらず引き受けるのは如何にも忠僕の影響。中入あと、幕内は「サーセイ、サーセイ」の牛を追う声から糞笠や肩の酒樽に雪を載き現われる太郎冠者。着付を白地中格子髪斗目に、半袴も黒地に替えて括る旅装はお役目大事、雪中の運びも巧妙に行きてし已まむ、の一心。「吹雪が来るは」と二ノ松先に座り込むも、雪を負ふ十二頭が連なる景に「絵にも描かれまい」と賛嘆、一ノ松から舞台を見遣るところ、愛しさも一入である。

いた竹市秀雄君は、齢、還暦をも待たず、突然三月二十七日の朝急逝されたことは、御家族はじめ朝中一門の悲嘆は元より、私の受けた痛手も到底筆紙につきし難い程大きなものであった。私は、遺体の前で「融」の一節を手向けた時は、万感胸にせまつて、声涙共に下る思いがした。還らぬ愚痴ではあるが、直に惜みてもなを余りある次第である。過去四十有余年を回顧すれば、当地の金剛流にも受難の時代があった。その頃の私はまだ若年未熟であったが、流勢の挽回こそ急務であると、流友増加に及ばずながら、努力を傾注した。永続する人は少なかつたが、その中の大塚・竹市両君こそ、中京金剛流の将来を荷う人と、大いに期待をかけ、私の左右の腕と頼んだ。この二人には豊嶋氏を頼むして、能の研究練習に精進させ、私達は共に手をつらねて努力した結果、漸く中京金剛流も昔日の流勢に戻すことが出来た。水い間、私の片腕として、流儀の発展に協力してくれた君を失ったことは、片腕をもぎとられたような気がする。返すがえすも残念なことをした。空しく散つて行った君を憶い、悲嘆のうちに追憶の一節をしたためて、君の冥福を念じる次第である。一部略

竹市君の死を悼む 大塚一二 思えば、我々がこの道に入ったのは、竹市君が二十才、小生は十七才の頃であった。週二回、雨の日も雪の日も、一度も休むことなく、山田先生の許に通いその手ほどきを受けた。我々の二人の仲良く並んで通う姿が、祇園の芸妓の二人並んで歩く姿にたとえられて、「二ついち」といわれたものだった。とに角二人共に熱心だった。文字通り、廿数年間唯の一回も稽古を休んだことはなれる程で、又それだけに竹市君を失った今、益々その頃がなつかしく思



名古屋能楽堂定例公演 「千鳥」(左から) 佐藤友彦、井上祐一 (杉浦賢次氏撮影)

飲み干して酔魔を払って立てば騎虎の勢いの気宇壮大、六駄の木を茶屋に進呈して身軽になった峠下りは上機嫌に小舞謡「雪山」の一節、へ運び重ね雪山を千代に降れと作らんと、今は難儀な雪も火照る頬に心当てる始末。こうなれば主の伯父・千作との面会も無敵、「物申」も「もの、もおーう」と牛の声色なら、木六駄の行方にも「ホ、そりや筆者の誤ちぢや」と、ぬけぬけ言い退ける押しの一手。応じる千作がまた絶妙の間(ま)で受けキリを締め

骨格確かな、忠三郎のおおどかな味わいがアド・次アドに人を得て十全に發揮された好舞台である。(45分・11月21日・忠三郎)

い出され感慨無量なものがある。昭和二十二年、共に豊嶋先生のお取立てで先代宗家より職分を拝受したが、一人になった今、君の抱いていた芸へのあくことなき精進の念が、全て我身に引き継がれた思いで、君の安らかなる眠りを祈る上にも、自分に課された今後の課題の大きさを今更乍ら感じ、身のひきしまる思いがする。抜粋 以下次号

伊勢・一色能 本年は3月14日開催 四百五十年の伝統を有する一色能は、三月十四日一色町公民館で催される。後援三重県、伊勢市、三重文化振興事業団など。 上演は翁一番、能三番六浦、東岸居士(狸々)、狂言一番三人片輪、舞囃子(清経)、仕舞八番ほか連吟、独吟、独調、独鼓など。連絡先0596・22・1720 土谷方。

大蔵狂言会 大蔵彌右衛門 大蔵彌太郎 大蔵吉次郎 千五郎 千三郎 千五郎 千三郎 千五郎 千三郎

賀新年 富原富司 柳原富司 富原富司 柳原富司 富原富司 柳原富司 富原富司 柳原富司 富原富司 柳原富司

名古屋能楽堂定例公演 「千鳥」(左から) 佐藤友彦、井上祐一 (杉浦賢次氏撮影) 前川光隆 前川光隆 前川光隆 前川光隆

NHK放送予定(平成16年2月~3月)

◆NHK-FM能楽鑑賞(毎週日曜午前7時15分~8時)
2月22日「高砂」(金春流) 桜間金記ほか
2月29日「花盗人」(大蔵流) 山本東次郎ほか
3月7日「班女」(親世流) 藤波重和ほか
3月14日「簾」(宝生流) 三川 泉ほか
3月21日「藤戸」(親世流) 片山慶次郎ほか
3月28日「嵐山」(再)(金剛流) 豊嶋三千春ほか
◆NHK教育テレビ 3月21日(日) 15:00~17:00(予定)
第18回NHK能楽鑑賞会
大鼓連調「羽衣・クセ」河村総一郎ほか
狂言「井杭」野村 萬ほか
能「烏帽子折」関根祥六ほか

能 楽 の 友

発行能楽の友社

名古屋千種区千種2丁目18-18
(郵便番号 464-0858)
電話 (052) 731-7 9 8 4
FAX (052) 733-2 8 3 7
振替口座 00800-6-36393
購読料 1年 1100円
郵送の場合 1年 1800円
一 部 100円

故梅若猶義師33回忌
梅猶会追善能

名古屋、東京、大阪で開催

梅猶会(梅若吉之丞主宰)は本年は故梅若猶義師の三十三回忌にあたり、名古屋、東京、大阪で「梅若猶義三十三回忌追善能」を開催する。日程は次のとおり。
▽名古屋 三月七日(日)
名古屋能楽堂
(番組①面掲載)
▽東京 四月三日(日)
観世能楽堂
▽大阪 九月二十五日(土)
大阪能楽会館
また、平成十六年度の大阪梅猶会定期能の予定番組は次のとおり。
(第1回は一月十八日演能)
◎第2回 六月五日(土) 12時30分
開演、会場 大阪能楽会館
能「蟬丸」梅若善高
能「善竹忠」梅若善高
能「杜若・恋ノ舞」(井戸和男)
能「阿漕」(梅若基徳)

金春流 櫻間眞理師

櫻間右陣を襲名

金春流・桜間家の当主、桜間眞理師は、一月から桜間右陣を襲名され、次のように関係筋にあいさつされた。
今般 桜間家代々の当主名の一つであります櫻間右陣(紋理右陣)の名跡を襲名致しまして、当主として本家分家を継承し、会運営の衝にあたることとなりました。未だ浅学非才の若輩ではございますが、御宗家より祥慶の御詞を頂き、櫻間會職一同並びに会員一同の後援のもとに、精進努力し、能楽及び流儀の隆盛に邁進致す所存でございます。何卒お導き賜り

鳳の会主催

狂言特別セミナー

3月6日 名古屋能楽堂 テーマ「右流左止」

狂言「鳳の会」は、きたる3月6日(土)「第2回狂言特別セミナー」を名古屋能楽堂で開催する。このセミナーは、昨年3月(狂言「千鳥」と津島祭り)のテーマで催され、解説とともに実際の演技も

狂言大蔵流24世宗家

大蔵弥右衛門氏逝去

狂言方大蔵流の二十四世宗家・大蔵弥右衛門氏は一月六日心不全のため逝去された。享年九一。葬儀・告別式は十三日午前十時半から横浜市港北区新横浜の新横浜総合斎場で行われた。喪主は長男彌太郎氏。
故大蔵弥右衛門氏は、明治四十五年、善竹(茂山)彌五郎の次男に

能「楊貴妃」上演

橋岡会(橋岡久馬師主宰)は、三月十四日(日)名古屋能楽堂、三月二十一日(日)宝生能楽堂で、橋岡久馬師の一調「山姥」(太鼓・徳田宗久師)、橋岡久太郎師の能「楊貴妃」を上演する。
また、繊細かつ大胆な作風で注目されている華道家・假屋崎省吾(かりやさき しょうご)師の立花の演出がある。「楊貴妃」の装束には「辻が花」の制作研究に心血を注いだ久保田一竹師(二〇〇三年、八十六歳で逝去)の「一竹辻が花」が用いられて上演される。

富 耀 会

二月二十九日(日)午前十時始
名古屋能楽堂
「囉子」「連調」など二十七番
(五時終了予定)
主催 富 耀 会
主 柳 原 富 司 忠
千四六六一〇八二六
名古屋昭和区流川町四七一四七
サザンビル八事 二一七〇三
電話(〇五二)八三二一〇三一

梅若猶義三十三回忌追善能

三月七日(日)午前十一時三十分始
名古屋能楽堂

阿 漕

仕 舞 小松 勝憲
梅若吉之丞 飯富 雅介 寛 敏一 鹿取 希世
立花供養 井上 祐一 福井啓次郎
後見 山本 章弘 井戸 良祐
大西 智久 梅若 善久
梅若 善高 梅若 善久 梅若 善久 梅若 善久

善 知 鳥

仕 舞 梅若 善久
隅田川 梅若 善久
梅若 善久 梅若 善久 梅若 善久 梅若 善久

呂 蓮

狂 言 野村又三郎
松田 高義
野村小三郎
後見 伴野 俊彦

花 籠

舞 囃子 熊澤恵美子
河村眞之介
後藤孝一郎 竹市 学
地謡 井戸 良祐 池内幸三郎
大西 礼久 池内光之助

鐘 之 段

舞 大西 智久
観世 栄夫
池内幸三郎
池内光之助

道 成 寺

梅若 猶義 杉江 元
高安 正樹 河村総一郎
相元 正樹 柳原富司忠
赤頭 野村小三郎 藤田六郎兵衛

追 加

入場料 A席(正面指定席) 一〇〇〇円
B席(指定席) 七〇〇円
自由席 三〇〇円
三〇〇円
熊澤恵美子方
梅若猶義事務所
梅若猶義事務所
梅若猶義事務所
梅若猶義事務所
梅若猶義事務所

富 耀 会

二月二十九日(日)午前十時始
名古屋能楽堂
「囉子」「連調」など二十七番
(五時終了予定)
主催 富 耀 会
主 柳 原 富 司 忠
千四六六一〇八二六
名古屋昭和区流川町四七一四七
サザンビル八事 二一七〇三
電話(〇五二)八三二一〇三一

上野嘉宏独立披露能

4月4日 名古屋能楽堂

観世流シテ方・上野嘉宏師は平成七年から片山九郎右衛門師に師事してきたが、このたび独立し、きたる四月四日(日)名古屋能楽堂で独立披露能を開催する。

なお今後は片山門下・梅田邦久師の芸事上後継者として精進する。

独立披露能の演目概要は次のとおり。

素謡「神歌」(梅田邦久、梅田嘉宏)、舞囃子「高砂」(片山慶次郎)

能「屋島」(大事)シテ片山清司、ツレ片山伸吾、ワキ飯富雅介

狂言「末廣」(野村又三郎)

能「楊貴妃」上演

豊田市能楽堂3月公演

豊田市能楽堂は三月定例公演として、三月二十七日(日)、観世流能「楊貴妃」、和泉流狂言「無布施経」を上演する。午後一時半開場、午後二時開演。

演能は次のとおり。

解説 岩田はるみ

狂言(和泉流)「無布施経」
法華僧・三宅右近、何某・三宅右矩、後見・高沢祐介

能(観世流)「楊貴妃」
シテ・浅見真州、ワキ室生欣哉、アヒ三宅右近

笛・杉市和、小鼓・林光寿、大鼓・河村総一郎

後見・北浪昭雄、浅見慈一
地謡・山本順之、若松健史、浅井文義、西村高夫ほか。

主催/豊田市・豊田市教育委員会、共催/豊田市文化振興財団

入場料(全席指定) 正面席六千円、脇正面席五千円、中正面席三千円。

チケット販売は豊田市能楽堂(豊田市西町一丁目二〇〇番地) ☎0565・35・8200、チケットぴあ(☎0560・02・9999)

戦後名古屋能楽史

[第十三章]

竹尾 邦太郎

昭和三十四年(一九五九)

(承前)

三月二十八日、中日五流能としては初めて使用する愛知文化講堂での催能。前年度が抜けて第四回(以後は第六回の四月二日を除き例年三月の最終日曜日に定着し、

常滑「狂言の世界」

2月28日文化会館

常滑市民文化会館 自主事業公演

篠山・能楽資料館

兵庫県篠山市の能楽資料館は、昨年九月十二日、館長の中西薫氏が七十一歳で逝去されたが、その後の運営として子息の中西薫氏が館長に就任、運営の衝にあたることになった。

故中西薫氏は、古陶磁や古典芸能を中心に、芸能文化全般にわたる書籍を多く保有していたので、館内に「記念文庫」として図書室の開設が計画されている。

資料館の役員、運営担当は次のとおり。

館長・中西薫▽副館長・中西光美▽学芸主任・中西文枝▽参与・小山泰三(芸能文化雑誌「紫明」編集長)

能楽資料館 兵庫県篠山市河原

名古屋能楽堂 春の企画陳列

「能装束展」

名古屋能楽堂の春の企画陳列の「能装束展」は、二月七日(日)から三月三十日(火)まで「長絹」を主に展示している。出展は次のとおり。

①名古屋大能楽装束長絹仕立「杜若」 銘「想(おもい)」

②萌葱地髪斗に垂れ藤文様長絹

③能面制作工程(小面)

④紫地扇面に萩桔梗文様長絹

⑤能面 小姫

⑥能面 若女

⑦能面 増女

⑧紅地鳳凰文様長絹

⑨羽衣図屏風

梅若六郎の会

三月十三日(土)午後一時三十分始

名 古 屋 能 楽 堂

原 作 W.B.イーツ
能本作者 横道萬里雄
曲節作者 観世 寿夫
演 出 梅若 六郎

鷹 姫

梅若 六郎
山本 則重
梅若 晋矢

大日方 寛
山崎 正道
鷹尾 維教
小田切康陽
角当 直隆
鷹尾 章弘
山中 逞晶

梅若 六郎
山本 則重
梅若 晋矢

笛 藤田六郎兵衛
小鼓 大倉源次郎
大鼓 亀井 広忠
太鼓 観世 元伯
後見 波多野 晋
古橋 正邦
赤瀬 雅則

能 土 蜘蛛

主 人 山本東次郎
主 人 山本 則秀

怪 土蜘蛛 梅若 六郎
胡 光 梅若 晋矢
ト モ 山中 逞晶

一人武者 宝生 開
郎 等 殿田 謙吉
下 人 山本 則秀

笛 藤田六郎兵衛
小鼓 大倉源次郎
大鼓 亀井 広忠
太鼓 観世 元伯
後見 波多野 晋
赤瀬 雅則

梅田 邦久
久田 勘助
古橋 正邦
山崎 正道
鷹尾 維教
小田切康陽
角当 直隆
鷹尾 章弘

橋岡会 能

三月十四日(日)午後二時始

名 古 屋 能 楽 堂

一調山 姥 橋岡 久馬
太鼓 徳田 宗久

華道立 花 假屋崎晋吾

能 楊貴妃 橋岡久太郎
福王 和幸 河村総一郎
後藤孝一郎 藤田六郎兵衛

問 小笠原 匡
後見 梅若 修一ほか
地謡 橋岡 久馬ほか

主催 橋岡 岡 会
協賛 久保田一竹美術館/一竹工房

入場料 全席指定 A席一万円、B席八千円
お問合わせ、申込み ☎043・462・7720
橋岡会 ☎0570・02・9999

名古屋能楽堂定例公演

狂言づくし

三月十九日(金)午後六時三十分始

名 古 屋 能 楽 堂

(和泉流) 素囃子 羯 鼓
大鼓 河村真之介 笛 大野 誠
小鼓 福井啓次郎

(大藏流) 狂言 節 分 鬼 善竹 十郎 女 善竹富太郎
後見 善竹大二郎

(和泉流) 狂言 弓矢太郎 太郎 佐藤 友彦
立 立 井上 靖浩
今枝 靖雄
林 泰礼
鷺見 政行
鹿島 俊裕
後見 大野 弘之

当屋 井上 祐一
太郎冠者 佐藤 融
立頭 井上 靖浩
今枝 靖雄
林 泰礼
鷺見 政行
鹿島 俊裕

NHK大阪局だより

(①面NHK放送関連)

3月21日放送 観世流謡曲「藤戸」
出演：片山慶次郎、武田邦弘、片山伸吾、青木道喜、分林道治

3月29日(月) 能「鷹姫」梅若六郎演出
会場：NHK大阪ホール ※有料
午後7時開演
出演：梅若六郎、野村万斎、大槻文蔵ほか
主催/NHK きんきメディアプラン
問い合わせ リバティコンサーツ (☎06・6233・8771)
全席指定 9,000円

「入場料」(全席指定・税込)

A席13,000円、S席11,000円、お問合わせ・お申込み 名古屋梅若六郎後援会 ☎058・837・0696
名古屋能楽堂 ☎0570・02・9999
チケットぴあ ☎0560・02・9999

(2)面よりつづく
 三月二十八日、中部日本新聞社主催の新作能「鶴」の初演が、二十五日東京目黒の喜多能楽堂で行われた。これは中勘助氏の童話「つるの話」の美しい物語に魅せられた喜多実師が、短くて重量感があり、だれにでもやっても楽しめるもの、というねらいで土岐善磨氏に詞章を依頼、金春惣右衛門(太鼓、藤田大五郎(笛)、安福春雄(大鼓)、幸四郎(小鼓)の囃子方と力を合わせてようやくとめ上げたもの。

を口ずさんだところ、波の音にまぎれて同じことばが聞えるのでふしぎに思っていると、一羽の鶴(シテ喜多実)が現われて昔語りをする。それは平城の帝が和歌の浦へ行幸のおり、幾千羽の鶴が故郷へ帰るのを延ばしてその日を待つていると聞き帝は喜んで山辺赤人に鶴の歌を求めた。赤人はあまりの美しさにことばも知らなかったが、そのときにわか風が吹き、打ち寄せる大波に驚いた鶴が一せいに羽ばたいたので、赤人はたまたま濁をなみ背をさして田鶴なきわたりと万葉に残る歌を得た。鶴は語り、わたしこそ昔ながらの美しい風光に感じ「沖つ島ありその玉藻潮干満ちて…」の古歌



あびこ喜久三氏撮影 土岐善磨著『新作能縁起』より転載

いう筋でいろいろ新しい試みがあり客席に深い感動を与えていた。**完成までに苦勞**
 楽屋で実師は「やってみたいと思ったのは中さんの作が雑誌に出たときだから、もう五年にもなるでしょう。現行曲の『鷲』と筋も白い鳥という点も似ており、『鷲の舞』のいい型もあり、生み出すのに苦心した。土岐先生と上野動物園へ行き鷲は真直く飛び立つのに、鶴は斜めに舞い上るといった違い、雄の一声に続いて雌が二声三声鳴きながら飛ぶことなど教わったり、みんなで苦勞してまとめた。初演といつても私としては試演のようなもので、名古屋の五流能までにもつとみろきあけて、いもものにしたかと思っっています」と語っている。

さらにはまた能評家の西田三好氏は「作者はこれまでの能になかった新しい手法をいくつも試み、それが成功している。増面に朱一色の水衣を着た前シテの姿は清純でしかも新しい感覚がみられる。鶴の生感を極度にあらわそうとした努力が至るところに見られ、武智鉄二の『能様式夕鶴』を思わせるような場面もあるが、演技的にはこの方がはるかに優れている」とその感想をもらしていた。

者土岐善磨氏の「新作はあくまで既成能のワケ内で新味を出す」との方向を示すものと見られる。後シテで、羽ばたきが数回あったが、これもそのつど、型を変えていて目障りにならないのは苦心のあとが見える。最もよいのはキリの引込みで、シテが両袖を巻いて大きく左右にあげ、空を飛ぶように幕に入ったが、あとも鶴が青空高く、遠くあなたへ飛び去っていきうよう、しかも下から見ているような感じを与えているのがよい。喜多流伝統の舞込みをここので見せてくれたのである、と。

大阪でもこの二年後の昭和三十年六月十九日、大阪朝日会館での「能を楽しむ会」で上演された。好評をもって迎えられた「鶴」であったが、中日五流能で再演後の名古屋での上演は皆無である。
 翌三月二十九日は恒例となった名古屋能楽倶楽部の公演。第八回を数えて所前日の中日五流能の後を受け大観衆を収容する文化講堂、「狂言」紙第二十二号は此の壮挙を次のように称えている。「地元の能楽アマチュアの集り、名古屋能楽クラブでは、幹部の水藤(又吉)氏が商売ソッチのけのけの様に、三月二十九日の日曜日朝日狂言会について

古来市民の狂言への関心の高いのも当然である。それでいて、限られた愛好者以外、広く大衆を対象とした公開の狂言会が開かれることには、余り少ないとはいえない。この「狂言の夕」が催されるようになったのも、ごく最近のことである。いろんな意味で、こうした催しがあることもあっていい。それは古典の理解に、現代芸能への反省に役立つこと多大であろう。朝日新聞社が狂言共同社と協力して「朝日狂言会」を催すのもこの趣旨に外ならない。広く各位の御支援を願って止まない。
 前田満徳はこの頃、昭和三十年代前半、金剛流大塚(二)の清風社の中に在って仕舞や舞子に度々出演して居り、著書に『芸能人と語る』、没後、昭和四十二年から二十年間、本紙に書き継がれた『観能独語』がある。また、狂言共同社同人の歌村彦四郎は「狂言」紙第二十二号のコラム「狂言人語」に次の様に書く。

でも、近年とくに関心を持たれて見られるようになった狂言を、ひろく鑑賞せられるようにと、名古屋にも朝日狂言会を企画されたことは、誠に時を得たものと思えます。
 そこで我が共同社も、これまでに毎年催して来ましたが「狂言の夕」を解消して朝日狂言会に同調することにはいたしました。ついては共同社を主体として東西の名手を交代に招聘、その至芸を鑑賞することとし、第一回を来る四月五日に公開いたします。今回は狂言の最長老にして只一人の芸術院賞受賞者、無形文化財指定の茂山弥五郎師をお招きすることにはいたしました。何卒御期待の程を御願いたします。「写真は第一回公演の案内の表紙」
 番組は世が世ならば和泉流を抱える尾張藩主の徳川義親公のおはなしの後、「福の神」茂山弥五郎、「墨塗」佐藤卯三郎、「連歌盗人」茂山喜三、「蟹山伏」井上松次郎、「花折」石田喜樹・歌村彦四郎。なお当日、熱田神宮能楽殿の在る神苑は、咲きも残らず散りも始めぬ満開の桜だった。
 以下次号

◆歳晩から新春の舞台◆
 「梅猶会定期能」「豊田市能楽堂五周年記念狂言づくしの会」「金剛定期能」と「名古屋能楽堂正月特別公演」
 竹尾邦太郎

「花籠」シテ照日ノ前・光之助、君の残した文「急ぎ見参らせ候はん」とは言い条、胸騒ぎ押し鎮めるか、徐に文を開き静かに読むところ、また、読み終えへ御花籠、で花籠の把手を右手で愛しげに撫で下ろすところ、心情切なく伝える短い前場が佳。後場は、櫛白二の他は鬘帯・着付摺袴・唐織を替えるので、宿に戻り取る物も取り敢えず君を追う姿には見えな

と相俟ち心の内奥に迫り上々。子は梅若雄一郎君、容儀乱さず気品は正に君(天皇)の存在感、願わくは還幸も興でして欲しかった。
 (1時間7分)
 「文荷」衆道男色 狂いの主、千吉から二人して文を届けさせられる太郎冠者・千五郎と次郎冠者・茂、文を交替で持つは煩わしい、と途中で竹竿に結び付け、二人で荷なう素つ頓狂。目的が目的とて主を小馬鹿にして「恋重荷」のくさり謡いながら巫山戯散らしく往くところ、息も合い、へそも文は何の重荷ぞ、と一服すれば、あろうことか文を読み出す始末。父との共演に気合の入る茂の直向きさが爽やか。なお、他流のように文を荷なう中に文が前へずれて先肩の太郎冠者が「いかう重うなつた」と文荷を言う場のない

のは、可笑しみを淡泊にいよいよ。(18分)
 「玄象」師長・基徳、風折鳥帽子・襟浅黄・紫地厚板着付・白大



口・萌黄長絹、渡唐の門出の氣負い仕える従者ワキ和夫・敬三・順三の道行の連吟にみる。一方、

一日「狂言ブーム」ということがいわれた。このころは、そうしたブーム呼ばわりをする者はいなくなつたようだが、これは狂言への関心が薄れたということではあるまい。むしろ、古典芸能の中に占める狂言の位置が安定した証拠と見る方が妥当ではあるまいか。能という歌舞劇の影響が、歌舞伎の発展に大きく作用したことはいうまでもないが、そのためにこれまで本筋からはずれてママ子扱いとされてきた狂言という科(しぐさ)白(せりあ)劇が、現代劇または新劇の発達に伴って、正当な評価をうけるようになった……というのが「狂言ブーム」のもつ意義だと思ふ、いまでは、演劇関係者は、俳優といわず演出者といわず、もはや狂言を無視できないところまで来ている。
 名古屋は和泉流の本城である。

「おわびとお断り」
 先月号掲載の写真、年月不詳につき、「昭和三年」を削除します。

「因州侯旧蔵能面に関する考察」
 保田紹雲氏の論考
 能面研究会面紹社主宰の保田紹雲氏は、このたび「名古屋芸能文化13号」に「因州侯(鳥取藩池田家)旧蔵能面に関する考察」と題した論考を発表した。
 内容はB5版41頁に及び研究の発表、大正八年六月に因州池田侯爵家御蔵品の売立があり、その数は七九一面とされている。徳川幕府の所持した面数は、観世宗家蔵「諸家面目録」に計二百三十五面。さらに他にも面のあることが示唆されるがまた因州池田家の本家筋である備前岡山藩池田家で、明治二十八年(一八九五)作成され

朝日狂言會
 昭和三十年四月五日(日)午前一時
 会場：名古屋市中区小橋通一丁目
 主催：朝日新聞社

朝日狂言會
 主催：朝日新聞社
 共催：名古屋新聞社



豊田市能楽堂5周年記念狂言づくしの会
「室町歌謡組曲・遊びをせむとや」
茂山千之丞・藤田六郎兵衛 (杉浦賢次氏撮影)

「口真似」到来の酒の相手を探す主アト下三郎に自薦する太郎冠者シテ千五郎、あっさり拒絶されれば面白くなる。で、太郎冠者が連れてきたのが何某。次アトあきら、それが名うての酔狂者と知る主は大慌てである。粗相を恐れ「身共が云ふやうにする様にせい」と太郎冠者に命じ、「お盆を出せ」と言えば、文字通りの鸚鵡返し「お盆を出せ」と何某に伝えられる。魂胆がありそうでも面には見せず忠勤ぶりを極め込み主を窮地に陥れる太郎冠者、虚を衝かれ感無しの主、余所の座敷で為す術も無く立ち往生の何某、太郎冠者に転がされ両袖打って立つと「これは迷惑」のトメ。入門者向けの軽い曲で元々鼎立する役柄を、今や脂が乗り切っている三人が互いに役を喰ひかねない勢いで、活き活きと超のつく熱演は聊か過ぎるか。(20分)

「業平餅」シテ業平・千作、和歌の神を祀る玉津島神社詣りに供揃えの一行は自身を含め総勢五名、途次、茶屋・千之丞に憩うと傘持・千五郎を一人残して後は切戸へ消えるとはいえず、稚児などを欠き行列は少々寂しいが、後場の餅を巡る茶屋と業平の問答は一種禪味の円熟。貨幣経済に暗い上つ方と経済観念の発達した市井の茶屋、空腹を満たすに歌など無力と知る業平は、餅を目の前にして居たままに思ひの丈は餅尽しの小舞。動けば更に腹が減るものを千作はそれを空き腹でばてる姿に見せ、尻餅ついて眺め入る、とへたり込むの

③(面よりつづき)
汐波ノ漁翁シテ和男、老いの労苦はせめて土地の景を愛で忘れよう、と姥ツレ雅一との掛合に真情をみせる。汐波みの場合は「わくらには」と田子を振って投げ出すが、不快な音をたてなかつた手際の良さが光る。宿を借り、乞われ師長が「玉の小琴を」と扇を開き琵琶に擬し弾くところは、笛(啓三)のアシラヒ嬢々と一段の興趣である。夜雨や管弦の障り、と扇を畳み弾くを止めれば、シテの不審にワキが応える辺りも引き立つ。ここで両音の調律を図る型所は立って脇正へ、苦をへさつと書き、と扇を左から右へハネル様にシテの器量を知って恥じ入る師長の、発って行くを引留めるシテ、更には素性明かし消えるシテとツレの中入、劇的情趣はよく消化されて見えぬ。アイは師長ノ下人・正邦、土烏帽子・段廻斗目着付・括袴・掛素袍・小刀の立上杖。立シヤベリは三面の琵琶の事、就中、龍宮の「獅子丸」には委曲を尽くし十分余の長舌に精彩、後場へすりと繋ぐ。

「伯母が酒」シテ男・千五郎、酒屋管む各齋な伯母・七五三から意地にかかっても酒にありつこうとするが阿波道徳はてんで効かない。木で鼻を括った様な対応で難攻不落を思わせる七五三が出色。さらば、と伯母の癖を知る甥は鬼に変装して強迫、まんまと酒にありつくと、飲むうち飲み易いようになり鬼の面を弄ぶ横着は、伯母を騙して陥落させた快感に酔うかの千五郎、兄弟息の合った舞台は千作・千之丞を彷彿させる。(28分)

「巻箱」勅により三熊野に巻箱を納める都ノ男ツレ克紀、途次、梅の香に誘われて音無天神に立ち寄り、一手手向けるうち期日に遅延、勅使ワキ勝久の勘気に触れ縛めの身となるが、音無天神が巫女シテ永護に乗り移り放免を嘆願、軽輩が歌など疑問視するワキの不審を晴らし男を解き放つ。金剛

が茶屋の視覚に訴え絶妙なら、千之丞は餅の代価は娘の藝に奥勤めへの斡旋依頼の打算の巧妙。商談成立、皆そうに餅を頼る業平に氣付き、やおら身を起こす傘持がシテ柱に手を掛け、恨めしそうに顔で業平を凝視すると生唾飲み込み、諦めて再びころんと背を向け横臥する点景もまた良い。キリは娘・正邦が醜女と分りあたふたする常套のパターン(写真)だが、大柄な娘の面・乙(おと)はブスどころか寧ろ可憐に見えた。精神(心)を癒す歌の雅と肉体腹を癒す餅の俗との対照が面白い。(35分)

「三人長者」アト近江の高義・小アト大和の小三郎・シテ河内の又三郎、それぞれ都へ上り、上頭(うえとう)・地頭に対して都に居る庄園領主)から各人長者号を許されて各々その称号の謂れを語り、喜びに連舞を舞う(写真)。更にはエスカレートして「何れも劣らぬ錢持ち金持ち」と自画自讃の太平楽で舞下メ。他愛のない話で上演も稀な脇狂言、翁付番組なら本来脇能の次に並べられるのが筋。各々の扇の模様は松・竹・梅、掛素袍は全員折鶴文様が目出度い。(24分)



名古屋能楽堂正月特別公演
④「三人長者」左より松田高義、野村又三郎、野村小三郎
⑤「養老・水波ノ伝」久田勲鶴 (杉浦賢次氏撮影)

「養老・水波ノ伝」置敷でなく真ノ次第でワキ勅使・勝久の出、威風凛爽気持がよい。ツレ幸親を先立てシテ勅使は杖を突き出る。面小牛尉・襟浅黄・小格子着付・白大口・朽葉色水衣の品がよ。ワキに瀧の名の謂れを問われ、ツレとの同吟(老を養ふ故に、でト)と杖を突き、養老の瀧とは申すなり、と言いつつ心は自得の境。飲み慣れた水は「袖ひちて掬ぶ手の影さへ見ゆる山の井の、水に薬効。右袖杖共に左に取るところ心持をみせる。中入はツレより先、ツレは音楽聞え花降る奇瑞に遭い「只事と思はれず」と来序で入る。

「三人長者」アト近江の高義・小アト大和の小三郎・シテ河内の又三郎、それぞれ都へ上り、上頭(うえとう)・地頭に対して都に居る庄園領主)から各人長者号を許されて各々その称号の謂れを語り、喜びに連舞を舞う(写真)。更にはエスカレートして「何れも劣らぬ錢持ち金持ち」と自画自讃の太平楽で舞下メ。他愛のない話で上演も稀な脇狂言、翁付番組なら本来脇能の次に並べられるのが筋。各々の扇の模様は松・竹・梅、掛素袍は全員折鶴文様が目出度い。(24分)

「養老・水波ノ伝」置敷でなく真ノ次第でワキ勅使・勝久の出、威風凛爽気持がよい。ツレ幸親を先立てシテ勅使は杖を突き出る。面小牛尉・襟浅黄・小格子着付・白大口・朽葉色水衣の品がよ。ワキに瀧の名の謂れを問われ、ツレとの同吟(老を養ふ故に、でト)と杖を突き、養老の瀧とは申すなり、と言いつつ心は自得の境。飲み慣れた水は「袖ひちて掬ぶ手の影さへ見ゆる山の井の、水に薬効。右袖杖共に左に取るところ心持をみせる。中入はツレより先、ツレは音楽聞え花降る奇瑞に遭い「只事と思はれず」と来序で入る。

「養老・水波ノ伝」置敷でなく真ノ次第でワキ勅使・勝久の出、威風凛爽気持がよい。ツレ幸親を先立てシテ勅使は杖を突き出る。面小牛尉・襟浅黄・小格子着付・白大口・朽葉色水衣の品がよ。ワキに瀧の名の謂れを問われ、ツレとの同吟(老を養ふ故に、でト)と杖を突き、養老の瀧とは申すなり、と言いつつ心は自得の境。飲み慣れた水は「袖ひちて掬ぶ手の影さへ見ゆる山の井の、水に薬効。右袖杖共に左に取るところ心持をみせる。中入はツレより先、ツレは音楽聞え花降る奇瑞に遭い「只事と思はれず」と来序で入る。

「三人長者」アト近江の高義・小アト大和の小三郎・シテ河内の又三郎、それぞれ都へ上り、上頭(うえとう)・地頭に対して都に居る庄園領主)から各人長者号を許されて各々その称号の謂れを語り、喜びに連舞を舞う(写真)。更にはエスカレートして「何れも劣らぬ錢持ち金持ち」と自画自讃の太平楽で舞下メ。他愛のない話で上演も稀な脇狂言、翁付番組なら本来脇能の次に並べられるのが筋。各々の扇の模様は松・竹・梅、掛素袍は全員折鶴文様が目出度い。(24分)

「三人長者」アト近江の高義・小アト大和の小三郎・シテ河内の又三郎、それぞれ都へ上り、上頭(うえとう)・地頭に対して都に居る庄園領主)から各人長者号を許されて各々その称号の謂れを語り、喜びに連舞を舞う(写真)。更にはエスカレートして「何れも劣らぬ錢持ち金持ち」と自画自讃の太平楽で舞下メ。他愛のない話で上演も稀な脇狂言、翁付番組なら本来脇能の次に並べられるのが筋。各々の扇の模様は松・竹・梅、掛素袍は全員折鶴文様が目出度い。(24分)

「三人長者」アト近江の高義・小アト大和の小三郎・シテ河内の又三郎、それぞれ都へ上り、上頭(うえとう)・地頭に対して都に居る庄園領主)から各人長者号を許されて各々その称号の謂れを語り、喜びに連舞を舞う(写真)。更にはエスカレートして「何れも劣らぬ錢持ち金持ち」と自画自讃の太平楽で舞下メ。他愛のない話で上演も稀な脇狂言、翁付番組なら本来脇能の次に並べられるのが筋。各々の扇の模様は松・竹・梅、掛素袍は全員折鶴文様が目出度い。(24分)

「三人長者」アト近江の高義・小アト大和の小三郎・シテ河内の又三郎、それぞれ都へ上り、上頭(うえとう)・地頭に対して都に居る庄園領主)から各人長者号を許されて各々その称号の謂れを語り、喜びに連舞を舞う(写真)。更にはエスカレートして「何れも劣らぬ錢持ち金持ち」と自画自讃の太平楽で舞下メ。他愛のない話で上演も稀な脇狂言、翁付番組なら本来脇能の次に並べられるのが筋。各々の扇の模様は松・竹・梅、掛素袍は全員折鶴文様が目出度い。(24分)

「三人長者」アト近江の高義・小アト大和の小三郎・シテ河内の又三郎、それぞれ都へ上り、上頭(うえとう)・地頭に対して都に居る庄園領主)から各人長者号を許されて各々その称号の謂れを語り、喜びに連舞を舞う(写真)。更にはエスカレートして「何れも劣らぬ錢持ち金持ち」と自画自讃の太平楽で舞下メ。他愛のない話で上演も稀な脇狂言、翁付番組なら本来脇能の次に並べられるのが筋。各々の扇の模様は松・竹・梅、掛素袍は全員折鶴文様が目出度い。(24分)

「三人長者」アト近江の高義・小アト大和の小三郎・シテ河内の又三郎、それぞれ都へ上り、上頭(うえとう)・地頭に対して都に居る庄園領主)から各人長者号を許されて各々その称号の謂れを語り、喜びに連舞を舞う(写真)。更にはエスカレートして「何れも劣らぬ錢持ち金持ち」と自画自讃の太平楽で舞下メ。他愛のない話で上演も稀な脇狂言、翁付番組なら本来脇能の次に並べられるのが筋。各々の扇の模様は松・竹・梅、掛素袍は全員折鶴文様が目出度い。(24分)

「三人長者」アト近江の高義・小アト大和の小三郎・シテ河内の又三郎、それぞれ都へ上り、上頭(うえとう)・地頭に対して都に居る庄園領主)から各人長者号を許されて各々その称号の謂れを語り、喜びに連舞を舞う(写真)。更にはエスカレートして「何れも劣らぬ錢持ち金持ち」と自画自讃の太平楽で舞下メ。他愛のない話で上演も稀な脇狂言、翁付番組なら本来脇能の次に並べられるのが筋。各々の扇の模様は松・竹・梅、掛素袍は全員折鶴文様が目出度い。(24分)

「三人長者」アト近江の高義・小アト大和の小三郎・シテ河内の又三郎、それぞれ都へ上り、上頭(うえとう)・地頭に対して都に居る庄園領主)から各人長者号を許されて各々その称号の謂れを語り、喜びに連舞を舞う(写真)。更にはエスカレートして「何れも劣らぬ錢持ち金持ち」と自画自讃の太平楽で舞下メ。他愛のない話で上演も稀な脇狂言、翁付番組なら本来脇能の次に並べられるのが筋。各々の扇の模様は松・竹・梅、掛素袍は全員折鶴文様が目出度い。(24分)

徳川美術館平成16年度 企画展(展示室)案内

- 春季特別展「能と狂言」
 - 展「能と狂言」
 - 笑いの世界
 - 四月十日(出)
 - 五月二十三日(日)
- 古今和歌集成立一〇〇年 記念特別展「古今和歌集の世界」
 - 「古今和歌集の世界」
 - 「やまとうたは人の心をたねとして」
 - 平成十七年一月四日(火)
 - 三月三十日(日)
 - 四季折々に移ろいゆく花鳥風月、出会いや別れ、恋愛などにかかわる人の心情を露露として、三十一文字という限られた文字の中に表現された和歌は、ながらく日本人の心を表現する詩歌として謳い継がれてきました。平成十七年度は、その原点ともいえる最初の勅撰集「古今和歌集」が延喜五年(九〇五)に成立してから一〇〇年目にあたります。「古今和歌集」に謳われた美の世界は、後世の和歌や「源氏物語」をはじめとする物語文学などに大きな影響を及ぼし、絵画や書、さらにはさまざまな工芸品の意匠などにも取り上げられてきました。日本人の心のふるさととも言える「古今和歌集」の世界を見つめていきます。
 - 徳川美術館 名古屋市中区徳川町1017、電話〇五二・九三五・六二六二

発行能楽の友社

名古屋市中種区千種2丁目18-18
(郵便番号 464-0858)
電話 (052) 731-7984
FAX (052) 733-2837
振替口座 00800-6-36393

購読料 1年 1100円
郵送の場合 1年 1800円
一部 100円

NHK放送予定(平成16年3月~4月)

- NHK-FM能楽鑑賞(毎週日曜午前7時15分~8時)
3月21日 「藤戸」(親世流) 片山慶次郎ほか
3月28日 「嵐山」(再)(金剛流) 豊嶋三千春ほか
4月4日 「隅田川」(親世流) 山本順之ほか
4月11日 「右近」「桜川」(宝生流) 近藤乾之助ほか
4月18日 「清経」(喜多流) 香川靖嗣ほか
4月25日 「楊貴妃」(再)(金春流) 桜間右陣ほか
4月10日(土) 9:00~11:15 デジタルハイビジョンにて
「第18回能楽鑑賞会」「烏帽子折」 関根祥六ほか
4月29日(木) 17:30~18:45 BS2にて
新作能「鷹姫」 梅若六郎ほか

能楽の友

「岡崎薪能」上演
「義経と弁慶の出会い」
5月8日 二の丸能楽堂
岡崎市観光協会主催による平成十六年度の薪能は、きたる五月八日(日)「義経と弁慶の出会い」のタイトルで、岡崎城二の丸能楽堂で上演される。午後六時開演。受け付けは定員三百人(ヘア百組二百人、シングル百人、定員になり次第締切り)

福井五郎師50回忌 清華能

6月12日 名古屋能楽堂
幸友会・福井啓次郎師主催による「清華能」は、福井五郎師の五十回忌にちなんで、きたる六月十二日(土)名古屋能楽堂で催される。演能は、金春流能「半部」(シテ桜間右陣)、能「山姥」(シテ桜間金記、舞囃子「経政」(本田光洋)など。(番組詳細後報)

善竹兄弟狂言会

4月25日 大槻能楽堂
狂言方・善竹忠一郎氏の長男・善竹隆平氏と次男・善竹隆平氏による「善竹兄弟狂言会」が四月二十五日(日)大槻能楽堂で開催される。演目は、狂言「雁大名」(大名・私儀)

太鼓方・鬼頭好信師 「義命」と改名

太鼓方親世流・鬼頭好信師は、このたび満五十歳の誕生日を機に「鬼頭義命(ヨシノブ)」と改名。次のようにあいさつしている。
今般 期するところがあり太鼓親世宗家にお話しをし、本年三月二十二日の満五十歳の誕生日を機に鬼頭義命(ヨシノブ)と改名いたします

上野嘉宏独立披露能

四月四日(日)十時開演
名古屋能楽堂
モ吉沢旭、子方・久田勘吉郎、笛・鹿取希世、小鼓・後藤嘉津幸、大鼓・河村総一郎、間・野村小三郎
後見・泉嘉夫、瀬戸三津子、加藤春枝、地謡・久田勘吉郎、山本正人、泉雅一郎、近藤幸江、松山幸親、八神孝充、黒田博、服部俊介
申込方法、①住所②氏名③電話番号を、岡崎市観光協会まで連絡する。岡崎市観光協会電話0564-233-6217
申込み期限 四月二十六日(月)

演能カレンダー

名古屋能楽堂

(TEL 052-231-0088)

- [3月] 19日(金) 名古屋能楽堂定例公演 (有料)
[4月] 4日(日) 上野嘉宏独立披露能 (有料)(番組①面)
10日(土) 青陽会定式能 (有料)(番組①面)
11日(日) 名古屋親世会定式能 (有料)(番組②面)
18日(日) 上野嘉宏独立記念邦謡会春の会 (無料)
24日(土) 狂言・鳳の会 (有料)(番組②面)
25日(日) 幸謡会大会 (無料)(番組③面)

熱田神宮能楽殿

(TEL 052-671-0852)

- [3月] 20日(土) 伝統芸能の会 (要整理券)
[4月] 3日(土) 幸友会 (無料)(来場歓迎)

豊田市能楽堂

(TEL 0565-35-8200)

- [3月] 27日(土) 豊田市能楽堂定例公演 (有料)

演能案内

上野嘉宏独立披露能

四月四日(日)十時開演
名古屋能楽堂

素謡 神歌 梅田 邦久 梅田 嘉宏
舞囃子 高砂 片山慶次郎 寛 敏一 加藤 洋輝
後藤 孝一郎 鹿取 希世
後見 井上 靖浩

連吟 田村

高島 良一
塩見 甫保
須部 勲

胡蝶 正丸 今沢 美和

高橋 敏一
祖父江 修一
清沢 一政
久田 勘助

胡蝶 正丸 今沢 美和

高橋 敏一
祖父江 修一
清沢 一政
久田 勘助

能屋

飯富 雅介

河村 総一郎
柳原 富司 忠
大野 誠

飯富 雅介

河村 総一郎
柳原 富司 忠
大野 誠

竹生鳥 橋本 忠樹

橋本 忠樹
分林 道治
味方 道治
古橋 正邦
河村 博重

狂言末廣

野村又三郎

井上 祐一
松田 高義
後見 井上 靖浩

弓八幡 大江 信行

大江 信行
青木 道喜
橋本 保向
磯道

能羽衣

高安 勝久

河村 総一郎
上田 慎也
藤田 六郎兵衛

難波 若木 小林 慶三

武田 欣司
泉 嘉夫
小島 一英
武田 邦弘

杜若 桜 武田 欣司

武田 欣司
泉 嘉夫
小島 一英
武田 邦弘

西行 桜 武田 欣司

武田 欣司
泉 嘉夫
小島 一英
武田 邦弘

山崎 若木 小島 一英

小島 一英
武田 邦弘

杜若 桜 武田 欣司

武田 欣司
泉 嘉夫
小島 一英
武田 邦弘

青陽会定式能(第248回)

四月十日(土)十一時開演
名古屋能楽堂
入場料 指定席 八〇〇〇円(正面)
自由席 五〇〇〇円
前売券 邦語会 〇五二一八四一四六三二(梅田方)
チケットぴあ 〇五二一三二〇一九九九
市内プレイガイド

能賀

飯富 雅介

河村 総一郎
柳原 富司 忠
大野 誠

能隅田川

飯富 雅介

河村 総一郎
柳原 富司 忠
大野 誠

能賀

飯富 雅介

河村 総一郎
柳原 富司 忠
大野 誠

能隅田川

飯富 雅介

河村 総一郎
柳原 富司 忠
大野 誠

能賀

飯富 雅介

河村 総一郎
柳原 富司 忠
大野 誠

能隅田川

飯富 雅介

河村 総一郎
柳原 富司 忠
大野 誠

能賀

飯富 雅介

河村 総一郎
柳原 富司 忠
大野 誠

能隅田川

飯富 雅介

河村 総一郎
柳原 富司 忠
大野 誠

能狂言を面白くする 全5回シリーズ

豊田市能楽堂の04講座

豊田市能楽堂は、毎年能楽講座を開講して好評を博しているが、本年も「能狂言をもっと面白くする講座」と題して、全五回シリーズのユニークなセミナーを企画、魅力的な講師を迎えて、様々な角度から能狂言の楽しみ方を解説する。能狂言を初めて見る方も、もっと楽しみたい方も、ぜひ参加して頂きたいと期待している。

【第一回】四月二十四日(土) 「歌舞伎と能」一角仙人・鳴神と俊寛、講師：演劇評論家・放送大学教授 渡辺保氏。

【第二回】六月十二日(土) 「俳句・川柳と能狂言」芭蕉、子規、虚子など、講師：近世文

学・日本文学研究者 喜多真氏。【第三回】九月十二日(日) 「義経と弁慶」英雄と豪傑の実像、講師：南山大学教授・美濃部重克氏。

【第四回】十月二十三日(土) 「小野小町と和泉式部」謎多き歌人、講師：歌人・水原紫苑氏。

【第五回】十二月二十三日(木・祝日) 「能をコミックに」花よりも花の如く、漫画家・成田美名子氏。

会場：豊田市能楽堂(豊田市西町一〇二〇)

参加費：一回券一〇〇〇円(各講座ごと)、通し券三五〇〇円(友の会会員は一割引)

チケット販売は、3月21日午前10時から
主催：豊田市・豊田市教育委員会、共催：財団法人豊田市文化振興財団
問い合わせは豊田市能楽堂(TEL0565・35・8200)

の養老」講師：宝生流シテ方・辰巳満次郎氏
【第三回】六月五日(土) 「狂言方の養老」講師：大蔵流狂言方・茂山七三氏
【第四回】七月十七日(土) 「能における水の伝説」講師：歌人・馬場あき子氏
時間：午後一時三十分～三時
会場：徳川美術館講堂、定員百五十名
受講料：一般一万円(入館料を含む)、空席の場合は一回千五百円(入館料別)で受講できる。
申込みは往復はがきまたはファックスで住所・氏名・年齢・電話記入の上、名古屋市中区徳川町一〇一七(〒461・0023) 徳川美術館「能楽講座」係へ。
電話052・935・6262。
FAX052・935・9444
(定員になり次第締切り)

第47回やるまい会

5月16日 名古屋能楽堂

和泉流狂言方・野村又三郎師主宰の「狂言・やるまい会」の名古屋公演は、五月十六日(日)名古屋能楽堂で催される。午後一時三十分開演。

演能は(出逢い、結婚、そして浮気)をテーマに三曲を選曲、「船渡舞」は京都の茂山千之丞師父子の三代共演、「花子」は東京の野村万作、野村万之介両師の助演を得て、会主・野村又三郎師が大曲を勤める。

番組は次のとおり。
「伊文字」使用の者・野村小三郎、主人野口隆行、太郎冠者・松田高義、女・奥津健太郎
「船渡舞」船頭茂山千之丞、翠・茂山童司、男・茂山あきら、太郎冠者・丸石やすし

「花子」洛外の男・野村又三郎、太郎冠者・野村万之介、妻・野村万作
入場料：正面指定席・A六五〇円(当日七五〇円)、正面上手・中正面指定席B席・五〇〇円(当日六〇〇円)、脇正面指定席C席四〇〇円(当日五〇〇円)、学生B席二五〇円。
チケット取扱い：野村事務所・受付専用電話090(4402)8999マチケットぴあ 予約受付電話0570(02)9999。Pコード352・416

六人の会公演

4月17日 金剛能楽堂

六人の会(能楽・鏡座)と金剛流・豊嶋見嗣師による演能が四月十七日(土)京都金剛能楽堂で催される。

演目は、能「富士太鼓」シテ味方団
仕舞「駒之段」豊嶋三千春
狂言「鎌腹」シテ野村小三郎
仕舞「鐘之段」林喜右衛門
能「船弁慶・白波之伝」シテ豊嶋見嗣
チケット/全自由席六〇〇円、学生席三五〇円、申込み：鏡座090・7671・8945、豊嶋見嗣後援会事務局(TEL&FAX075・582・1894)

能「翁」上演

3月20日 熱田能楽殿

金剛流シテ方・宇高通成師による能「翁」が三月二十日(土)熱田神宮能楽殿で上演される。

この催しは「伝統芸能の会」と名づけられ、能、平曲、尺八、箏、三絃などの演奏で、成田裕基子さん(名古屋瑞穂区日向町)が主宰、古稀と金婚式の自祝を寿ぎ、また面打ちの習練のなかで、

このたびの「翁」には、成田さんが打った能面「白式尉」で宇高師が演ずるといふ師弟愛もうかがわれる催しとなっている。当日は十二時半開場、午後一時開演。
(編注)入場は無料だが、招待の関係で熱田神宮能楽殿の客席数に限りがあり、問い合わせが望まれる。電話052・833・3616、成田方)

演目概要は次のとおり。
能「翁」シテ宇高通成、千歳・松田高義、三番叟・野村小三郎、

尾張徳川家の能

徳川美術館 4月開講

徳川美術館では、平成十六年度の能楽講座を「尾張徳川家の能(養老)」のテーマで、四月から四回にわたり開講する。

【第一回】四月十日(土)「囃子方の養老」講師：藤田流笛方十一世宗家・藤田六郎兵衛氏ほか
【第二回】五月八日(土)「シテ方

の養老」講師：宝生流シテ方・辰巳満次郎氏
【第三回】六月五日(土) 「狂言方の養老」講師：大蔵流狂言方・茂山七三氏
【第四回】七月十七日(土) 「能における水の伝説」講師：歌人・馬場あき子氏
時間：午後一時三十分～三時
会場：徳川美術館講堂、定員百五十名
受講料：一般一万円(入館料を含む)、空席の場合は一回千五百円(入館料別)で受講できる。
申込みは往復はがきまたはファックスで住所・氏名・年齢・電話記入の上、名古屋市中区徳川町一〇一七(〒461・0023) 徳川美術館「能楽講座」係へ。
電話052・935・6262。
FAX052・935・9444
(定員になり次第締切り)

篠山春日能

第31回 4月10日

能「隅田川」「鶴飼」
兵庫 兵庫県篠山市の篠山春日神社の能舞台は文久元年(一八六一)年に建立され、当時箱根より西でもっとも立派な能舞台とされている。

観覧料：一般四〇〇円(当日四五〇円)、中学生二〇〇円(当日同額)
前売券販売：篠山観光案内所(電話079・552・3380)、能楽資料館(電話079・552・3513) 篠山商工会(電話075・552・0758) ほか篠山市教育委員会など。
主催：篠山能実行委員会・篠山市、後援：兵庫県

幸友会離子会

4月3日 熱田能楽殿

小鼓方・福井啓次郎氏主宰の「幸友会」は、四月三日(土)熱田神宮能楽殿で、「幸友会離子会」を開催する。午前十時始。離子約三十番ほか一調、連調など数番、入場無料・来場歓迎。

唐船 井上 靖浩
後見 今沢 美和
久田 勘助
地謡 近藤 幸江
黒田 博
高橋 良一
高橋 謙一
祖父 江修一

附祝言
当日券3000円
お問合せ：名古屋市中区一社3-1162
久田 勘助 方
TEL052・705・1584

名古屋観世会定式能(二回)
四月十一日(日)十二時半開演
名古屋能楽堂

楊貴妃 梅若 六郎
高安 勝久
柳原富司忠
藤田六郎兵衛

鬼の継子 井上 祐一
鹿島 俊裕
後見 佐藤 友彦

兼平 小島 一英
片山慶次郎
地謡 加賀 敏彦
古橋 正邦
梅田 邦久
片山慶次郎
梅田 邦久

善知鳥 山本 順之
清沢 一政
武田 邦弘

附祝言
要会員券 八千円(自由席)
当日券 八千円(自由席)

主催 名古屋観世会
(終了四時過)

上野嘉宏独立記念 邦謡会春の会
三月十八日(日)九時半始
名古屋能楽堂

素謡 仕舞など十数番
「来場歓迎」
主催 邦謡会
梅田 邦久

狂言鳳の会 第36回公演
四月二十四日(土)午後一時三十分開演
名古屋能楽堂

狂言組 林 和利
解説 名古屋女子大学教授 林 和利

二人袴 親 鹿島 俊裕
親 佐藤 友彦
男 大野 弘之
男 佐藤 融

右流左止 塩飽の藤造 佐藤 友彦
茶屋の女 井上 祐一

腰祈 祖父 井上 祐一
山伏 井上 靖浩
太郎冠者 今枝 靖雄

幸友会離子会 4月3日 熱田能楽殿
小鼓方・福井啓次郎氏主宰の「幸友会」は、四月三日(土)熱田神宮能楽殿で、「幸友会離子会」を開催する。午前十時始。離子約三十番ほか一調、連調など数番、入場無料・来場歓迎。

附祝言
要会員券 八千円(自由席)
当日券 八千円(自由席)

主催 名古屋観世会
(終了四時過)

入場料(全席指定)
A席5000円
B席3500円
学生2000円
会員A席4000円
会員B席2500円
問い合わせ
チケットぴあ(TEL052・320・9999)
井上祐一方(052・834・6112)
佐藤友彦方(052・911・8784)
名古屋女子大学・林研究室(052・801・4035)
主催 鳳の会

戦後名古屋能楽史 (第十三章)

昭和三十四年 (一九五九)

竹尾 邦太郎

昭和十七年六月廿日刊(写真)に収録の「伊予松山の能」と題する...

昭和十七年六月廿日刊(写真)に収録の「伊予松山の能」と題する...

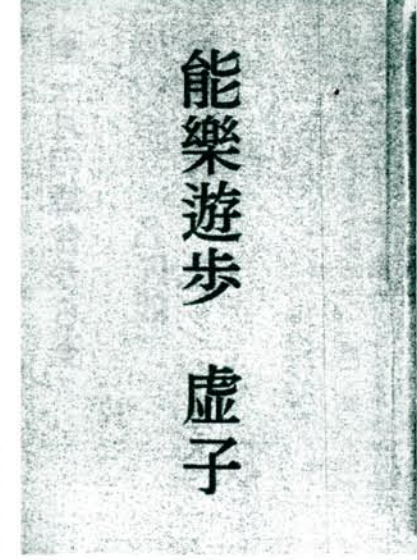
昭和十七年六月廿日刊(写真)に収録の「伊予松山の能」と題する...

昭和十七年六月廿日刊(写真)に収録の「伊予松山の能」と題する...

昭和十七年六月廿日刊(写真)に収録の「伊予松山の能」と題する...

昭和十七年六月廿日刊(写真)に収録の「伊予松山の能」と題する...

昭和十七年六月廿日刊(写真)に収録の「伊予松山の能」と題する...



能楽遊歩 虚子

四月八日、高浜虚子が死去、享年八十五歳、本名は清、俳号は本名キヨシに因る。...

ある次兄池内信嘉(一八五八―一九三四)にも啓蒙感化されて幼少の頃から能に親しんだ虚子は、長じては自身も趣味の能を舞い、また「鉄門」の善光寺詣りに改題(大5)、「実朝」(大8)、「時宗」(昭15)、「義経」(昭17)、「奥の細道」(昭18)などの新作能をもつ...

段「豊嶋弥左衛門」「武悪」井上松次郎、舞囃子「山姥」山田仁三郎、「杜若」日藤ノ糸、増減拍子「盤渉」金剛殿。金剛宗家は「杜若」を生誕十六回舞っているが内この小書付は六回で、これが二回目。翌二十日は東西への往来が飛躍的に便利になることを約束する東海道新幹線の起工式が熱海の新丹那トンネル熱海方入口前で行われ、十河国鉄総裁が御入札をする。...

ある。だが「彦市」や「橋山」をやると、興行的成功を狙って新しさを追っかけると思われがちでね。もちろん僕達は自分達の中から生れた自然な欲求でやっているんだが。...

ある。だが「彦市」や「橋山」をやると、興行的成功を狙って新しさを追っかけると思われがちでね。もちろん僕達は自分達の中から生れた自然な欲求でやっているんだが。...

四月十日、皇太子御成婚。これを祝賀、観世宗家は流儀の奉祝曲として吉井勇に作詞を依頼し、自身が作曲・形付で神楽を舞う舞囃子曲「東天紅」を始め、福原麟太郎作詞・観世元昭作曲・形付の「寿不尽」、高浜虚子作詞・宗家作曲・形付の「花一時に開く」が相次ぎ発表になる。...

四月十日、皇太子御成婚。これを祝賀、観世宗家は流儀の奉祝曲として吉井勇に作詞を依頼し、自身が作曲・形付で神楽を舞う舞囃子曲「東天紅」を始め、福原麟太郎作詞・観世元昭作曲・形付の「寿不尽」、高浜虚子作詞・宗家作曲・形付の「花一時に開く」が相次ぎ発表になる。...

四月十日、皇太子御成婚。これを祝賀、観世宗家は流儀の奉祝曲として吉井勇に作詞を依頼し、自身が作曲・形付で神楽を舞う舞囃子曲「東天紅」を始め、福原麟太郎作詞・観世元昭作曲・形付の「寿不尽」、高浜虚子作詞・宗家作曲・形付の「花一時に開く」が相次ぎ発表になる。...

四月十日、皇太子御成婚。これを祝賀、観世宗家は流儀の奉祝曲として吉井勇に作詞を依頼し、自身が作曲・形付で神楽を舞う舞囃子曲「東天紅」を始め、福原麟太郎作詞・観世元昭作曲・形付の「寿不尽」、高浜虚子作詞・宗家作曲・形付の「花一時に開く」が相次ぎ発表になる。...

四月十日、皇太子御成婚。これを祝賀、観世宗家は流儀の奉祝曲として吉井勇に作詞を依頼し、自身が作曲・形付で神楽を舞う舞囃子曲「東天紅」を始め、福原麟太郎作詞・観世元昭作曲・形付の「寿不尽」、高浜虚子作詞・宗家作曲・形付の「花一時に開く」が相次ぎ発表になる。...

四月十日、皇太子御成婚。これを祝賀、観世宗家は流儀の奉祝曲として吉井勇に作詞を依頼し、自身が作曲・形付で神楽を舞う舞囃子曲「東天紅」を始め、福原麟太郎作詞・観世元昭作曲・形付の「寿不尽」、高浜虚子作詞・宗家作曲・形付の「花一時に開く」が相次ぎ発表になる。...

四月十日、皇太子御成婚。これを祝賀、観世宗家は流儀の奉祝曲として吉井勇に作詞を依頼し、自身が作曲・形付で神楽を舞う舞囃子曲「東天紅」を始め、福原麟太郎作詞・観世元昭作曲・形付の「寿不尽」、高浜虚子作詞・宗家作曲・形付の「花一時に開く」が相次ぎ発表になる。...

四月十日、皇太子御成婚。これを祝賀、観世宗家は流儀の奉祝曲として吉井勇に作詞を依頼し、自身が作曲・形付で神楽を舞う舞囃子曲「東天紅」を始め、福原麟太郎作詞・観世元昭作曲・形付の「寿不尽」、高浜虚子作詞・宗家作曲・形付の「花一時に開く」が相次ぎ発表になる。...

四月十日、皇太子御成婚。これを祝賀、観世宗家は流儀の奉祝曲として吉井勇に作詞を依頼し、自身が作曲・形付で神楽を舞う舞囃子曲「東天紅」を始め、福原麟太郎作詞・観世元昭作曲・形付の「寿不尽」、高浜虚子作詞・宗家作曲・形付の「花一時に開く」が相次ぎ発表になる。...

四月十日、皇太子御成婚。これを祝賀、観世宗家は流儀の奉祝曲として吉井勇に作詞を依頼し、自身が作曲・形付で神楽を舞う舞囃子曲「東天紅」を始め、福原麟太郎作詞・観世元昭作曲・形付の「寿不尽」、高浜虚子作詞・宗家作曲・形付の「花一時に開く」が相次ぎ発表になる。...

四月十日、皇太子御成婚。これを祝賀、観世宗家は流儀の奉祝曲として吉井勇に作詞を依頼し、自身が作曲・形付で神楽を舞う舞囃子曲「東天紅」を始め、福原麟太郎作詞・観世元昭作曲・形付の「寿不尽」、高浜虚子作詞・宗家作曲・形付の「花一時に開く」が相次ぎ発表になる。...

四月十日、皇太子御成婚。これを祝賀、観世宗家は流儀の奉祝曲として吉井勇に作詞を依頼し、自身が作曲・形付で神楽を舞う舞囃子曲「東天紅」を始め、福原麟太郎作詞・観世元昭作曲・形付の「寿不尽」、高浜虚子作詞・宗家作曲・形付の「花一時に開く」が相次ぎ発表になる。...

四月十日、皇太子御成婚。これを祝賀、観世宗家は流儀の奉祝曲として吉井勇に作詞を依頼し、自身が作曲・形付で神楽を舞う舞囃子曲「東天紅」を始め、福原麟太郎作詞・観世元昭作曲・形付の「寿不尽」、高浜虚子作詞・宗家作曲・形付の「花一時に開く」が相次ぎ発表になる。...

四月十日、皇太子御成婚。これを祝賀、観世宗家は流儀の奉祝曲として吉井勇に作詞を依頼し、自身が作曲・形付で神楽を舞う舞囃子曲「東天紅」を始め、福原麟太郎作詞・観世元昭作曲・形付の「寿不尽」、高浜虚子作詞・宗家作曲・形付の「花一時に開く」が相次ぎ発表になる。...

四月十日、皇太子御成婚。これを祝賀、観世宗家は流儀の奉祝曲として吉井勇に作詞を依頼し、自身が作曲・形付で神楽を舞う舞囃子曲「東天紅」を始め、福原麟太郎作詞・観世元昭作曲・形付の「寿不尽」、高浜虚子作詞・宗家作曲・形付の「花一時に開く」が相次ぎ発表になる。...

中日能

4月29日名古屋能楽堂 中日新聞社、中部日本放送主催の「中日能」は四月二十九日(木)祝「名古屋能楽堂」で開演される。

4月29日名古屋能楽堂 中日新聞社、中部日本放送主催の「中日能」は四月二十九日(木)祝「名古屋能楽堂」で開演される。

4月29日名古屋能楽堂 中日新聞社、中部日本放送主催の「中日能」は四月二十九日(木)祝「名古屋能楽堂」で開演される。

三十五周年記念 幸謡会大会

四月二十五日(日)午前十時始 名古屋能楽堂

Table listing performers and roles for the 35th Anniversary Kanyo Kai Festival. Columns include names like 吉野天人, 松風, 高砂, etc., and their respective roles.

Additional information and contact details for the festival, including location and ticket prices.

◆一月の舞台から◆

「鳳の会」「名匠能」

「龍吟の会」

竹尾邦太郎



④鳳の会「三人夫」左より、鹿島俊裕・井上靖浩・佐藤 融
⑤「瘦松」左より、今枝靖雄・大野弘之

(杉浦賢次氏撮影)



【写真】④鳳の会「餅」鹿島俊裕・井上祐一
⑤「一米市」佐藤友彦 (杉浦賢次氏撮影)

【三人夫】 土烏帽子・括袴・掛素袍・小刀の礼装で御年貢を納めに上がるシテ美濃・靖浩、アド淡路・融、小アド尾張・俊裕の御百姓三人、道連れとなり共に無事役を終えて下がるさ、「三人して歌を一首詠め」との沙汰。「淡路より種蒔き初めて三つ葉差し花咲くをばりみのなるは福」と詠めば御意に適い、公事を免除され、お流れ頂戴して舞立(発)ちとなる。へれめでたかりける時とかや、と露取ると違掛の三段ノ舞は三人の連舞(写真)、合膝して謡ドメ。若手三人の舞が爽やか。(36分)

【瘦松】 曲名は獲物に不仕合せという山賊仲間隠語。夜道、女・靖雄を襲い、強奪した獲物を吟味にかかると、長刀を奪われ身ぐるみ剥がれる山賊シテ弘之。見掛け倒しの大盗とは言葉ぬ小盗人根性は、獲物の一部でも、と帯を懐中するとほけぶりが味なら、長刀手にするや、物への執着に怖さを忘れ、ヒステリックに掛ってゆく若い女(写真)の性

【餅】 餅(あがり)は、餅の軍は取り囲むの意味、寒さで手足の上皮が小さな裂け目で開かれるアカギレ・ヒビを表すという。主・俊裕の伴をする太郎冠者シテ祐一、餅で川を背負って渡れぬなら代りに背負おう、の主の言を固辞すれば、太郎冠者が歌を詠むと知る主は「歌にて鬼神も納受あるの俚諺を楯に、背負うのは汝ではなく歌、の理屈、餅」の題で次々詠ませ、背負っては深みの途中で一首を強要。でかしたとは言い条、古今、主が下人を負う例無し、と太郎冠者を水中に投げ出す(写真)。クサメ留メ。一体に淡泊。シテに、小賢しさのアクの強さ、主に、悪戯心徐々に小頼な奴めの思いになる憎げ、が更に欲しい。(10分)

【一米市】 昭和四十一年、第六回名古屋和泉会でシテ太郎・松次郎、アド何某・右近らで上演があるが稀曲。歳晩、アド何某・祐一方に出入

【餅】 餅(あがり)は、餅の軍は取り囲むの意味、寒さで手足の上皮が小さな裂け目で開かれるアカギレ・ヒビを表すという。主・俊裕の伴をする太郎冠者シテ祐一、餅で川を背負って渡れぬなら代りに背負おう、の主の言を固辞すれば、太郎冠者が歌を詠むと知る主は「歌にて鬼神も納受あるの俚諺を楯に、背負うのは汝ではなく歌、の理屈、餅」の題で次々詠ませ、背負っては深みの途中で一首を強要。でかしたとは言い条、古今、主が下人を負う例無し、と太郎冠者を水中に投げ出す(写真)。クサメ留メ。一体に淡泊。シテに、小賢しさのアクの強さ、主に、悪戯心徐々に小頼な奴めの思いになる憎げ、が更に欲しい。(10分)

【一米市】 昭和四十一年、第六回名古屋和泉会でシテ太郎・松次郎、アド何某・右近らで上演があるが稀曲。歳晩、アド何某・祐一方に出入

りのシテ太郎・友彦、何某に忘れられた越年用の米を出向いて入手、米俵を背負い、妻へ頂戴する歳暮の古着を依り着せ掛けて貰えば、「これはそのまま主人を負うた様ぢや」と言われ、不審されたら「依藤太のお娘御・一米市御寮人のお里帰り」と言い抜けよ、の知恵を主から授かるが、案の定、帰途、所ノ若者ら六人に囲まれ、御寮人の盆をせがまれて棒を取って寮人の抗争となる仕儀、詰まらぬもの

【伊文字】 清水へ妻乞いの主・則重、西門一ノ階に女の霊夢に太郎冠者・則直を遣れば、前シテ女・東次郎は「恋しくは尋ねて来ませ伊勢の国云々、の一首を残して消える。首尾を問う主が「伊」までしか覚えていない太郎冠者に失望すれば、歌の上の句と察した太郎冠者は、通行人を新聞で止めて下の句を継がせようの気転、引つ掛かったのは後シテ東次郎、多忙の身を迷惑ながら強制されて思案に掛かるところなど、人の好きが微笑ましい。節を付け通行人と太郎冠者、掛合で下の句を紡ぎ出し、段々一首が形を成して遂に復元なる。喜びの雰囲気の中、別れの時は、賑やかだっただけにまこと名残り惜しさの掛合、梅は、と笠を捨て「ほろりと落つれども、のシテ通行人の哀感も一人、好アンサンブルの舞台だった。(30分)

【三輪・白式神楽】 六週間の内に秘曲二度の上演は稀有。シテ六郎、面深井・襟白二・露芝文白摺着付・黒地唐織。柴の編戸、は左へ少しウケるだけ、衣はワキ開が手ずから渡すのを両手に受ける。中入、不審するワキへ、訪ひ来ませ、と二・三歩ぐつと出る。

【三輪・白式神楽】 六週間の内に秘曲二度の上演は稀有。シテ六郎、面深井・襟白二・露芝文白摺着付・黒地唐織。柴の編戸、は左へ少しウケるだけ、衣はワキ開が手ずから渡すのを両手に受ける。中入、不審するワキへ、訪ひ来ませ、と二・三歩ぐつと出る。

【当願暮頭】 復曲、当地では初演。奇異な曲名だが人名。「俊成忠度」同様ツレ・シテと並べ「古今謡曲解題」はシテ・ツレ。共に狐師の弟と兄。

【当願暮頭】 復曲、当地では初演。奇異な曲名だが人名。「俊成忠度」同様ツレ・シテと並べ「古今謡曲解題」はシテ・ツレ。共に狐師の弟と兄。

【能、狂言面、装束など】 徳川美術館では、前号既報のように、四月十日から五月二十三日まで、「能と狂言」春季特別展を開催。能面、狂言面、装束など約八十点を展示する。

【能、狂言面、装束など】 徳川美術館では、前号既報のように、四月十日から五月二十三日まで、「能と狂言」春季特別展を開催。能面、狂言面、装束など約八十点を展示する。

【能、狂言面、装束など】 徳川美術館では、前号既報のように、四月十日から五月二十三日まで、「能と狂言」春季特別展を開催。能面、狂言面、装束など約八十点を展示する。

【能、狂言面、装束など】 徳川美術館では、前号既報のように、四月十日から五月二十三日まで、「能と狂言」春季特別展を開催。能面、狂言面、装束など約八十点を展示する。

【能、狂言面、装束など】 徳川美術館では、前号既報のように、四月十日から五月二十三日まで、「能と狂言」春季特別展を開催。能面、狂言面、装束など約八十点を展示する。

【能、狂言面、装束など】 徳川美術館では、前号既報のように、四月十日から五月二十三日まで、「能と狂言」春季特別展を開催。能面、狂言面、装束など約八十点を展示する。

【能、狂言面、装束など】 徳川美術館では、前号既報のように、四月十日から五月二十三日まで、「能と狂言」春季特別展を開催。能面、狂言面、装束など約八十点を展示する。

【能、狂言面、装束など】 徳川美術館では、前号既報のように、四月十日から五月二十三日まで、「能と狂言」春季特別展を開催。能面、狂言面、装束など約八十点を展示する。

徳川美術館 春季特別展

能、狂言面、装束など

徳川美術館では、前号既報のように、四月十日から五月二十三日まで、「能と狂言」春季特別展を開催。能面、狂言面、装束など約八十点を展示する。

能面は、伝日光作「父尉」伝是関吉清作「小面」烙印・天下一近江「増」烙印・天下一是閑「近江女」烙印・天下一河内「曲見」狂

NHK放送予定(平成16年4月~5月)

Table of NHK broadcast schedule for April and May, listing programs like 'NHK-FM能楽鑑賞' and 'NHK教育テレビ'.

能 楽 の 友

発行能楽の友社

名古屋市中千種区千種2丁目18-18 (郵便番号 464-0858)
電話 (052) 731-7984
FAX (052) 733-2837
振替口座 00800-6-36393
購読料 1年 1100円
郵送の場合 1年 1800円

熱田祭奉納能
能2番 狂言1番
6月5日 熱田能楽殿

能楽協会名古屋支部(福井啓次郎支部長)主催による熱田能楽殿奉納の「熱田祭奉納能」は、六月五日(土)午前十一時から熱田能楽殿で開演される。

天王薪能 8月29日

能「清経」狂言「鈍太郎」

尾張津島天王祭で名高樹「井筒」(金春安明)「舟弁」(津島市観光協会主催、天王薪能鑑友会主管)により「天王薪能」が開演されるが、本年は第二十一回を迎え、ユネスコ第一回世界無形遺産「能楽」をタイトルに、八月二十九日(日)津島市文化会館大ホールで開催される。

観世流シテ方 橋岡久馬氏逝去

観世流シテ方、橋岡久馬氏は三月十九日、肺炎のため逝去された。享年八十歳。告別式は二十三日午前十時から佐倉市大蛇町のさくら斎場で執り行われた。喪主は長男久太郎氏。橋岡久馬氏主宰の橋岡会は、本年三月十四日名古屋能楽堂、同日

演能カレンダー

名古屋能楽堂

(TEL 052-231-0088)

Calendar of performances at Nagoya Nohkan, listing dates and event names like '狂言・鳳の会' and '豊水会春季大会'.

久田観正会春の大会

五月二日(日)午前十時半開演 名古屋能楽堂

Cast list for 'Kudamasa Spring Festival' with roles like '素謡', '舞囃子', and names of performers.

豊水会春季大会

五月三日(祝)午前十時始 名古屋能楽堂

Cast list for 'Toyosui Spring Festival' with roles like '素謡', '舞囃子', and names of performers.

梅若猶義三十三回忌追善 名古屋梅猶会社中連合会

五月八日(土)午前九時三十分始 名古屋能楽堂

Cast list for 'Uragami Memorial Service' with roles like '素謡', '舞囃子', and names of performers.

Large cast list for various performances, including roles like '素謡', '舞囃子', and names of performers.

松尾芸能賞特別賞

狂言方野村又三郎氏受賞



和泉流狂言方・野村又三郎氏はこのたび第二十五回「松尾芸能賞」の特別賞を受賞、三月三十日東京赤坂の全日空ホテルで授賞式が行われた。

松尾芸能賞は、昭和五十四年(一九七九年)に「日本の伝統ある劇場芸能を助成し、振興し、もつて我が国独自の文化、芸能の保存及び向上に寄与する」ことを目的に設立され、昭和五十五年(一九八〇年)に第一回松尾芸能賞の授賞式を挙行、以降毎年実施、松尾塾子供歌舞伎東京公演、大阪公演が毎年行われている。

これまで能楽界からは「優秀賞」野村万作(第11回)、梅若六郎(第16回)、大蔵文蔵(第17回)、茂山千之丞(第19回)、「新人賞」野村小三郎(第18回)の諸氏が演劇部門として受賞している。

今回特別賞・演劇で受賞した野村又三郎氏の受賞理由は次のとおり。

狂言和泉流・野村派の当主として長年にわたり研鑽を重ね、名古屋を中心に精力的に活動、平成15年「やるまい会」東京公演で八十にして自家の幻の狂言「狸腹鼓」を七十数年ぶりに復活上演。その洒脱で自在な表現で観客を魅了した。

なお今回の第25回松尾芸能賞は、大賞/演劇仲代達矢、優秀賞/演劇金田龍之介、中村東義、池畑慎之介、邦楽中島靖子、特別賞には野村又三郎氏のほか音楽・只野通泰、歌謡・八汐重矢子の諸氏が受賞している。

狂言特別セミナー

3月6日 鳳の会主催



狂言「鳳の会」主催の「狂言特別セミナー」は、三月六日(土)午後二時から名古屋能楽堂会議室で狂言「石流左止(うるさし)」の成立をめぐってのテーマで開催され、約六十名の熱心な受講者が参加した。

講師に名古屋女子大学文学部・林和利教授、狂言の演技には井上

祐一、佐藤友彦の両師が当たり、能「雲林院」との関わりや、菅原道真との関係など興味深い話とともに、熱心な質疑がかわされ盛会であった。

このセミナーは、昨年三月「千鳥・津島祭」のテーマで催されたのにつづき、二回目の開催で愛好者の関心を高めた。



名古屋狂言共同社の若手能楽師・井上靖浩、佐藤融、鹿島俊裕の三師により「ナディア狂言・アトリエ狂言会」が、いりなかスクエア能舞台で行われた。

観客は、いつも能楽堂へ足を運ぶファンとは異なり、初めて狂言を見るところという人たちが大半で、小学生から大学生までの学生層や若い女性たちが熱心に観賞し、また活発な質問が相次ぎ盛況であった。

ナディア狂言 アトリエ狂言会

3月28日(日)いりなか舞台

金剛流

豊春会春の能

5月17日大槻能楽堂

金剛流・豊春会(豊嶋三千春師主宰)は五月十七日(土)大槻能楽堂で「豊春会春の能」を開催する。午後二時始

豊春会は発足以来四十一周年を数えるが、とくに今回の春の会では、稀曲ともいえる三千春師の「蟻通」、幸洋師の舞囃子「八鳥」見師師の「是我意」善竹師一家の「茶壺」などの趣向で上演される。

「蟻通」はワキ方の重い習物と称されるだけあって型所が随所にあり、ワキ方福王茂十郎師を迎えて上演される。入場料当日券七千円。

舞と能の夕べ

5月15日岡崎能楽堂

清誦会(清沢一政師主宰)は、来たる5月15日(土)岡崎城二の丸能楽堂で「舞と能の夕べ」を午後二時半から開催する。

この催しは、清誦会主催で毎年開催され、今回で二十五回目を迎えるが、とくに今回は、清沢師が岡崎在住で小学校高学年のクラス生徒を招いての観能で、清沢師が能楽について楽器の実演や能装束の説明などを行い、古典芸能への関心を高め、文化情操面の向上に役立たせたいとの趣旨で企画され、観能への呼びかけと参加が期待されている。(番組③面掲載)

演能記録

鷓鴣能

岐阜護国神社大祭奉納

岐阜護国神社大祭奉納「鷓鴣能」は四月八日午後四時から岐阜護国神社苑能舞台で行われた。

主催 岐阜護国神社、桂会、謳英会、後援岐阜新聞、岐阜放送、岐阜商工会議所、青年会議所など。

演能は、能「菊慈童(シテ青井鏡子)」、囃子「西王母」「船弁慶」「弱法師」「通小町」「山姥」「高砂」ほか連吟、独調、仕舞など二十番。

翠誦会大会

五月九日(日)十二時半始 名古屋能楽堂

素誦	仕舞	舞囃子	三輪	花	源氏供養	野宮	花	連吟	高	砂キリ
敦盛	屋島	杜若	三輪	花	源氏供養	野宮	花	連吟	高	砂キリ
吉田 勤也	渡辺 鏡一	木村 秀子	服部 裕子	太田 栄	松井 澄子	鈴木 満枝	鈴木 満枝	日野 恵子	日野 大順	神戸 秀
中者 輝治	神戸 秀	後藤嘉津幸	後藤嘉津幸	後藤嘉津幸	澤田美智子	澤田美智子	澤田美智子	渡辺 鏡一	渡辺 鏡一	神戸 秀
	日野 大順	鬼頭 義命	大野 義誠	大野 義誠	木村 秀子	木村 秀子	木村 秀子			

名古屋観世九阜会能

五月十五日(土)午後一時始 名古屋能楽堂

能	狂言	仕舞	敦盛	藤戸	観世	観世	観世	観世	観世	観世
俊寛	薩摩守	吉野	敦盛	藤戸	観世	観世	観世	観世	観世	観世
飯富 雅介	野村小三郎	高橋 瞭一	高橋 瞭一	五木田三郎	五木田三郎	五木田三郎	五木田三郎	五木田三郎	五木田三郎	五木田三郎
柳原富司忠	野村又三郎	坂 真太郎	坂 真太郎	遠藤 喜久	遠藤 喜久	遠藤 喜久	遠藤 喜久	遠藤 喜久	遠藤 喜久	遠藤 喜久
小島 英明	野村又三郎	観世 喜正	観世 喜正	五木田三郎	五木田三郎	五木田三郎	五木田三郎	五木田三郎	五木田三郎	五木田三郎
高橋 瞭一	野村又三郎	中森 貴太	中森 貴太	中森 貴太	中森 貴太	中森 貴太	中森 貴太	中森 貴太	中森 貴太	中森 貴太

附祝言

後見 駒瀬 直也 地誦 坂山 圭一 高橋 瞭一
五木田三郎 遠藤 喜久 観世 喜太 中森 貴太

主催 名古屋観世九阜会
名古屋事務所
名古屋守山区八剣2-19-13 外山圭一 方

第47回やるまい会名古屋公演

五月十六日(日) 午後零時四十五分開演 午後一時三十分開演 名古屋能楽堂

伊文字	伊文字	伊文字	伊文字	伊文字	伊文字	伊文字	伊文字	伊文字	伊文字	伊文字
伊文字	伊文字	伊文字	伊文字	伊文字	伊文字	伊文字	伊文字	伊文字	伊文字	伊文字
主人 野村小三郎	主人 野村小三郎	主人 野村小三郎	主人 野村小三郎	主人 野村小三郎	主人 野村小三郎	主人 野村小三郎	主人 野村小三郎	主人 野村小三郎	主人 野村小三郎	主人 野村小三郎
太郎冠者 松田 高義	太郎冠者 松田 高義	太郎冠者 松田 高義	太郎冠者 松田 高義	太郎冠者 松田 高義	太郎冠者 松田 高義	太郎冠者 松田 高義	太郎冠者 松田 高義	太郎冠者 松田 高義	太郎冠者 松田 高義	太郎冠者 松田 高義
後見 伴野 俊彦	後見 伴野 俊彦	後見 伴野 俊彦	後見 伴野 俊彦	後見 伴野 俊彦	後見 伴野 俊彦	後見 伴野 俊彦	後見 伴野 俊彦	後見 伴野 俊彦	後見 伴野 俊彦	後見 伴野 俊彦

名古屋能楽堂定例公演

五月二十一日(金)午後六時三十分開演 名古屋能楽堂

能	狂言	仕舞	敦盛	藤戸	観世	観世	観世	観世	観世	観世
三山	六地藏	吉野	敦盛	藤戸	観世	観世	観世	観世	観世	観世
飯富 雅介	野村小三郎	高橋 瞭一	高橋 瞭一	五木田三郎	五木田三郎	五木田三郎	五木田三郎	五木田三郎	五木田三郎	五木田三郎
柳原富司忠	野村又三郎	坂 真太郎	坂 真太郎	遠藤 喜久	遠藤 喜久	遠藤 喜久	遠藤 喜久	遠藤 喜久	遠藤 喜久	遠藤 喜久
小島 英明	野村又三郎	観世 喜正	観世 喜正	五木田三郎	五木田三郎	五木田三郎	五木田三郎	五木田三郎	五木田三郎	五木田三郎
高橋 瞭一	野村又三郎	中森 貴太	中森 貴太	中森 貴太	中森 貴太	中森 貴太	中森 貴太	中森 貴太	中森 貴太	中森 貴太

【入場料】
前売一般三千五百円、学生二千円
(当日一般四千円、学生二千五百円)

取扱所
名古屋能楽堂(052-231-0088)
チケットぴあ(0570-02-9999)
市内プレイガイド

主催 能楽普及事業実行委員会
名古屋・財名古屋能楽協会
名古屋文化振興事業団
協賛 能楽協会名古屋支部

(終了) 午後八時半頃予定

故橋岡久馬先生を偲ぶ

竹尾邦太郎

三月十九日、午後四時三十分、久馬先生は肺炎で亡くなられた。大正拾貳年癸亥(みずのと)八月拾五日生、享年八拾歳五ヶ月である。公私に亘る先生の身辺は話題に事欠かないが、先生の面目躍如たるところは生粋の日本人だったことだろう。先生の生活には、今では「古き佳き時代の」と前置きが必要だが、然り気なく身に付いていた。先生の面影を偲び、御霊前に捧げたい。

池下・三喜神社で稽古を見たことがある。小憩があつて、先生はつと背を向けられた。そこは舞台の約束事、クツロギの場は存在が無になり外界を遮断する。徐に饅頭を手に、茶を喫する先生、葡萄酒(ワイン)ばかり喧伝されるが先生は甘い物も好まれる、稽古場の緊張が和み穏やかな時間が流れた。

先生の能はユニークという世評がある。成程、独自の面が見えるかも知れないが、それは一朝一夕に成つたものではなく、決して奇でも変でも無く、筋の通つた本

し、また語弊もあるだろう。以来今日まで約半世紀、死線を越えた生きる喜びは、能を愛おしみ情熱が営々として築き上げてきた在るが、自然体の融通無礙、その境地は歳月と共に研ぎ澄まされてきた様に思われる。演ずる喜びは、

精神を込めた舞台だからこそ、見所だけではなく、テレビの放映を観る人、ラジオの放送を聴く人にも伝えたい、の先生の思い、日時・曲目・配役がきちんと印刷された几帳面な葉書の案内にも現れる。葉書と言えは夙に有名なのは

先生の書簡、護謄(ゴム)印使用は本字・旧仮名遣・候文。候文など遊女の「ありんす」言葉と同じ、と言えは、泉下の先生にお叱りを受けようが、簡にして要の型を守ることにその本領はある。晩年はワープロからパソコンになつて少々寂しかったが、律儀な先生からは必ず返信があつた。

「習うことは楽しいことである」と、先生の三味線は趣味の域を越え、乱能では肥後だつた田鍋惣太郎先生の縁で小鼓を打たれた姿が忘れられない。当地での最後の能は平成十三年十一月十一日、親世会の「阿漕」、近郊では平成十五年七月五日、豊田市能楽堂定例公演の新作能「無明の井」、そして今年三月十四日、橋岡会名古屋公演で嗣子・久太郎さんの「楊貴妃」地頭と太鼓一調「山姥」を勤

めることになつてはいたが欠勤、急逝。鬼や瘦男や瘦女ばかりを親てきた気がするが、長身瘦身の先生にはそれが良く似合い印象強烈。鬼才と謳われ、古風なダンディズムの権化だつた久馬先生は、不羈独立の精神も爽やかに旅立された。巨星墜つ、なんどの大仰でなく、柳の芽吹く早春、秋を待たぬ朽木留を思いつつ謹んで御冥福をお祈り致します。さようなら、久馬先生。



昭和46年6月19日 田鍋惣太郎米寿記念
日加寿能・乱能(慰勞会)
長唄「吾妻八景」 橋岡久馬(中央)

筆者(竹尾邦太郎)宛の橋岡久馬氏書信の一部
(昭和45年4月と昭和54年9月28日付)

謡曲の眞行草に關する訓
眞は能の謡にて、シテを中心に、型と謡と
は三身一體也。
行は、仕舞又は居舞子の謡にて武者壹體也。
草は、多勢の揃しむ、素謡にて、型や
子に拘泥せず、美しき謡曲文章の心を
顯はし出す也。
素謡の内にも、眞行草あり候
眞は、シテ、謡、謡、子方など役を別けて
地謡を入れて仕候
行は、時々にて、自己の聲大也とて、他を考慮
せざるへからず、然るに草は、兩片也
自由闊達、奔放に其の主張のもとに謡切
靈韻の妙味にて聽者を魅了可致候
女清水八郎師が言、尤もと存候儘
記して江湖に薦め申候 橋岡久馬
昭和四十五年四月五日

五月二日 土曜日 午後七時半始、祝
橋岡久春 鷺ノ 熱田神宮能樂殿
井公開 御座候も 開催致候
御案内申上候
竹尾邦太郎様 橋岡久馬
昭和四十五年四月五日

早春の舞台から

「宝生会」 「第六回・万作を観る会」と
「青陽会」 「観世会」 「名古屋能楽堂
定例公演」

竹尾邦太郎

「竹生島」 シテ正宜、親世流の朝倉尉など異なり、宝生流の前は小尉の気品なら、釣竿担げるツレ女・飛能も面持ち神妙。ワキ臣下・雅介を乗船させ湖上、山々の春なれや、と右ウケのシテには、ワキに風光を誇るかの得意。アイ融は竹生島の天部(八部衆の一、龍)に仕える能力、ワキに靈宝と称する二股の竹の類の珍品を見せびかせ、更に、小舞は岩飛、危なげなる巖の上より、

飛び損ない水底へ、クサメ留はお調子者の気分も軽快。後ツレ天女、中ノ舞三段は粗削りながら大きな舞は若さの闊達。右手に赤打杖、火焔珠の銀盤を両手に捧げる後シテ龍神の疾風の勢いは躍動する働き。キリの湖上に飛行して、と波を蹴立てる乱れ足の鮮やか。トメは、龍宮に入る態に二ノ松で飛返って袖被キ、袖撥せて立ち、拍子は踏まなかつた。(1時間13分)

「張蛸」 脇能に続く果報物の脇狂言で囃子方(誠・啓次郎・真之介・洋輝)が残る。張蛸の何たるかも知らずに都のストバ友彦の甘言に乗せられ、益体もない張太鼓を掴まされて得々と主シテ弘之に披露する太郎冠者・靖浩、それをうつけ愚鈍と罵倒されれば立つ瀬もない。干蛸と分つても後の祭、「何やら紛らわしい事をおっしゃるによつて」と不満顔に口を尖らせ抗弁の靖浩に、頭に湯気を立てんばかりに激怒の弘之、熱演。キリは例によつて囃子物の和解、「イヤア」と両者片膝つきシヤギリ留。(37分)

「熊野」 シテ博祐、ツレ朝顔・澄子の来訪に「あら心許なや」の病母への気遣わしあり。携えられた文を一刻も早くワキ宗盛・元へ、の逸る心は、「見るまでもなし」と冷たく拒絶されて自身

が読み聞かせる遺る瀬ない文ノ段。女流の持ち味の、沁みくしいた想いが沈痛。車の中は、老母を偲び、其方の懐しや、とシオル切なき。心を取り直し、へ名に負ふ春の景色、を右ウケ眺めるそぞろの風情が好い。車を出ては酒宴の場、心奮い立たせて平静を装い、当座(即詠)を遊ばされ候はぬぞ」と勧める胸中はやや痒高い声調も哀れ。舞グセから中ノ舞へ嬪やかに舞上げ、散るを惜しまぬ、と落花を扇に受けてシオリ、右へ廻り正中下居、短冊ノ段。扇を前に置き、左手に短冊取り出して暫し眺め黙考、扇畳み筆に擬すと徐に認めるが茶の作法を見るようである。キリは、御意の変わらぬ裡早々に立つてゆくと、橋懸で月ノ扇に「明け行くあの山、を見上げる風情に心根の優しさ溢れ、如何にも女流らしい肌目細や

かな舞台。(1時間28分・1月25日・宝生会)
「蝸牛」 祖父の長寿に葉効ありという蝸牛、主・靖浩は太郎冠者・融に捜させるが蝸牛を知らぬ太郎冠者、藪に伏すシテ山伏・小三郎が主の説明に盲く合いそうで「かたつむり殿では御座らぬか」と単刀直入に問えば、一瞬訝り、驚き呆れる山伏の、「何ちゃ」の返事の間(ま)のよき、「思ふさま調も哀れ。舞グセから中ノ舞へ嬪やかに舞上げ、散るを惜しまぬ、と落花を扇に受けてシオリ、右へ廻り正中下居、短冊ノ段。扇を前に置き、左手に短冊取り出して暫し眺め黙考、扇畳み筆に擬すと徐に認めるが茶の作法を見るようである。キリは、御意の変わらぬ裡早々に立つてゆくと、橋懸で月ノ扇に「明け行くあの山、を見上げる風情に心根の優しさ溢れ、如何にも女流らしい肌目細や

「武悪」主・万作、武悪・萬斎、太郎冠者・幸雄。緊迫感漲る命拾いのお礼参りと武悪、双方出

岡崎城二の丸・清謡会(第十二回)
舞と能の夕べ
五月十五日(土)午後二時半始
会場 岡崎城二の丸能楽堂
電話(家康館)〇五六四二四・二二〇四

素謡	嵐山	番	組
老松	山	岡田 弘子	鈴木 明雄
正松	(後福嶋 武憲)	神谷 第一	織田 孝治
金原 孝典			織田 孝治
織田 敏男			山崎 幸一
金井 邦夫			山口 耕造
山口 耕造			神谷 第一
神谷 第一			金原 孝典

善知鳥 鬼頭みゆき 後藤孝一郎 大野 誠
道明寺 手嶋なみ江 後藤孝一郎 大野 誠
素謡 大原御幸 (能の解説) 本日(能「吉野夫人」)の解説を三十分以内で致します 清沢 一政

吉野夫人 飯富 雅介 寛 敏一 加藤 洋輝
橋本 幸 後藤孝一郎 大野 誠

後見 今沢 美和 地謡 高島 良一 梅田 邦久
清沢 一政 地謡 松山 幸親 須部 甫

盛 清沢 一政 地謡 松山 幸親 須部 甫
梅田 邦久 地謡 祖父江 修一 本田 勲

番外仕舞 國 栖 梅田 邦久 地謡 祖父江 修一 本田 勲

「入場無料」
主催 清 謡 会
後援 中 日 新 聞
電話〇五六四・五二・六九〇九

くわすとみるや懸命に取り繕う太
郎冠者の奮闘ぶりと、幽霊に化け
て出る武悪の目に余る悪巫山戯の
くどさが精彩。万作家の黄金トリ
オの充実。(55分)

〔若菜〕洞鳥帽子・襟浅黄・段
髪斗目着付・素袍袴・小刀の果報
者アト万之介、同朋(近侍)の海
阿弥シテ萬斎を伴い野遊びの折
柄、薪を売りに来る大原女達(博
治ら五人)と出逢い、呼び止めさ
せて酒宴となり、賑やかに肴の小
謡・小舞に興じる。当初、警戒し
ていた女達に、万之介の意を受け
て待ってましたとばかり弁舌爽や
かに取り入る萬斎、座を盛り立て
ようと萬斎をけしかけて女達にサ
ービスこれ努めさせる万之介。と
かく大味になりがちが大勢物がか
つちり纏まり、歡樂の果てにくる
別れは、萬斎と女達との掛合に醸
される寂寥感も一入だった。シヤ
ギリ留。万之介の存在感が難
しい。

細。へあら恥かしや、と袖屏風に
面をワキから隠す含羞の人経正
の、キリは、燈火を、と招き扇に
吹き消す型からクルクルと小
廻りに退ると、右膝つき袖披き腕
霊の失せる様から立ってトメ。一
体は品よく爽やかだった。(38
分)

〔蟬丸〕数奇な運命に弄ばれる
ツレ蟬丸・一政とシテ逆髪・恵子
の出遇いと別れ。
捨てられるを遠視、従容として
同道する蟬丸の胸中を付度、心を
通わすワキ清貫・勝久、物着で僧
形となった蟬丸を慰め、盲目を慮
って慎重に笠と杖を手渡すこと
ろ、両者の掛合が佳。改めて己の
立場を知る蟬丸は清貫と別れる孤
愁、遠視も何処へやら、杖を取り
立つと彷徨う態に正先へ、伏し
転びてぞ、と笠を、退ると杖を、
捨てて安座及シオリの働、アイ
博雅三位・靖浩の介添えも上々の
前場が惹きつける。

シテは面増・付髪に襟白二・親
世水文白箔着付・鳳凰枝垂桜御
所車文段唐織脱げケ。カケリに見
せる皇女の狂乱は逆立つ髪自嘲
か、カケリ後へ手にも分けられ
ず、と付髪握って扇面に受けシミ
へ、へかなぐり捨つる、と投げ捨
てる様に手から放す。馴染まぬ髪
を邪慳に扱ふ女心は、やや右に傾
ぐ面が時に可憐な風情である。琵琶
音聞きつけてからは、へ姉宮か
と驚き、薬屋を出
る蟬丸と互いに差
し伸べる左手、下
居するとへ腰きあ
へぬ御涙、のシオ
リである(写真)。
居グセに不遇を託

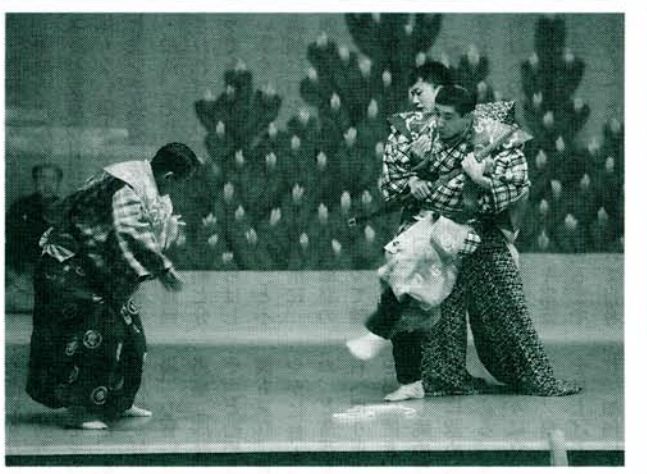


④青陽会定式能「経正」久田勘助



⑤「蟬丸」三村恵子、清沢一政

(杉浦賢次氏撮影)



青陽会定式能「太刀奪」佐藤友彦・今枝靖雄・鹿島俊裕

(杉浦賢次氏撮影)

シオリ留は優
い一場の幻、
余情のある好
舞台で配役も
妙。ただシテ
面は皇女の品
位を重んじた
であろうが、
十寸髪の方が
より人物造型
に深味が出た
のでは。(1
時間37分)

〔太刀奪〕
主・俊裕の意
に構わず通行
人・郁雄の太
刀を奪い取り
入ろうとする
シテ太郎冠者

つところは、二度逆髪が蟬丸にア
シラフが目目の蟬丸は面も動かさ
ず、薬屋の起居をへ思ひ遣られ
て、逆髪だけがシオルのも切な
い。名残りを惜しむ別れは、蟬丸
のへ留るを(思ひやり給へ)、で立
つ逆髪、へ行くは、と蟬丸に背を
向け運び、へ泣き居たり、とシオ
リそのまま橋懸へ入るとシオリ解
き、へ薬屋の軒に、と一ノ松から
蟬丸を見込めば、蟬丸もへ付み
で、立ち、見えぬ目に逆髪の方
を眺める。キリはへ幽かに、とシ
オリ幕へ行く逆髪、覚束なく杖を
突き見送る態に脇正へ出る蟬丸、

〔山姥・白頭〕シテ幸江、前は
面霊女の品が山の妖精仄めかす。
山姥の何者かを知らず百万山姥と
持て囃される都の遊女百万ツレ路
子と、山姥とは山に住む鬼女
と云う従者ワキ元、その認識不足
を正すため、百万が当たり芸とす
る山姥の歌の一節を敢て所望する
真の山姥シテ幸江、霊鬼と明か
し、その山姥の歌の一節を「謡ひ
給はば我も亦真の姿を現すべし」
の前場、シテ詞・謡は坦々とした
印象だが囃んで含める様な確りし
たワキとの問答、ツレとの掛合で
ある。ただ慎重に過ぎたか、大事
のへすはやかげろふ夕月の、が抜
ける。へさなきだに暮るるを急ぐ
深山辺の、と幕へ見込む寂寥感が
佳く、へ雲に心を、と立つとへ言
ふかと見れば、でキリく小廻り
から一ノ松へ走り、あと静かに地
一杯に入る。

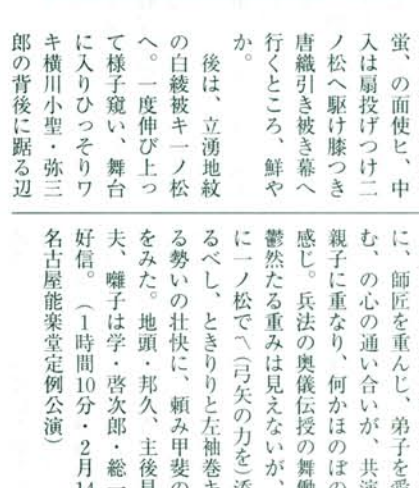
後シテはつるつとした緒い面、
地次第の返シに鹿背杖を扇に替
え、へ千丈の峯、と床几に掛かる
とクセはへ金輪際及べり、と立
つて扇逆さに下を指すところ、す



⑥青陽会「山姥」近藤幸江



⑦観世会「雲林院」片山九郎右衛門



⑧「葵上」観世清和

(杉浦賢次氏撮影)

つとした感じづくつとした強さ余
り感じられなかったが、鹿背杖担
げ合膝(写真)のところ、山廻りの
立廻は充実した力が入る。立廻あ
とは、へ月見る方にと、頭トリ、
へ冬は芽え行く、と面切るところ
にひやりとする冷気。キリはへ廻
り廻り、と鹿背杖の両端持つて
の小廻り美しく、山の妖精は優し
い感じの山姥に思えた。(1時間
40分・2月7日・青陽会)

〔雲林院〕シテ九郎右衛門、京
都在であれば言わば御当所の能、
あくまで雅びに上品。神経の行き
届いた舞ぶりには香気。クセ中、
へ狩衣の袂を冠の巾子に打ち被
き、で左袖被くと、へ忍び出づる
や、と駆け落ちは扇で面を隠して
往く二月の宵闇の中、へ降るは春
雨か、と扇翳シ見上げる憂愁の風
情、いかにも深い。(1時間44分)

〔宝の笠〕主・又三郎が宝鏡に
出す品を求め都へ来た太郎冠者
・小三郎、まんまとスツパ高義の
巧言に欺り、かの為朝が鬼ヶ島で
分捕ったという宝の一、隠れ笠を
掴まされる。前は、珍品を手に入
れたと大喜びの屈託のなき、騙さ

れたと判った後は、スツパを真
似、何とか主の手前を取り繕い誤
魔化そうの魂胆、稚氣満々の小三
郎が愉快。(23分)

〔葵上・梓ノ出・空ノ折〕シテ
清和、小書で大・小アツサの囃子
で出るが、三ノ松でのシオリのま
ま一ノ松へ出るのが珍しい。へ梓
の弓の音、右ウケ尋ねる態は、へ
問ふ人も無し、で膝をつく、車
の長柄に見立てた一ノ松勾欄に凭
れシオリは、ワキツレ朱雀院臣下
・順三に名を問われて立ち、静か
に舞台へ入る、クドキはツレ巫女
・芳伸との連吟。シテはへこれは
六条の御息所の怨霊なり、と巫女
にアシラフも、巫女は臣下と向き
合っている。シテが巫女に乗り移
り、巫女の口を借りて臣下に伝え
る態で、見事な連吟にシテの思い
は重複され、暗い情熱に鬼気をみ
せる。クドキあと、へ今は打た
は、と居立ち出小袖見込む勢い
は、巫女のへあら浅まじや、も聞
かばこそへいや如
何に言ふとも、と
巫女へ左袖アシラ
ヒ強い意志を示す
と立ち、へちや
う、と鋭く打つ。
枕ノ段はへ沢辺の
蜜、の面使ヒ、中
入は扇投げつけ二
ノ松へ駆け膝つき
唐織引き被き幕へ
行くところ、鮮や
か。

後は、立湧地紋
の白綾被キ一ノ松
へ。一度伸び上つ
て様子窺い、舞台
に入りひっそりワ
キ横川小型・弥三
郎の背後に踞る辺



⑥青陽会「山姥」近藤幸江

⑦観世会「雲林院」片山九郎右衛門

⑧「葵上」観世清和

(杉浦賢次氏撮影)



⑥青陽会「山姥」近藤幸江

⑦観世会「雲林院」片山九郎右衛門

⑧「葵上」観世清和

(杉浦賢次氏撮影)



⑥青陽会「山姥」近藤幸江

⑦観世会「雲林院」片山九郎右衛門

⑧「葵上」観世清和

(杉浦賢次氏撮影)

りの冷気は、折りで白綾撥ねて立
つと小型への激しい闘争心。襟白
二・白地金鱗箔着付は同前、白般
若・長髪・緋長袴の妖しい美しさ
に気品も漂うシテは、折りで長髪
左手に取って手繰ると二ノ松へ。
姿見失った態に小型は出小袖に向
かい数珠を揉む小書「空ノ折」、
シテはそれを胸杖に見込むところ
など、緊迫した。(45分・2月8
日・観世会)

〔驚〕シテ梅若殿ノ家来・祐
一、いかに主が驚を好くともアド
劍主・友彦を無視して籠の驚を綱
竿で刺そうは大胆。面詰されても
けろりとしてねたり、遮二無二手
に入れて主の歡心を買いたい祐一
の執拗さが、おっとりした持ち
味が嫌みになるのを助け、また、
根負けして腰の物などを担保に勝
負に必死する友彦の粘りも持ち味、
二枚腰で譲らない。刺し損なう下
手な竿捌きで太刀・刀を取られ、
嘆き節の呻きは竿投げ捨てて「あ
いしないたり」と祐一のトメ、両
者好調。(31分)

〔鞍馬天狗〕シテ正邦、前は偉
丈夫の山伏の存在感。花見は半若
(子方)に公衆と聞く十人の稚児の
賑やか。付添うワキ僧・雅介の勸
めで、アイ能力・靖浩が稚児の慰
みに座興で舞う酒脱な小舞「風
車」を行儀よく神妙に見物するの
も微笑ましい。そこへ山伏を見咎
めて能力、騒ぎは無用と稚児と引
き上げる僧、残る山伏と半若・正
明は親子共演。へ鐘は聞えて、の
心持ちは花明りに「此方へ入らせ
給へや、のころ(写真)、半若の
緊張は、前場最後の役話ロンギへ
とこの極、健気に一所懸命動める
姿が立派。

後は、シテ天狗と半若の問答
に、師匠を重んじ、弟子を愛おし
む、心の通い合いが、共演する
親子に重なり、何かほほのほした
感じ。兵法の奥儀伝授の舞動に、
鬱然たる重みは見えないが、キリ
に一ノ松で「弓矢の力を添へ守
るべし、ときりと左袖巻キ上げ
る勢いの壮快に、頼み甲斐のある
をみた。地頭・邦久、主後見・嘉
夫、囃子は学・啓次郎・総一郎・
好信。(1時間10分・2月14日・
名古屋能楽堂定例公演)

〔鞍馬天狗〕シテ正邦、前は偉
丈夫の山伏の存在感。花見は半若
丈夫の山伏の存在感。花見は半若
丈夫の山伏の存在感。花見は半若

〔驚〕シテ梅若殿ノ家来・祐
一、いかに主が驚を好くともアド
劍主・友彦を無視して籠の驚を綱
竿で刺そうは大胆。面詰されても
けろりとしてねたり、遮二無二手
に入れて主の歡心を買いたい祐一
の執拗さが、おっとりした持ち
味が嫌みになるのを助け、また、
根負けして腰の物などを担保に勝
負に必死する友彦の粘りも持ち味、
二枚腰で譲らない。刺し損なう下
手な竿捌きで太刀・刀を取られ、
嘆き節の呻きは竿投げ捨てて「あ
いしないたり」と祐一のトメ、両
者好調。(31分)

〔鞍馬天狗〕シテ正邦、前は偉
丈夫の山伏の存在感。花見は半若
丈夫の山伏の存在感。花見は半若

NHK放送予定(平成16年5月~6月)

Table with NHK-FM能楽鑑賞(毎週日曜日午前7時15分~8時) and program details for May and June.

能 楽 の 友

発行能楽の友社

名古屋市中区千種2丁目18-18 (郵便番号 464-0858) 電話 (052) 731-7984 FAX (052) 733-2837 振替口座 00800-6-36393

演能カレンダー

名古屋能楽堂

(TEL 052-231-0088)

Calendar of performances for May and June at Nagoya Nohkan.

熱田神宮能楽殿

(TEL 052-671-0852 文化殿)

Calendar of performances for June at Natsuta Shrine Nohkan.

春の褒章 紫綬褒章 大鼓方葛野流 亀井忠雄氏(六二)

第18回 長良川薪能

観世喜之師ら来演 8月6日 長良川河畔で

夏の風物詩として親しまれ、東海地方で最大規模をもつ「長良川薪能」は、ことし8月6日(金)午後6時から岐阜市の長良川河畔で開演される。

ナディア狂言

若手狂言師の上演による第6回「ナディア狂言」は、六月十一日(金)名古屋栄3の青少年文化センター・アートピアホール(ナディアパーク11階)で開催される。

第24回 大阪城薪能 7月26日 「敦盛」「葵上」

読売新聞社、読売テレビ主催による「大阪城薪能」は七月二十六日(日)大阪城西の丸庭園で開催される。

山本則孝、能「橋弁慶」笛ノ巻(観世喜正)の上演。開催は、8月6日午後5時半開演、午後6時開演、会場は岐阜グランドホテル前、長良川河原特設舞台、入場無料で約八〇〇〇人を収容する広さ。

巽会東海大会番組

五月二十二日(土)九時半始 名古屋能楽堂

名古屋正花会

五月二十三日(日)十一時半始 名古屋能楽堂

Program list for the events, listing various plays and performers.

金剛流 豊星会

五月三十日(日)九時四十五分始 名古屋能楽堂

松月会 能と囃子の会

六月六日(日)九時三十分始 名古屋能楽堂

Program list for the events, listing various plays and performers.

戦後名古屋能楽史 ⑤

〔第十三章〕 竹尾 邦太郎

昭和三十四年（一九五九）

（承前）
五月十日、田鍋惣太郎舞台六十年記念能が大観能楽堂で行われる。番組解説に著名な能評家・北岸佑吉は「大御所の大能」と題し、拙筆を称える次の一文を寄せる。

田鍋惣太郎氏が芸どころ名古屋の大御所的存在であるばかりでなく、東西を通じて能楽界の長老であることは、今更いふまでもない。関西には、終戦の前後に疎開していられたこともあり、芸術祭五流能などの大能には欠かせぬ小鼓名手として、おなじみが深い。念して、一昨年来、地元の名古屋で連催された「五流道成寺」の能会という空前の壮挙は、その高齢にもめげぬ意力体力に敬服せざるを得ない。また昨年の東京に続く大阪の記念能を「五流道成寺」の延長とされたのは、日本の芸能に大きい分領を占めている道成寺芸術の六百年祭への協賛ともなり、益々意義深いものがある。しかも、氏の常々からの主張通り、一流に備せぬ大能にされたことも、まさに我が意を得たものと思ふ。

まず、大阪の長老大観十三氏による「翁」の囃子に続く手塚雅三氏の舞囃子「養老」で、大能の儀式的な序の部分が厳かに整えられ、絢爛の舞台が展開されるのである。――以下、演目解説略

また、催主田鍋惣太郎は「お願ひ」として次のように言う。

私の舞台六十年記念能は一昨年五月、名古屋にて日加寿能五日間、五流能開催、一昨年十月、東京にて昼夜二部、五流能開催、幸ひ両会共大盛會無事終了悦んで居ります。然るに此度、大阪先輩楽師諸君のおすめにて、催されて頂きます。

お当地は私若年の頃より旧博物館舞台、大阪能楽殿舞台披露當時より毎年数度づつ出勤、また、近年は大観・山本・山中、各別別会や、朝日五流能・産経能、にも度々出勤して頂き芸道の修業になり悦んで居ります。

今回の催能も各楽師の出演お快諾を頂き大へん立派なる大能になりました。私も道成寺は此度で四十五回目になり、当日無事勤め得る様祈って居ります次第、どうか皆様のお力添へにて盛大に終了させて頂く様お願ひ申上げます。

又偶然に本年は紀州道成寺六百年記念の由、当日同寺より会場に出陣頂きます。御承知の同寺は能楽道成寺に因み深きお寺にて錦上花を添へ悦んで居ります。敬具

番組は囃子四番「翁」「養老」「通小町」山中信之「龍虎」山本勝一・真義、仕舞十三番、一調一「玉鬘」大倉六蔵・梅若義、狂言「財宝」茂山弥五郎、能四番「清経」辰巳孝、杜若、和島富太郎、「蟬丸・替ノ型」山本博之、大西信久、「道成寺・赤頭・無鬘」大槻秀夫（5）、福王茂十郎（5）、茂山忠一（49）、囃子方藤田六郎兵衛・田鍋惣太郎（75）、山本敬一郎・三島太郎、地頭梅若義（48）、後見手塚雅三（60）、鐘後見大槻十三（69）、括弧内は年齢。文字通りの大能である。



朝日狂言会「福の神」昭和34年4月5日
左より大蔵弥太郎（後見）、茂山弥五郎、茂山幸四郎

虎「山本勝一・大槻文蔵、能「羽衣・和合ノ舞」大槻秀夫、狂言「吃り」佐藤卯三郎、能「安宅・勸進帳・滝流」梅若六郎・高安滋郎、仕舞二番「笠ノ段」梅若万三郎「玉ノ段」観世喜之、半能「石橋・大獅子」柴田初太郎、取。当地三役の外に、大鼓山本敬一郎・孝、太鼓前川善雄が来演する。

五月九日、当地には縁が薄かつたが去る四月十六日、野村又三郎主催の狂言鑑賞の会でアド三番を勤めた和喜太郎（52）が、自身の指導するこれは会で「花子」を披露する。

五月二十四日、田鍋惣太郎の嗣子・惣一郎主宰の、たなびき会が十周年の記念能を催し、後藤孝一郎と吉田定男が「翁」を披露。番組は二部制で、十時半始の第一部は、「翁」梅若万三郎・山本勝一（千歳）、井上松次郎（三番更）、井上義次（面箱）、藤田六郎兵衛・後藤孝一郎（頭取）、田鍋惣一郎・洋一、吉田定男、舞囃子「高砂」梅若久、狂言「末広」河村丘造、能「二人静・立出ノ一声」観世喜之・武雄、独吟「蟬通」林恩蔵、仕舞「橋弁慶」梅若六郎・景英、能「狸々乱・双ノ舞」高橋静夫・橋岡久共。

四時始の第二部は、舞囃子「龍

比べるようなことになって、おかしなものになる、との反対論も出たが、誰がどのような順位をつけたいか伏せることにして、余興で点をつけてみよう、ということになった」という。順位は上から茂山弥五郎・市川寿海・滝沢修・中村勘右衛門・中村勘三郎・水谷八重子・松本幸四郎・花柳章太郎・千田是也・杉村春子。因に能・狂

言で名前が挙ったのは喜多六平太・橋岡久太郎・観世寿夫・観世静夫・茂山千之丞である。

このとき以来、このようなお遊びを寡聞にして知らないが、ともかくにも、この春、当地の朝日狂言会発会で「福の神」(写真)を勤めた茂山弥五郎が第一位であったことは御同慶の至り、論客各氏の眼識の高さであろう。

六月五日、恒例の熱田神宮大祭で、一昨年より定着した奉納能。舞囃子五番「養老」塚本秀雄「田村」高安滋郎「羽衣」柴田初太郎「龍田」山田仁三郎「狸々」鈴木右門、と狂言「不見不聞」河村丘造。神男女狂鬼を並べ、幕藩時代の金剛流座付の縁、高安流が「田村」を舞うのが珍しい。

◆仲春の舞台から◆

「九皇会」「茂山狂言会名古屋公演」と「名古屋梅猶会」「名古屋能楽堂定例公演・狂言尽し」及び「上野嘉宏独立披露能」

竹尾邦太郎

「自然居士」親の追善供養の布施捻出のため商人ワキ常好に身を売る少女（子方・中野眞吾君、殊勝に勤め可憐）を人道主義の立場から布施を返却して少女を救わんとワキを追う自然居士シテ宜夫。少女を中に硬骨のシテと狡猾なワキとの問答は迫真、見応え聞き応え充分、「絛に取りつき引き留む」の辺り（写真）氣力横溢、素晴らしい。執拗に解放を求めるシテに辟易、遂に音を上げ腹癒せはシテに舞を強要するワキ。シテは物着に掛絡を脱ぎ烏帽子（後折に非ず前折だった）を着けるが、慰みものにするとは「余りにそれはつれなう候」とワキにアシラへば、ワキは面を背けるように外し、「何のつれなう候」と、さつさと地前に下居するのは疚しき。この辺りの機微も面白い。中ノ舞三段・鼈・羯鼓の舞尽しはしゃき

しゃきと達者、羯は型だけで音はたてなかつた。憎体なワキが下品に墮ちないところは流石。（1時間5分）

「宝の笠」かぶれば余所目には姿が見えなくなるといふ安普笠を掴まされた太郎冠者・靖浩、主・祐一の怒りを買って打擲される（写真）が、スッパ雄雄に誑かされるのも、主の手前を何とか糊塗しようとするのも、太郎冠者の底抜けの人の好き、それが巧く出た。（31分）

「玄象」前場、俄の雨に音の調律、苦をへさつと葺き、とシテ瞭一、脇正近く出て僅かに面使つだけ、扇でする型の無いのが珍し。師長・範夫、シテとツレ真太郎に琵琶（写真）と琴の合奏を勧め、改めて己れの不明を恥じ立ち去るのをツレに見咎められ止められる処、シテ・ツレ連吟に「おほちと姥は走り寄り、とは言い条、

ツレは下居のまま、立つだけでも、と思わぬでもない。アイ友彦は大龍王の眷属、末社頭巾・面黒武悪・襟紺・厚板着付・括袴・縷水衣、一湯千里の立喋りの小気味よき。後場は龍神・英明の疾風迅雷の出現と退場の壮快、シテ村上天皇の早舞の暢達。（1時間31分・2月15日・九皇会）

「種酒」留守中に盗み酒させまいと上戸の太郎冠者・千五郎を軽物蔵（絹布を収蔵する）へ、下戸の次郎冠者・千三郎を酒蔵に閉じ込め、切戸へ中入する主・茂。それを見計らうかに下戸の飯面を脱ぎ酒壺に手を着ける次郎冠者に、その氣配を察して羨む太郎冠者。必要は発明の何とやら、窓越しに樋が差し渡されて太郎冠者も酒にありつけば、お定まりの誂い舞う宴。己が工夫を誇るかに「かけて通へや」と朗々と誂い出す千三郎の「葛城」の一節、陰險大いに利けば、「七つに成子」の喜々とした連吟に連舞の当て振りは何にも即興、兩人十二分に楽しむ。（25分）

「重喜」概ね子方の演じる重喜（新発意を千之丞が勤める面白さ。老僧・千作との丁々発止の遣り取りは布施の件、子方の無邪気とは異なる、肚のうち見通した突っ込みと、ずばり指摘する本音、老僧もたじたじて、この返り両者阿吽の呼吸の見事。剃髪は「弟子七尺去つて師の影を踏まざ」の謂、竹の先に剃刀を結び、薙刀宜しくいいで髪を剃らんとて、も面白半分の趣に見え、鼻を削ぐのも鼻歌交じり（地謡）の故意？、「やい重喜鼻を返せ鼻を返せ」と追い込む老僧には蓋の立った狎れて扱い難い新発意への空しい抵抗もある。手の内知り、尽した老巧な両者、お手並鮮やかな異色の「重喜」だった。齋に招く檀家はあきら。（20分）



①九皇会「自然居士」シテ中野眞吾、ワキ森常好、子方中野眞吾、高橋一、玄象、②「宝の笠」左から井上靖浩、井上祐一、③④（杉浦賢次氏撮影）

私詣に一年二年、過大な要求が一挙に一夜だけになる落差の大きさは妻の圧力の強さ、その一夜す（4面へつづく）

③面よりつづき
 「外へ」というのはフツツリとならぬ」となれば、妻を畏怖する太郎冠者・逸平を刀で脅してでも代役に立てねばならない。東の間の自由は有頂天の正邦、寸刻も惜しいとばかり、取る物も取り敢えず走り出す欣喜雀躍の中入、それだけに後場は、衣々(後朝)の別れの哀感、恋の切なさ、思い反芻する小歌が中々である。戻れば座禅衾の下、妻とは露知らず、「汝も面映ゆかろうぞ」と小歌に事寄せる徳気の纏綿、「君が来たらうにや、と君と呼ばれた嬉しさは、あろうことか「妻戸をほとほと」と扇で座禅衾の上から頭を二つつぶ浮かれ様に、怒りに打ち震える座禅衾の下、妻が思われ恐ろしい。入念な稽古ぶりが窺え、正邦立派な披露。(1時間7分・2月22日・茂山狂言会名古屋公演)

「半部・立花供養」正先の立花に向かい左斜めに下居合掌のワキ僧・雅介、供養済ませ戻ると大小(鉦一・啓次郎)アシラヒでシテ里女・吉之丞は一ノ松、面若女・襟白二・露芝文白摺着付・扇面二小菊文唐織、楚々とした佇まいに寂し。手向けた白い花を巡るワキとの掛合に舞台へ入るも、素性暖味のまま淡あわとした空気を残して中入する短い前場が送り笛(希世)と相俟ち余情。

後場、柴垣付半部門(夕顔門)を一ノ松、立花に向け据える。これに向かい五条辺りに来た態に常座近く出たワキが戻って座付くと、後シテ夕顔女が幕を放れ、半部門の内、床几に掛かる。「花の姿をまみえなば、とワキへアシラヒ、亡き跡叩いて下さるか、の願いは勿論、の答、へさらばと思ひ、で直ルとへ草の半部、を押し上げて静かに出る処、着付を花菱文摺箔に替えて緋大口・鉄線文白長絹の姿は優に淑やか。

クセは上げ端あと、へ扇を手に触ふる、とスミで左手に替えて扇の端を持ち、へ契りの程の嬉しさ、と左へ廻るとき、扇抱く様に見えるのが印象的。序ノ舞は、常座から立花を見込むとワキへ進み正中、右膝つき扇畳むと右手に持ち合掌の処、ワキも向き合い合掌暫時、舞の中の回向に感謝の図



名古屋能楽堂定例公演・狂言つくし「節分」善十郎

式が面白い。キリはへ明けぬ先に、の返シ句で橋懸へ、半部門に入って半部が下ろされ、後ろ姿のまま離子のトメ。気品のある美しいシテだった。(1時間32分)

「呂運」シテ僧・又三郎、「出家程心安い者は御座らぬ」と揚言するだけあり、止宿先の茶屋・高義の目にも心安いと映ったか、茶屋は妻・小三郎に相談も無く一念発起、その場で剃髪、すったもんだの末、僧名まで付けて貰う。命名の仕方は出任せの安直、尤もらしく手帖を繰る又三郎が可笑しい。一方、食事を告げる妻、夫の出家姿に驚愕して僧の弁明も無視、責め立てれば、夫まで妻に加減許せんといったところ。前場の騒動と後場の騒然、塩梅のよさ。(22分)

「道成寺・赤頭」シテ二世猶義、祖父初世の三十三回忌に手向ける。前は面近江女・襟白赤・赤地摺着付・黒地紋腰巻・金地網目二蝶菊文唐織垂折、物着に烏帽子を着け一ノ松、執心の目付で鐘を見込み、裂帛の気合で打つ大鼓(総一郎)に乗ってシテの昂ぶる心臓の鼓動も共鳴するか、舞台へ入る勢いに熱気。眼目の乱拍子(富司忠)は左手で腰を軽く取り、三段で数拍子踏みの中ノ段、扇を左手に替えて握りワカを誦いつつ六段、その間に小さく右廻りに鱗形を描き、鐘暫し見上げ、くると正二直ル処など気力充実。「名付けたりや、と鐘の方へ急転回、乱拍子に圧縮されたタメが一気に爆発する鮮烈な急ノ舞が冴える。鐘入も見事である。白綾着付・白大口・紫水衣・小刀のワキ勝久は重々しい語に自ずから滲み出る貫録。

鐘が上がると、赤頭・白般若・着付を白地摺箔に替え、緋長袴に白綾を腰に巻き、赤打杖を胸杖に安座の後シテ。ワキとの折り(六郎兵衛・小・大・慎也)、鱗落シ、シテ柱を外から内へキリキリと伸び上って巻いてゆく柱巻、蛇身は長袴を綺麗に捌いてしなやかである。キリはへ鐘に向って吐く息は、と膝ついて見上げる未練から立つと、地の裡に走り込み、幕へ入って飛んだ。

ワキツレ元・正樹、アイ小三郎、融、地頭・智久、主後見・栄夫、主鐘後見・吉之丞。(1時間37分・3月7日・名古屋梅酒会)

「悪太郎」伯父甥の仲、飲酒諷めるなら陰口無用とばかりに風聞にかこつけて押し掛け、伯父・又三郎から酒にありつこう魂胆見えく「悪太郎・高義。長刀に物を言わせ喧嘩腰で突っ掛ければ、先づは下手に出て到来の酒を飲ませ慰撫する伯父の年の功。しかし、酌の仕様を貶され、下戸を侮蔑されては腹の虫が治まらない。四杯目は「呑まにかいやい呑まにかいやい」と強制、「さてくだいわい」と酔いの回った悪太郎をなおも挑発、「も一つ飲まぬか」と煽って嗜虐性をみせる又三郎が旨い。

後場は帰途に就く悪太郎、路傍に酔臥のうち剃髪され、夢の告げに僧名授かり、出遇う念仏僧・小三郎の唱える六字の名号に反応する辺りは、打って変り殊勝な高義に、戸惑ううち乗っかってくる小三郎、がっぶり四つに渡り愉快。(37分)

「節分」シテ蓬萊ノ鬼・十郎、節分の夜、来日し俄の空腹、偶々

訪ねる人家に女・富太郎が独り留守居。驚愕する女に却って驚く鬼は、「腹立ちや」「出て失せいや」と罵られる度に恋慕の情を小歌に托す心優しさ。「愛し手繰り寄りや愛し、と慕い寄り、女の腰に取り纏れば、突き倒され、へしめじめと降る雨も、と両手ついて泣き出す体たらく。鬼の無害を知った女が宝の隠れ簀を取許するえげつなさなら、惚れた弱みの鬼は「鬼は外へ」と豆を打たれる哀れ、後味は宜敷くない。十郎が小歌尽したつぶり聞かせ堪能したが、久々の当地来演、直面で見たが、次の「弓矢太郎」にも鬼が出るので付き過ぎ、鬼尽しの番組ではないので一考欲しかった。(35分)

「弓矢太郎」シテ太郎・友彦、常に弓矢を携行は臆病者の噂。天神講の集りに遅参、狩りの自慢話をすれば、狐だけは止せと講中一同。アド当屋・祐一は妖狐玉藻前の故事を説き、更には灯を消し、強がる太郎の臆病風を一同で煽り失神させるが、懲りない太郎の依怙地、肝試しは鬼が出没するといふ天神の森へ行かされる羽目。虚勢をはる友彦、悪巫山戯の祐一、旨く絡む。

後場、恐怖を逃れるには鬼に同化するに如かず、とばかり鬼に変装する太郎、同様に鬼に扮して太郎を脅さんとする当屋、暗闇の中でダンマリ宜敷くの手探りは、互いに鬼を認めるや向人とも失神、先に覚めた太郎が講中の騒ぎを知り、謀られたと悟って一同を逆襲する。集団の中の苛めの構図に今日性があり、笑っては済まされない問題提起、好舞台。(52分・3月19日・名古屋能楽堂定例公演狂言尽し)

「屋島・大事」シテ清司、前は床几を出さず下居でワキ雅介の所望に源平合戦の語。鏡をへ鉢附の板より引きちぎって、の烈しい型は、激闘あは、激闘あは、と松籟を面伏せへ音淋しく、聞いてワキへアシラフ静寂の間(ま)と相俟ち説得力充分、戦の愚かさは今今のイラク戦争思い知らされるか。アイ小三郎、替で「那須之語」判官・実基・与一、三者の座の



「屋島」那須与市語 野村小三郎



「屋島」大事 片山清司 (杉浦賢次氏撮影)



「羽衣」彩色ノ伝 片山九郎右衛門、

「末広」野村又三郎・井上祐一、

「石橋」大獅子・梅田邦久・梅田嘉宏 (杉浦賢次氏撮影)

移動する軌跡は右斜め後ろへ往復するだけに、動きは力一杯の躍動感溢れ、「ヒフツと射つ処(写真)」天晴れ若武者与一。

後は本床几に掛かり、立つとイロエ。脇座前で扇(弓)を落とすと囃子は急調となりシテは一ノ松へ。「そのとき」気付くシテは、危うい処を敵に弓取られじと鮮やかな流し足に弓を追う心。「されども熊手を切り払ひ」と太刀を抜き、扇を左手に拾い上げて再び床几に掛かる此の辺り、目覚ましい活躍は誰も型も見事、清司充実ぶりを遺憾なく発揮する。クセは上ゲ端あと、へ惜しまぬは(一命)、と立ち常座へ、へ佳名を留むべき、とワキへ指シ己が気持ち強調する。小書でカケリを抜き、地との掛合にきびくとした型の連続が冴え、キリはへ船戦の駆引、と大小前へ太刀を捨て一ノ松、白々と明ける春の夜の波、を下に見、へ敵と見えし、鶴の群に面使って一旦横板まで退さると、地の裡に幕へ走りワキ留。近頃には無き力強く快な「屋島」立派な舞台だった。(1時間58分)

「末広」糊癖の強い主・又三郎に楽天的な太郎冠者・祐一、持ち味が出る。「トットトット、イイヤーツ(写真)」と片膝つきシャギリ留(27分)

「羽衣・彩色ノ伝」シテ九郎右衛門、面増・天冠白蓮華戴・襟白

◆ NHK教育テレビ ◆
能・狂言鑑賞入門
 6月放送予定 土曜日13:00~13:30
 (再放送)火曜日5:30~6:30

6月5日	能「松風」(1) ～謡を聴く～	講師：高桑いづみ (東京国立文化財研究所芸能部 音楽舞踊研究室長) ロケインタビュー：関根祥六(親世流シテ方) 司会：水谷彰宏アナウンサー
6月12日	能「松風」(2) ～謡を聴く～	講師：高桑いづみ ロケインタビュー：関根祥六(親世流シテ方)
6月19日	能「弱法師」 ～型を見る～	講師：高桑いづみ ロケインタビュー：友枝昭世(喜多流シテ方)
6月26日	狂言「千鳥」 ～歌謡を楽しむ～	講師：高桑いづみ ロケインタビュー：茂山千作(大藏流狂言師)

天界の様子・駿河舞の謂れ・天界に比肩する地上の景色、などを言うクリ・サシ・クセは抜け、序ノ舞は穏やかに晴れやかな趣、破ノ舞も抜けイロエは舞台一巡して二ノ松へゆき、勾欄に寄り袖被キ暫時(写真)、やや伏せた面は交々の感慨を反芻するか。キリの型も美しく、三ノ松でトメ、舞込みにしななかった。(1時間2分)

半能「石橋・大獅子」片山門の上野嘉宏、独立の披露能、梅田邦久の芸事後継者として今後は梅田姓を名乗る。白・邦久、赤・嘉宏、ワキ寂照法師・元は姿門出立。名倉から清涼山に至り、石橋を望んで「暫くこの辺りに休らひ橋を渡らばやと候」で座付き、紅白の牡丹の一畳台が出る乱序(学・嘉津幸・眞之介・義命)で白が出、台上から幕を見込むと赤が一ノ松へ走り出る。獅子の舞は親子舞戯れる趣。キリはへ黄金の蕊、で見せた獣足とでも言うべきもの巧み、白・赤が飛び上がりざま台上安座の鮮烈、華やかに舞い納めた。(21分・4月4日・上野嘉宏独立披露能)

白が出、台上から幕を見込むと赤が一ノ松へ走り出る。獅子の舞は親子舞戯れる趣。キリはへ黄金の蕊、で見せた獣足とでも言うべきもの巧み、白・赤が飛び上がりざま台上安座の鮮烈、華やかに舞い納めた。(21分・4月4日・上野嘉宏独立披露能)

発行能楽の友社

名古屋市中区千種千種2丁目18-18
(郵便番号 464-0858)
電話 (052) 731-7984
FAX (052) 733-2837
振替口座 00800-6-36393
購読料 1年 1100円
郵送の場合 1年 1800円

能楽の友

NHK放送予定(平成16年6月~7月)

●NHK-FM能楽鑑賞(毎週日曜日午前7時15分~8時)
6月27日 「小督」(再)(親世流) 梅若六郎ほか
7月4日 「俊寛」(親世流) 関根祥六ほか
7月11日 「敦盛」(喜多流) 内田安信ほか
7月18日 「素襖落」(大藏流) 茂山忠三郎
茂山良暢、善竹忠重
7月25日 「忠度」(再)(宝生流) 今井泰男ほか
●NHK教育テレビ
7月17日(土) 14:00~16:10
狂言「業平餅」 野村万斎
「鞠猿」 野村万作、野村万斎、野村裕基

演能カレンダー

名古屋能楽堂

(TEL 052-231-0088)

[6月]
20日(日) 名古屋宝生会定式能 (有料)
27日(日) 壺泉会大会 (番組①面)(無料)
[7月]
4日(日) 狂言三の会第3回公演 (番組①面)(有料)
9日(金) 名古屋能楽同好会ゆかた会 (無料)
11日(日) 第5回御洒落名匠狂言会 (番組①面)(有料)
16日(金) 名古屋能楽堂定例公演 (番組②面)(有料)
17日(土) 第5回伝統芸能上演会 (番組②面)(有料)
18日(日) 名古屋親世会定式能(普及公演) (番組②面)(有料)
19日(月) 也留舞会・信誼会合同発表会 (番組②面)(無料)
31日(土) 七 彩 会 (無料)

熱田神宮能楽殿

(TEL 052-671-0852 文化殿)

8月7日(土) 名古屋薪能 (神楽殿前)(番組②面)

第39回 名古屋薪能 8月7日 熱田神宮で

第39回「名古屋薪能」は、きたる八月七日(土)午後五時四十五分から熱田神宮神楽殿前の特設会場で催される。
観世流能「吉野天人」(シテ久

第3回 名駅・薪能 7月25日 観世宗家来演

JR名古屋駅タワーズガーデンで、観世流宗家・観世清和師らが来演して七月二十五日(日)「第三回名古屋名駅薪能」が開催される。
この名駅・薪能は平成十四年、名古屋名駅新能実行委員会、財団法人観世文庫の主催で

和泉流狂言方 野村万之丞氏逝去

和泉流狂言方・野村万之丞氏は六月十日午前八時二十分、内分秘がんのため東京都内の病院で逝去した。享年四十四歳。近親者のみで密葬を営み、後日、本葬が行われる。喪主は妻久美子さんと弟与十郎氏。
万之丞氏は野村萬七世万蔵氏の長男として生まれ、三歳で初舞台、狂言師として活躍する一方

壺泉会大会

六月二十七日(日)午前九時二十分始
名古屋能楽堂

Table listing performers and roles for the Utsunokawa Kaikai. Columns include role names like 神歌, 高砂, 玄象, 半部, 羽衣, 盛久, 弱法師, 景清, 鸚鵡小町, 木賊, 舞臺子, 附祝言, 御来聴歓迎.

狂言三の会第3回定期公演

室町の笑ひ、江戸の粋
七月四日(日)午後三時開演
名古屋能楽堂

第5回 御洒落名匠狂言会

七月十一日(日)午後一時開場
午後一時半開演
名古屋能楽堂

前売券(全席指定)
S席七五〇〇円、A席五五〇〇円、B席三五〇〇円、C席二五〇〇円
狂言共同社 TEL 052-834-6112

名古屋文化芸術創造賞

狂言方野村小三郎氏受賞

名古屋文化芸術創造賞は、名古屋文化芸術振興事業団が、第二十三回芸術創造賞として、伝統芸能の分野で和泉流狂言方・野村小三郎氏(三三)の受賞を決定した。授賞式は六月二十三日、名古屋・栄三の名古屋文化振興事業団(名古屋青少年文化センター)で挙行される。

この賞は、名古屋の芸術文化振興の一助に、故亀山巖氏(初代理事長)から昭和五十九年に寄付された三千万円を基金として、昭和六十年に設置された。名古屋市の芸術文化の向上と発展に寄与した方に贈られる年度賞で、前年度における芸術創造活動が特に顕著で、今後の活躍が大いに期待される個人又は団体を対象として表彰する。

【受賞者の略歴】
 本名・信行(のぶゆき)、和泉流野村派十二世当主・野村又三郎信廣の長男として生まれ、昭和五十一年、四歳のとき「靉猿」の猿で

初舞台。学業のかたわら芸道の修業に励み、六十一年十四歳で「三番叟」を披いたのを皮切りに、十六歳で「那須語」、十七歳で「千歳」、二十歳で「釣狐」を披いて独立(社団法人能楽協会入会)し本格的に活動を始めた。平成六年に東京芸術大学音楽学部邦楽科(狂言専攻)を卒業、八年に同大音楽部別科邦楽(謡曲専攻)を修了しているが、在学中から活発な活動を継続し、同年には「金剛」を披き四世野村小三郎名跡継承を披露、十二年に三十歳で「花子」を披いている。

また平成八年、能楽「鏡座」を結成、狂言「なりの座」の結成に参加するなど、伝統芸能の普及・発展に尽力している。さらに、ミュージカルへの出演など異ジャンルとの共演にも意欲的に挑戦し、その広範な活動は多方面から注目を集め、高い評価も得ているなど、将来が大いに期待されている。

第39回名古屋新能

八月七日(土)午後五時開場
 午後五時四十五分開演
 熱田神宮神楽殿前 特設舞台

番組
 (善多)難波 長田 郷
 (親世)経正 祖父江 修一
 (金春)殺生 須部 甫
 仕舞 (親世)羽衣 須部 甫
 (金春)殺生 石 広瀬 雅弘
 (金剛)放下僧 熊谷真知子 河村真之介
 舞囃子 福井 良治 鹿取 希世

火入式 熱田神宮御宜 宮田 理博
 星野 路子
 加藤 春枝
 三村 恵子
 八神 孝光
 久田三津子
 橋本 幸
 佐藤 友彦
 祖父江 修一
 久田 勘助

吉野天人 橋本 幸
 佐藤 友彦
 祖父江 修一
 久田 勘助
 井上 靖浩
 井上 祐一
 米倉 宏貴
 後見 今枝 靖雄

和泉流 榎宜山伏 井上 靖浩
 井上 祐一
 米倉 宏貴
 後見 今枝 靖雄

名古屋名駅新能

七月二十五日(日)午後六時開演
 JR名駅・タワーズガーデン

橋弁慶 子方 久田勘吉郎
 シテ 久田 勘助
 舞囃子 葛 城
 シテ 久田三津子
 狂言 呼声 大和舞
 山本 則重、山本 則孝、山本 則秀
 武田 尚浩
 橋岡 慈親
 芳伸 貴弘
 上田 貴弘
 ツレ坂口 貴信
 シテ 観世 清和
 間 ワキ 森 常好
 飯田 清一 観世 元伯
 山本泰太郎 一噌 隆之

主催 財団法人観世文庫
 名古屋名駅新能実行委員会

夏休み親子能楽教室

8月3・4日2日間

【夏休みに「吉野天人」よしのてんにんを能舞台で舞いませんか】と名古屋能楽堂で親子教室が八月三日、四日の二日間開催される。

この企画は能楽普及事業実行委員会主催、能楽協会名古屋支部協賛により催される。

日時 八月三日(火)・四日(水)の二日間、一日目・仕舞の練習(子供)、謡の練習(親)二日目・能舞台での発表会

曲目「吉野天人」(観世流)

【名古屋新能番組】

【夏休みに「吉野天人」よしのてんにんを能舞台で舞いませんか】と名古屋能楽堂で親子教室が八月三日、四日の二日間開催される。

この企画は能楽普及事業実行委員会主催、能楽協会名古屋支部協賛により催される。

日時 八月三日(火)・四日(水)の二日間、一日目・仕舞の練習(子供)、謡の練習(親)二日目・能舞台での発表会

曲目「吉野天人」(観世流)

【名古屋新能番組】

附祝言

【会員券】前売二五〇〇円(当日三〇〇〇円)
 学生一五〇〇円
 前売券取扱所 チケットぴあ(052・320・9999)
 市内プレイガイド、各出演者
 お問い合わせ 前日まで 052・241・3146 (福井方)
 当日のみ(13時~16時) 052・682・1751 熱田能楽堂

名古屋能楽堂定例公演

七月十六日(金)午後六時半開演
 名古屋能楽堂

狂言 佐渡狐 シテ 大野 弘之
 後見のお百姓 佐藤 友彦
 後見 井上 祐一
 久田勘吉郎
 久田 勘助
 飯富 雅介
 河村真之介
 加藤 洋輝
 高安 勝久
 福井 良治
 大野 誠
 杉江 正樹
 佐藤 融
 梅田 嘉夫
 地謡 高島 良一
 外山 圭一
 清沢 一政
 松山 幸親
 古橋 正邦
 梅田 邦久
 須部 甫
 祖父江 修一

主催 能楽普及事業実行委員会
 名古屋文化芸術振興事業団
 名古屋名駅新能実行委員会

第5回 伝統芸能上演会

七月十七日(土) 開場 正午
 舞台体験 零時半から一時半まで
 上演会 午後二時
 名古屋能楽堂

【入場料】前売一般三千五百円、学生二千円
 (当日一般四千円、学生二千五百円)
 【取扱所】名古屋能楽堂(052・231・0088)
 チケットぴあ(0570・02・9999)
 市内プレイガイド

御来場歓迎

【御来場歓迎】
 主 東海能楽研究会
 後 名古屋教育委員会
 愛知県教育委員会

名古屋観世会定式能(普及公演)

七月十八日(日)十二時半開演
 名古屋能楽堂

成経 清沢 一政
 康頼 古橋 正邦
 俊寛 飯富 雅介
 河村真之介
 後藤孝一郎
 鹿取 希世
 梅田 邦久
 飯富 雅介
 後藤孝一郎
 松山 幸親
 久田 勘助
 片山 清司
 片山九郎右衛門
 須部 甫
 祖父江 修一
 武田 邦久

主 名古屋観世会
 後見 久田 勘助
 片山九郎右衛門
 地謡 高橋 敏一
 梅田 邦久
 高橋 敏一
 片山 清司
 梅田 邦久
 正邦

合同発表会

七月十九日(祝)月)十時三十分始
 名古屋能楽堂

狂言 也留舞会
 謡曲 信謡会
 昆布壳 大 名 曾我 太郎
 柿山伏 山 伏 三浦 忠季
 (小学五年生)
 口真似 太郎冠者 柴田 聖子
 素袍落 太郎冠者 伊達 義也
 (小学二年生)
 文山賊 山 賊 伊藤 泰
 引括 太郎冠者 伴野 俊彦
 仕舞 羽 衣 衣 育子
 鐘の音 太郎冠者 伊藤 悦子
 船渡舞 船 頭 庄司 武
 膏薬煉 都 方 畑中 春華
 (小学五年生)

御来場歓迎 (入場無料)
 主 和泉流 信也 留舞会
 後 観世流 信也 留舞会

戦後名古屋能楽史

〔第十三章〕

竹尾 邦太郎

昭和三十四年（一九五九）

（承前）
六月七日、中部能楽師会は「西王母」加藤総兵衛、「腰折」佐藤卯三郎、舞囃子「船弁慶」加藤良久、「杜若」内藤泰二、舞囃子「邯鄲」大塚二二、「安達原」殿島修二。この中部能楽師会は前年の三月一日に発足、理事長西村弘敬以下役員を選出し、活発に運営することとなった、と意気盛んな筈であったが、二年目にして頓挫か、会名だけを残したか、以後、中部能楽師会定式能の名の催会は途絶えて今日に至る。

六月十四日は観世会第三回、素話「小督」尾関健太郎、仕舞三番「賀茂」久田秀雄「班女」杉村竹翠「鶴鶴」岩田与司、「実盛」梅若六郎、「鼻取相撲」河村丘造、「富士太鼓」山本博之、「葵上」梓ノ出「梅若猶義、大鼓に青田喜兵衛の来演。
六月十九日、折柄来日中のフランス文化使節団のうち美術関係の一行が徳川美術館を訪問。このため、二十一日までの三日間、所蔵の国宝・源氏物語絵巻の「柏木」の詞書及び図二面、「横笛」一面、「竹河」二面が、その他の所蔵品と共に特別展覧される。

翌二十日、掬水青陽会第三期第二回は連吟「賀茂」林恩蔵・甲子夫、「芦刈」久田秀雄、仕舞「善知鳥」武田太加志、「千手」柴田収、「空腕」井上礼之助、「熊坂・替ノ型」観世元昭、舞囃子「岩船」柴田初太郎。因に掬水青陽会は第七期第三回（昭和39年3月8日）からは掬水を省き青陽会となる。なお第二十六期（昭和57年）頃まではほぼ毎回、当地観世流各結社の師匠筋に当る東西各家からの客演一番があり、今回の観世元昭もこれに該当、前年の「井筒」に続き二度目で、青陽会の出演は通算十一回の最多、出来るだけ沢山の舞台を勤めさせたいという宗家側の思いもあろうか。次に、こ

度の来演を機に中部日本新聞が行ったインタビュー記事（六月二十四日付夕刊）を紹介する。
観世流宗家の弟、観世元昭は早大演劇科に籍をおく二十三歳の若いインテリ能楽師。同年輩のハヤシ方などと力を合わせて「五人の会」を作り新鋭らしく研究熱心なところをみせているが、このほど掬水青陽会のため来名したので「これからの能」について聞いてみた。
風当り強い家元制 非情なまでに機械化された現代生活から一時でも解放されようと、能舞台にゆったりとした情緒を求める若い愛好者が多くなりましたが、それとともにこれからの能のあり方に對し、家元制度の批判など風当たりは相当強いようです。私がいうのもおかしな話ですが、能や古典芸能の分野ではとにかく家元の子というだけで尊重され、才能があっても芽が出ない場合が多い。つまりスカウトなんてものは、やらないう世界ですが、それはやはり小さい時分から教えこまねば一人前になれないという芸の訓練方法そのものにも原因があると思います。しかし同じ芸を教えることというやり方でも最近はずいぶん変わってきています。昔はとにかく覚えるまでたたきこまれたものですが、いまは努力しなければ放っておかれらぬというやり方です。
ほしい理論的支柱 しかも私たちが若い者は、こうして伝えられてきたからそのとおりにやるといってのはなしに、なにが理論的な支柱がほしい。極端な例ですが、謡曲ひとつでも洋楽の発声練習をといて、ききれいに舞うことばかり考えていると批判もあるわけです。こうした考え方に基本的な技術がマッチすれば申し分ないんで

すが。能を見て死ぬほど退屈 こういうタイトルのついた座談会記事が橋岡久共・和泉保之さんとついでに現行曲の研究を目的にしています。とにかく現行曲すら十分演じられないようでは、新作能もくそもないのですから。しかし私としては新作能も賛成ですし、また廃曲となつていくものも、どしどし復活していきたいですね。廃曲にもずいぶんすぐれたものがあるので、こうした研究的なものもかえってやりやすいし大いに意欲を持っています。
それと、私が映画に出るとか出ないとか、うわさが一時ありましたが、現在では考えていません。演技の交流によって進歩・発達とはいっても、演劇や映画に能の演技を取入れることはあっても、映画や他の演劇の演技を能の舞台に取入れても使えないものにならないから、能は借りられるばかりで、他から借りるものはないんですよ。
六月二十一日、宝生会定式能は第三期第二回、素話「敦盛」倉本雅、仕舞五番「邯鄲」鈴木右門「清経キリ」辰巳清「半部クセ」倉本雅「高野物狂クセ」辰巳孝「融」畑富次、「藤」内藤泰二、「入間川」井上松次郎、「三井寺」宝生英雄。
同二十一日、先に一部が徳川美術館を訪れたフランス文化使節団の一行二十人が、東京で下懸宝生流松本謙三の舞台五十年と還暦を記念する霞会能水道橋能楽堂で鑑賞する。番組は「翁ナシ」松本謙三「高砂・八段ノ舞」梅若六郎、独吟「花籠」森茂好、「熊野・説次ノ伝・村雨留」黒澤ノ伝・藤行「梅若万三郎、仕舞」羅生門「宝生弥一、「蝸牛」野村万蔵、「望月」宝生九郎。一行は「熊野」だけを見たらしいが、異国の伝統芸能に初めて接した感想は大凡文化人らしからぬ途轍も無いもの。六月二十四日付東京新聞夕刊に掲載された記事は「観世」八月号の「新聞展望」欄は次のように要約して論評する。

能を見て死ぬほど退屈 こういうタイトルのついた座談会記事が目についた。名づけて「日本の美」。出席者は来日中のフランス芸術家で、映画監督のジュリアン・デュビエ、画家のクロード・ブナル、彫刻家のオシッド・ザッキンの三人、彫刻家の高田博厚氏が司会をつとめている。この三人の近代芸術家たちが観能したのは廿一日の霞会能で、熊野のオール小書付が始められたところらしい。橋懸りに侍女、シテの熊野が出てくる。ザッキン「こいつは美しい。スタテユ（像の美しさだ）二十分ほどしてザッキン「がまんがでん。オレは出る」ド・ラクルテルは鼻をいじり、アシャルは居眠りし、デュビエは腕を組んで天井を見ている。ザッキンついに外に出る。——といった観能風景であつたらしい。公式招待で朝から晩まで引張り廻された挙句の観能は無理からぬこと、「ボクが裁判官だったら懲役五年を宣告するかわりに、能を五年とやるね」（デュビエ）というのが本音だつたようだ。十分な予備知識なしに観能するなど現代の日本人にしても無茶だというのが今日の常識である。能を見るには心身のゆとりが必要だ。

これに對して能楽協会はこの発言を問題視、「能芸術を冒瀆するもの」との声明を出す騒ぎになる。
六月二十七日、宝生会特別会は素話五番「羽衣」錦見思津代「船弁慶」近藤源十「玉葛」野口録久「景清」宝生英雄「鶴劍」辰巳孝、仕舞四番「班女」倉本雅「山姥」野口録久「松風」宝生英雄「天鼓」辰巳孝。
七月五日は第二回朝日五流能。二部制で会場は愛知文化講堂特設舞台。第一部は「邯鄲」金剛蔵、「瓜盗人」茂山弥五郎、「砧」親世鏡之丞、「舟弁慶」喜多実。第二部は舞囃子「高砂」金春信高、「安宅」延年ノ舞・貝付貞立「宝生九郎・松本謙三、「悪太郎」佐藤卯三郎、「道成寺」本田秀男・高安滋郎・井上松次郎・礼之助、囃子は藤田六郎兵衛・三須錦吾・吉見嘉樹・観世元信、地頭桜間道雄、主後見金春信高、鐘後見桜間

龍馬。既出の他に当地以外の、シテ方は豊嶋弥左衛門・今井幾三郎、観世寿夫、福岡周斎・粟谷菊生、梅村平史朗、松本忠安ら、三役は藤田大五郎、林寿一、安福春雄、茂山喜三、幸四郎の来演がある。当日、「砧」と「安宅」を勤めた田鍋惣太郎は後に自著「小鼓芸話」の中で次のように回顧する。
同日の宝生九郎氏の安宅延年も大へんやつかいなもので、これには東京まで申合せに参りました。延年の所は、宝生は抜き足のような型がありますね。梅若万三郎氏のエイツと跳上られる気合は大したものでした。幸い名古屋に居りましたために、万三郎氏でも左近氏

でもそれぞれ三回位ずつ安宅のお相手もさせていただいております。
この朝日五流能も「狂言」紙第二十二号のコラム「狂言人語」で歌村彦四郎が「期せずして豪華な五流能が二ツ盛り（中日と朝日）で見られる事は、狭い名古屋として有難いような、一寸食傷気味ではないでしょうか」と案じた通り、この年限りで閉館する。
以下次号

「青陽会」「観世会」第36回鳳の会 と「豊田市能楽堂五月定例公演」

竹尾邦太郎

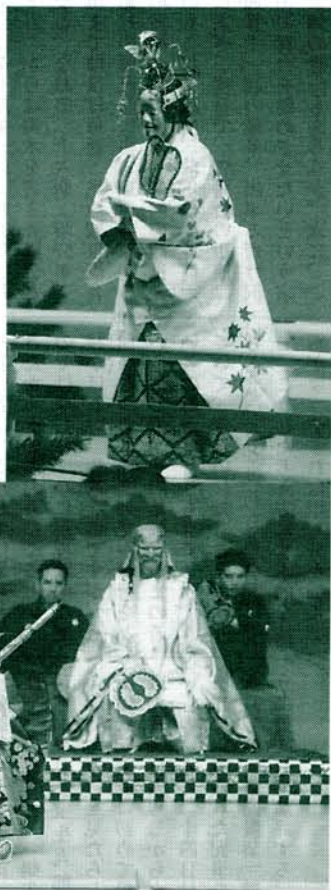
「賀茂」里女シテ郁子・ツレ幸江、賀茂の河原へ水を汲み出て爽涼の気を感じ、神の加護を祈る冒頭の連吟がいかにも綺麗で敬虔な響きなら、室ノ神職ワキ勝久に白

羽の矢の謂れを問われて応えるシテの語も口跡確かに明晰。中人にワキに素性問われ、「神徳を告げ知らしめんと」現れ出て、と居立ち、ひととワキを見据えたところで過言に気付き、中人地へ「恥かしや我が姿の、と立って行く辺り、女流の繊細、アイ末社は靖浩、水汲みに来た奈の氏女が流れて拾う
青陽会①「賀茂」前野郁子、②「偶田川」今沢美和、③「唐船」梅田邦久、河村裕一郎、河村万葉（杉浦賢次氏撮影）



白羽の矢を家の軒に挿し置けば、懐妊して男子を生んだ奇特を立シヤベリに、ワキの機嫌を伺って三段ノ舞を、済ませ退くと、後ツレ天女の舞は露を取る手際がもどかしい。後シテ別雷神はきびきびした舞動が杜快だが、小廻りに足が板につく重みは感じられなかつた。トメは二ノ松。拍子一ツ踏み幣を投げ捨て飛返ル。（1時間29分）
「偶田川」シテ美和。げげにや人の親の心は、と一ノ松、謡い出しが早過ぎて囃子（希世・孝一郎・鉦二）を戸惑わせるが、子と思う親心の焦りはシテの焦りか、道に迷う心細さは誰も力弱く憔悴も如実。が、その心象風景を反映、「尋ねる心の果やらん、と脇正、静かに右へ見る姿、思へば限りなく遠くも、では左手笠に常座から脇正へ眺める姿、型に込み上げる寂しみがあがる。船中はワキ語も哀調、「吉田の」で右ウケ面伏せ聞き入るシテの態は、「母ばかりに添ひ立て」で直ルが、硬直

のまま「事終つて候」と静かにシオル。上陸促されても微動だにせず、「なう舟人」でや々とシオリ解くと、思い切つてのワキとの問答である。悲劇が現実となって迫る処、「なうこれは夢かや、と纏る思いに掴み等を手放し、深く腰を屈めシオリ慟哭のシテに、「さては御身の」とワキが手放す水棒が大きな音を立てるのも効果的、シテとワキしっくり絡み上々。塚を前にクドキは「この土を、と双手で掘り返す型、脱力感もありありで、「この世の姿を、の双シオリも哀切。
念仏の段は珍しい子方無し。へ今一声こそ、と顔れる心に下居のシテに、応えるべき子方のへ南無阿弥陀仏、が抜けたのは大いに不審。へあれは我が子か、のシテに「母に、母に、母に、と、を地（勘助）政らが諷う以上、謡うべきだつたらう。文字通り吾子の幻像を求め探るシテ（写真）、前半の劣勢跳ね返し、後半は見事だつた。（1時間17分）
「謀生種」曲意はそのま、「はかりごと」を生むたね、「はちやうのたねと云うて嘘の種がある」とアド伯父に科白。
シテ勢・融、いつも伯父・友彦の嘘に言い負かされ、今度こそと意気込み雪辱期すも取え無い敗退。ああ言え、こう言う、と熱（いきる）勢を軽く遇う伯父。年の功が物を言うが、先手必勝とはゆかぬこと、野球などで後手が有利らしいのと同じ。勝つ秘訣に謀生種の存在を知らされるも、これも嘘、と翻弄され、「伯父ちゃん云うて余りな事ぢや」と追込みになる他流他派と異なり、山脇派は恥じ入って「面目もをりない」と退く処、「やうおりのやう」と旁う伯父、ほのほのした雰囲気がいい。（21分）
「唐船」抑留生活十三年の祖慶官人シテ邦久、唐に残した吾子二人が財宝を代償に迎えるに、帰国に同行を許されぬ日本生まれの吾子二人には引き止められぬ。当今喧しい拉致問題に似ようか、板挟みのシテの苦衷はクセ中、「船にも乗るまじ留るまじ」、投身の覚悟は正先へ出る氣（4面へつづく）



(3)面よりつづき

合に心持。この人情劇の割に、しみみりするところ薄かったのは、深刻な心理の綾を求められる子方四人の、何となくざわついて落ち着かない雰囲気、子方の年齢差・身長差も影響しようが、粗削りな舞台となったのは歪めない。

シテの船中の楽(が)は流石に手綺麗(写真)、ワキ箱崎何某・元も日本人の同行を許す俵見見せるところ爽やか。(1時間16分・4月10日・青陽会)

「楊貴妃・台留」大小前に小宮、引回シは目の覚める様な赤が珍しく、丹塗りの玉楼を鮮やかに見せるのもシテ六郎の演出の感性。ワキ勝久、アイ靖浩に遇って太真殿へ来り、様子へ窺は、やと思ひ候、で直ぐ引回シ下ろされる。大方は「九華の帳を押し除けて、で下ろされるが、いわゆる玉簾(前八・左右各五・後五、計二十三本の鬘燈障やかな内に床几のシテ、前を十本にせず中二本分空けたのが味噌か)、簾を隔て、玉妃は内にますますか、のワキの間に不思議はない。「九華の、と双手で簾を分け姿見せるが、雲の鬘つら、で再び閉じてしまうのが如何にも深窓の趣。君の只ならぬ悲歎伝えるワキに、「今更の恋慕の涙、とシオル貴妃は、簾の中だけに窺う表情も暗く沈む。証の簾を簾の隙から受け取り、更に、君と交わした言葉を求めるワキに、それも理、と、天に在らば、では右手唐団扇で簾を押し上げ右ウケ、へ地に在らば、ではその右手を下ろして再び簾の中に籠ると、「誓ひし事を、と左右の手で唐団扇挟み付けるのが、恠えられない思ひしと封じ込めんとするよう思われる。



名古屋観世会①「楊貴妃・台留」梅若六郎、②「張良」左より福王輝幸、山本順之

き分けて小宮を出る姿の美しさは、麗しい面増・模様大口・白地に楓菊椿葛などを散らした縫箔(か)重折の気品。夜遊を見せるとて簪を取戻し物着、イロエは抜き、クセは「哀れ儂き身の露の、で小宮の柱を左手に掴むのが身の振り所へ籠る思いか。「さるにても、の上ゲ端以下も心象沁々と、「さらぬ別れのなかりせば、で軽く踏む六ツ拍子には無念の思いも滲む。「羽衣の曲、に笛(六郎兵衛)が寂々とした特殊な譜を吹き、序ノ舞は舞の中、二ノ松へ抜けると勾欄に寄り、唐団扇しばし胸に抱く姿(写真)に、恋しき昔を偲ぶ万感、哀しくなる程の美しさは、此の後のシオリに寂寥も一入である。舞上げて再びワキに簪を授け、別れのキリは、二ノ松に平伏のワキを望見、招き扇に出、「この世逢ひ見ん事も、と膝をつきシオリと、シオリのま、立ち小宮の前へ。シオリ解き、伏し沈み、と膝つき唐団扇左膝に当て地一杯、立って右ウケのま、囃子(六郎兵衛・富司忠・総一郎)の残り留地(慶次郎・邦久ら)の好調と相俟ち余情溢れる好舞台だった。(1時間31分)

「鬼の継子」刑部三郎の子連れの寡婦・後裕、里帰り途次、鬼・祐一に遇い一問着の後、鬼の妻になることに合意。身繕いの間、子を鬼に預ければ、あやし、嫌し、看めるうち情が移る鬼。情が移れば舐めたい程に可愛い、拳句は舌舐りする程喰いたいが本性。子をとり戻した寡婦は「腹立ちや」と追い込み、許せ、「と鬼は逃げる。母性の強さと初々しい女ぶりを見せるアド俊裕、悪鬼羅刹には



鳳の会①「二人袴」左より鹿島俊裕、佐藤友彦、大野弘之、②「右流左止」左より佐藤友彦、井上祐一、



「腰折」左より今枝靖雄、井上祐一、井上靖浩



「髭槽」前場、自慢の大髯で祭祀の大役を得た無邪気に喜ぶ男・千五郎、その礼装が自弁と聞き家計預かる妻・七五三は穏やかでない。理想と現実の相剋、夫婦諍いの根元はむさ苦しい大髯とばかり悪態吐いて刺れと迫る妻に、激怒の男は妻を殴打する。舌鋒鋭く渡り合う両者の、息の合った攻防は兄弟コンビならこそ。後場、不穏な空気を伝える仲裁人・正雄の助力が居る。

「二人袴」シテ舞・俊裕、親・友彦、袴は親の長袴を二つに裂いて共用、誤魔化すが、親が土烏帽子をつけられないのがしっくりこない(初めから訪問する気はなかった、は理屈だが)。孟事の後、男・弘之に所望され、後ろを気にしつつ最後に舞う三人連舞(写真の「貝尽し」にも祝言らしい晴朗な気分が余り感じられなかった。(48分)

「右流左止」風雅の道を好くシテ塩飽ノ藤造・友彦、塩飽は讃岐瀬戸内の島一家督を伴に譲り気儘な旅は景勝の明石浦でアド茶屋女・祐一に遇い、若い身空で老母を養うと聞き要らぬ御節介、結婚を勧め。執拗な口説きに「煩やのく」と女が拒めば、「うるささ」と云ふ言葉、聊爾には云はぬもので御座るぞ」と容め、左大臣時平と右大臣道真との故事を語り、この辺り、体裁振ったねちつこさに得意とした語、友彦に持ち味。語の結末は、道真の有る事無し事上奏する時平に「右流左止」の論言、曲解した時平のため

に右大臣は流論の身となったという大事。聞かされて女は、伊勢物語の中の一首を挙げ「うるさし」と反論、「さてくこなたは心ある人とみえた」と、藤造は「何卒歌の道をも教へて下され」と降参する。名残りに神酒で持て成す女は、飲めぬ身に一献を相伴、宴となる。肴の小舞は「宇治の晒」、浜千鳥の友呼ぶ声はちりちりやちりちり、今や屈託なく語り舞う藤造に女も感興尽きなきが最早別れ。「呑うござる」と響応に与った札を述べる藤造、「やうござつた」とねぎらう女、沁々した空気のもの悲しさは、「はあ」とトメル藤造の琴線に触れる。友彦・祐一の入念な役造りで、当地の記録に残る明治十二年(一八九九)以来の上演の稀曲が立派に甦る。なお、シテの出立は襟紐・敷石文・鬘斗目着付・括袴・浅黄羽織・燕尾頭巾(後ろにつける・写真)。

「髭槽」前場、自慢の大髯で祭祀の大役を得た無邪気に喜ぶ男・千五郎、その礼装が自弁と聞き家計預かる妻・七五三は穏やかでない。理想と現実の相剋、夫婦諍いの根元はむさ苦しい大髯とばかり悪態吐いて刺れと迫る妻に、激怒の男は妻を殴打する。舌鋒鋭く渡り合う両者の、息の合った攻防は兄弟コンビならこそ。後場、不穏な空気を伝える仲裁人・正雄の助力が居る。

「角仙人」金剛流では極く珍しいもの、前宗家蔵も二十二歳で一度勤めただけである。通力を争い、雨を支配する龍神(子方・重本昌之・山口等悟)を窟に幽閉する一角仙人シテ通成。早魃に苦しむ帝は旋陀夫人ツレ道一(小面・天冠・襟赤・小葵文白地唐織重折)の色香で籠絡せんと官人ワキ勝久を同道させて仙界へ差し向ける。脇座、葛蔓付萩葉屋にシテ、大小前、一畳台上窟の内に子が居る。

「腰折」総じて物事は自然体になすのが第一。腰の曲った祖父シテ祐一、孫の山伏・靖浩の祈祷で腰を伸ばしたはいが硬直状態、自由が利かないシテの具合の悪さは身を振らんばかり、然もありませんと思わせる。泡も食わず、太郎冠者・靖雄に杖で突っ支い棒をさせ、更に祈祷する山伏の厚顔は、及ばざるが如し、肉體改造の加持祈祷は現代病たる美容整形治療の警鐘ともなる。(28分・4月24日・第36回鳳の会)

「二人袴」左より鹿島俊裕、佐藤友彦、大野弘之、②「右流左止」左より佐藤友彦、井上祐一、

「張良」馬上の老翁が落す香、履かせよの無体に素直に忠告して兵法の奥義授けられることとなる夢の経緯、名宣から道行へ述べる確りと爽やかな口跡のワキ張良・和幸の凛々しい美丈夫ぶりが惹きつける。老翁に賛すシテ黄石公は勝一(代勤順之、約束に遅参のワキを厳しく叱責、次は「遅れ給ふな、と一ノ松から左手をワキへ指すと拍子一ツ強く踏んで走り込む、痲性に気位の高さをみせれば、シテの真意を悟り、「勇みをなして、きりきりと小廻りに早鼓中入のワキは毅然とした態度に風格をみせる。

「二人袴」シテ舞・俊裕、親・友彦、袴は親の長袴を二つに裂いて共用、誤魔化すが、親が土烏帽子をつけられないのがしっくりこない(初めから訪問する気はなかった、は理屈だが)。孟事の後、男・弘之に所望され、後ろを気にしつつ最後に舞う三人連舞(写真の「貝尽し」にも祝言らしい晴朗な気分が余り感じられなかった。(48分)

「髭槽」前場、自慢の大髯で祭祀の大役を得た無邪気に喜ぶ男・千五郎、その礼装が自弁と聞き家計預かる妻・七五三は穏やかでない。理想と現実の相剋、夫婦諍いの根元はむさ苦しい大髯とばかり悪態吐いて刺れと迫る妻に、激怒の男は妻を殴打する。舌鋒鋭く渡り合う両者の、息の合った攻防は兄弟コンビならこそ。後場、不穏な空気を伝える仲裁人・正雄の助力が居る。

「角仙人」金剛流では極く珍しいもの、前宗家蔵も二十二歳で一度勤めただけである。通力を争い、雨を支配する龍神(子方・重本昌之・山口等悟)を窟に幽閉する一角仙人シテ通成。早魃に苦しむ帝は旋陀夫人ツレ道一(小面・天冠・襟赤・小葵文白地唐織重折)の色香で籠絡せんと官人ワキ勝久を同道させて仙界へ差し向ける。脇座、葛蔓付萩葉屋にシテ、大小前、一畳台上窟の内に子が居る。

「腰折」総じて物事は自然体になすのが第一。腰の曲った祖父シテ祐一、孫の山伏・靖浩の祈祷で腰を伸ばしたはいが硬直状態、自由が利かないシテの具合の悪さは身を振らんばかり、然もありませんと思わせる。泡も食わず、太郎冠者・靖雄に杖で突っ支い棒をさせ、更に祈祷する山伏の厚顔は、及ばざるが如し、肉體改造の加持祈祷は現代病たる美容整形治療の警鐘ともなる。(28分・4月24日・第36回鳳の会)

NHK放送予定(平成16年7月~8月)

●NHK-FM能楽鑑賞(毎週日曜日午前7時15分~8時)
7月25日「忠度」(再)(宝生流) 今井泰男ほか
8月1日(親世流)名曲を聞く「関寺小町」①
シテ梅若万三郎
8月8日「関寺小町」②
シテ梅若万三郎
8月15日(大蔵流)故人を偲んで ~大蔵彌右衛門~
「三本の柱」ほか ゲスト:山崎有一郎
8月22日(親世流)故人を偲んで ~橋岡久馬~
「東国下」ゲスト:山崎有一郎
8月29日(和泉流)「通円」「鏡扇」 野村又三郎ほか
●NHK教育テレビ・能楽狂言番組
8月22日「第31回NHK古典芸能鑑賞会」午後9時~
狂言「延命袋」 茂山千作ほか

能 楽 の 友

発行能楽の友社

名古屋市千種区千種2丁目18-18
(郵便番号 464-0858)
電話 (052) 731-7 9 8 4
F A X (052) 733-2 8 3 7
振替口座 00800-6-36393
購読料 1年 1 1 0 0 円
郵送の場合 1年 1 8 0 0 円
一 部 1 0 0 円

名古屋城 薪能
7月30日から14日間

「真夏の夜のファンタジー」夜・遊・美空間への誘いをよびかける「名古屋城まつり」は、名古屋城夏まつり実行委員会(名古屋市長、名古屋市商工会議所、中日新聞社、東海ラジオ放送、東海テレビ放送、名古屋タイムズ社、名古屋城振興協会)連携協力・2005年日本国際博覧会協会により、天守閣の夜間公開、火縄銃の実演、水の彫刻、多彩なキャラクターショーなどが公演されるが、この企画に当初から協賛催している「薪能」は、7月30日(金)から8月12日(木)まで連夜14日間(土・日・祭日を除く)にわたって、城内の特設舞台で催される。
企画 能と狂言に親しむ会(梅田邦久、藤田六郎兵衛)協力/能楽協会名古屋支部
上演曲目・演者は次のとおり

第21回天王薪能
8月29日津島市文化会館
入場料当日券5000円(前売り4000円)。問い合わせ:チケットの申込みは津島市観光協会(TEL0567-228-8051)

▽7月30日(金)能「鉄輪」(シテ清沢一政ほか)
▽7月31日(土)狂言「萩大名」(松田高義ほか)狂言「長光」(佐藤融ほか)
▽8月1日(日)能「杜若」(シテ三村恵子ほか)

第21回天王薪能
8月29日津島市文化会館
入場料当日券5000円(前売り4000円)。問い合わせ:チケットの申込みは津島市観光協会(TEL0567-228-8051)

子ども狂言教室開催
名古屋市内4会場
名古屋市内、名古屋文化振興事業団、狂言共同社では、平成16年度名古屋市内子どもための巡回劇場として「狂言であそぼ!」のタイトルで、「子ども狂言教室」を名古屋市内4会場で開催する。日程およびスケジュールは次のとおり。

演能案内
第26回七彩会大会
七月三十一日(土)午前九時半始
名古屋能楽堂

暑中御見舞
申し上げます
観世清和
幽謳会
片山九郎右衛門
清司

鳳鳴会
武田志房
幽花会
片山慶次郎
片山伸吾

紅葉狩
飯富雅介
河村真之介
加藤洋輝
小島久恵
北原弘子
井口敏恵

梅猶会
梅若吉之丞
梅猶会
大槻清韻会
大槻文蔵

井上嘉介
井上裕久
壺泉会
泉嘉夫

演能カレンダー

名古屋能楽堂
(TEL 052-231-0088)
(7月) 七彩会(番組①面)(無料)
(8月) 7日(土) 能楽後継者育成研修発表会(無料)
8日(日) 青陽会定式能(番組②面)(有料)
21日(土) 長田驥師職分45周年祝賀能の会(無料)
23日(月) 名古屋学生能楽連盟8月例会(無料)
28日(土) 第12回全電力親善謡曲大会(無料)
29日(日) 衣斐正宜後援会能(有料)

熱田神宮能楽殿

(TEL 052-671-0852 文化殿)
8月7日(土) 名古屋薪能(神楽殿前)(番組②面)

玉葛
前野美津子
石黒行蔵
久保一芳
津田節哉

名古屋観衛会
山本勝一
名古屋正花会
山本博通

財団法人 鎌倉能舞台
中森貫太
中森晶三

復曲能「赤目瀧」

8月29日 金剛能楽堂

金剛流・菊之会（廣田泰三師主宰）は、8月29日（日）京都・金剛能楽堂で復曲能「赤目瀧」を上演する。

この能「赤目瀧」は、文久初年（一八六二）名張儒者鎌田梁州（紀行文「観瀑図誌」の作者）が作曲し、名張藤堂家に招聘されていた野村三次郎翁（現金剛宗家の祖）が節附を施し、能楽として完成した。名張金剛会85周年を機に地域伝統芸能を保存し、地元文化発信の一助にと完全復曲（演能）を目ざして新たに謡本を復曲することになった。

赤目瀧は、古くは「阿弥陀が瀧」ともいわれ、修験場と

して開かれた。役の行者が修行のため瀧に打たれていると、不動明王が赤い目の牛に乗って示現し、そのため赤目不動を安置して、延寿院を開基したと伝えられるところから、この曲を作ったとされる。

復曲能「赤目瀧」

とき 8月29日（日）午後2時開演（午後1時開場）

会場 金剛能楽堂（京都・上京区烏丸通一条下ル、TEL 075・441・7222）

主宰 菊之会、監修 広田泰三

後援 名張市・名張市教育委員会

協力 名張商工会議所、名張文化協会、名張市観阿弥顕彰会

狂言分野で初の受賞

野村小三郎氏芸術創造賞



名古屋文化振興事業団では、「第20回芸術創造賞」として和泉流狂言方・野村小三郎氏の受賞を決定し、6月23日午後3時から名古屋市栄三の名古屋市文化振興事業団で授賞式が行われた。（一部前号既報）

芸術創造賞は昭和60年に名古屋市の芸術文化の向上と発展に寄与した者に贈られる年度賞で、狂言としては初めての受賞である。

「芸術創造賞をうける野村小三郎氏」

戦後名古屋能楽史

〔第十三章〕

竹尾 邦太郎

昭和三十四年（一九五九）

（承前）

七月二十九日、三世茂山忠三郎良一が逝去、享年六十四歳、初来名は昭和九年九月二十一日、市公会堂での朝日新

聞社・名古屋能楽会共催能で当時三十八歳。「棒縛」のアド（シテは茂山久治のちに弥五郎）と能「三井寺」のアイ（シテは初世金剛藏を勤め

彰会、名張能楽振興会

入場料（全自由席）七〇〇円、学生券五〇〇〇円

菊之会事務局 京都市左京区下鴨宮崎町128 TEL FAX 075・781・3421、または075・213・1727

仕舞と講演会開催

8月8日 世阿彌田原本町で

奈良県磯城郡の田原本町味間の補蔵寺は、能楽の大成者世阿彌の菩提寺であり、この境内に「世阿彌参学の地」碑が建立されて20年を迎えた。これを記念して、観世流山本勝一師ら一門による仕舞の奉納と法政大学名誉教授表章氏の講演会が、8月8日、田原本町の味間公民館で開催される。（世阿彌碑期成会地区世話人・奥田順一、木村均両氏）

入場料は無料、資料は一部200円で頒布。駐車場は2カ所設営。問い合わせは世話人奥田方（TEL 0744・332050）立地は近鉄八木駅よりタクシーで10分程度。

新作能を考える

第9回法政大学能楽セミナー

法政大学能楽研究所では「2004年・第9回法政大学能楽セミナー」を次の日程で開催。テーマは「新作能を考える」で、21世紀に生きる新作能について考察する。会場／法政大学市ヶ谷キャンパス（東京都千代田区富士見町2）

〔講座〕

7月16日（金）「新作能百年の流れ」法政大学能楽研究所 長・西野春雄氏

7月21日（水）「宮沢賢治の詩と能」シテ方観世流青木道喜氏

7月23日（金）「（キャリア）リヴァー」を演出して、シテ方金春流桜間金記氏

7月28日（水）「新作能・古典と現代」詩人・馬場あき子氏

7月30日（金）「能と現代」現代能（始皇帝）を中心に、演出家・岡本章氏。

青陽会定式能

八月八日（日）十時半開演

名古屋能楽堂

能組

仕舞 雨之段 前野 郁子 地謡 三村 恵子 生駒 里翠 近藤 幸江 久田三津子

シテ（天女）山本順之 解説 山本章弘 着付け 山本博通、松浦信夫、林本大、山下麻乃

仕舞 小 督 黒田 博 須部 勘助 梅田 邦久 地謡 久田 勘助 祖父江修一 梅田 嘉宏

芭蕉 黒田 博 須部 勘助 梅田 邦久 地謡 久田 勘助 祖父江修一 梅田 嘉宏

枕之段 祖父江修一 梅田 嘉宏

高橋 敏彦 河村 幸親 河村真之介 福井啓次郎 加藤 洋輝

後見 久田三津子 地謡 今沢 美和 八神 孝充 近藤 幸江 須部 勘助 梅田 邦久 祖父江修一 須部 勘助 梅田 嘉宏

狂言 薩摩守 今枝 郁雄 佐藤 友彦 井上 靖浩 後見 井上 祐一

能 久田勘吉郎 梅田 嘉宏 相元 正樹 寛 敏一 鬼頭 義命 柳原富司忠 竹市 学

後見 今沢 美和 地謡 星野 路子 高橋 瞭一 須部 勘助 梅田 邦久 祖父江修一 須部 勘助 梅田 嘉宏

附 祝言 主催 青陽会

当日券 三千円

お問合せ 名古屋市中区一社三の一六二 久田 勘助 鳴方

電話 〇五二一七〇五―一五八四

平成十六年 第四十八期予定

暑中御見舞 申し上げます

宝生 英照

近藤 乾之助

佐野 由 於

金剛 永 謹

廣田 鑑賞会

廣田 田 陸 一

廣田 田 幸 稔

廣田 田 泰 三

廣田 田 泰 三

廣田 田 泰 三

廣田 田 泰 三

廣田 田 泰 三

廣田 田 泰 三

金 春 信 高

金 春 安 明

本 田 光 洋

春 敲 会 名古屋春栄会

廣 瀨 瑞 穂 高

廣 瀨 雅 弘

福 王 茂 十 郎

高 安 勝 久

宝 生 欣 閑

宝 生 欣 閑

宝 生 欣 閑

宝 生 欣 閑

植田和光会

植田隆之亮

豊嶋能の会 豊嶋三千春

◆初夏の舞台から◆

「九阜会」第四七回やるまい会「名古屋能楽堂定例公演」第一回「縁の会」

竹尾邦太郎



九阜会(左)「俊寛」
駒瀬直也(右)「薩摩守」
右より松田高義、野村小三郎、
①「船弁慶」②「観世喜正」③「古川允世喜正」④「古川允世喜正」(杉浦賢次氏撮影)

「俊寛」シテ直也。スミで、落つる木の葉を扇に受け、飲む酒は、谷川の水と膝をついて面使に流れを追うと、事の起り、水上は我なるものを、と面伏せ、物思ふ(時しもは)、と立ち正中へ、杉木桶を起き、今こそ限りなりける自得、の諦感。狷介の人、俊寛に萌す弱気、情状酌むべきところを、入念にみせる。赦免状の段は、「さては筆者の誤りか」とワキ雅介を詰問のところ(写真、猛る心を抑えかねる様も切ない。(1時間2分))

は抜け、舞クセは長身しなやかに色気。中ノ舞(か)はスミから義経ツレ充を見込み二ノ松へ、其処で再度義経を遙かに見込むと膝をつき暫しシオル哀しさ。中入は、見る目も哀れなりけり、で凝然と立ちつくす姿、別れの寂しみの心が迫る。

後場は「早装束」の小書でアイ小三郎のあつと言つ間の変装、ほくそ頭巾・布羽織に三尺帯を締め船頭の立は、船を出すのも颯爽と敏活だが、嵐の襲来に覚悟促すワキにワキツレの不吉言の船中の場、アイが高にかかつてワキツレを咎めるところが抜かされ、緊迫感のあるアイの活躍の場が欠けたのは残念。後シテは、波に浮かみて、と半幕に床几の姿を見せ、(思ひも寄らぬ浦波の、と一旦幕を下ろし、早笛で走り出る。働きは流し足に船に近寄り威圧するところなど大いに冴える。義経役が珍しく子方無いのので、丁々発止の一騎打(写真)も力強く精彩。キリは二ノ松に、遠ざかれ、頭を取って義経を見込み、位進み再び船に慕い寄るが、また引く汐に、三鼓の流しで地を渡し幕に入る。残り留には知盛の怨念もおも尾を引くかの趣。前後を通じ、弁慶の細心に剛胆の性情をワキ勝久、重厚にみせる。(1時間15分・5月15日・九阜会)

「伊文字」妻乞いの主・隆行、太郎冠者・高義を伴い清水観音に参籠、西門に立つ女を妻にの霊夢授かり太郎冠者を遣るが、現れた女・健太郎は一首を残し消える。「恋しくは尋ねて来ませ伊」までしか覚えていない太郎冠者、主の落胆ぶりに往來の人を歌の関所と称して止め、下の句を何としても付けさせようとする。引つ掛かったのは通行ノ者シテ小三郎、二人の強引さに観念する辺りの割々な表情に好調ぶりが知れる。節に掛かれば思い出せるだろうか、の自然発生的な思惑は、賑やかに調子をとり囃す三人が乗って来る太平楽の呑気が可笑しく、無事に伊勢国伊勢寺本を思い出したシテに「とつとつ、イヤ」と三人片膝つくガッン留も目出度い。(26分)

「船渡鯉」和泉流は大髭の船頭と男は同一人。船客の酒をせび



「花子」野村万作、野村三郎、野村左三郎、野村丸石、左から船渡鯉、童子、丸石(杉浦賢次氏撮影)

り、家に戻れば先の船客が鯉と知れ狼狽、細君に大髭剃り落され対面するもバテて面目失墜、の展開。大蔵流は船頭と男は別人。酒をせびる船頭・千之丞の調子に乗せられ、「私もちと羨ましくなりました」と船客の鯉・童司も同調、和やかな遣り取り(写真)から飲めや酔えの騒ぎとなる処、いかにもおどか。酔いの勢いは、直ぐ開けることもあるまい、と空樽持参の鯉入りに、男・あきらが案に相違してお持たせを開けよ、と太郎冠者・やすしに下命。鯉の酔いも一挙に覚めようかという童司の狼狽ぶりも初々しく、気心知れた千之丞三代に巨る賑やかな舞台。(32分)

「花子」シテ何某・又三郎、当地やるまい会三度目の上演。前回は平成三年の古希祝賀記念でアド妻・万之丞、小アド太郎冠者・万作。今回は妻・万作、太郎冠者・万之介。花子との密会の口実に苦慮する何某だが何事も思惑通りに運ばないのが世の常。廻国修行には十二・三年と大きく出るが、妻の顔色窺えば「いや、また仕様で二・三年」と小切るのも哀しさ。「他所へと言ふては一日もなりませぬ」と断ずる猛妻に平身低頭、やつと一夜の暇を得ても自邸内の持仏堂では猛妻の目を盗むのにも一工夫、太郎冠者を脅して身替りに勇躍赴く花子の方、欣喜雀躍ぶりが又三郎いかにも若々しい。妻と身替りに立った太郎冠者と

の応答も亦ベテランの味。「身が燃えて腹が立つわい」と又三郎の妻、「御尤も御座る」と神妙な太郎冠者、代つて座禅を着た妻は、「袋やら巾着を縫うてやらう」と太郎冠者を搞うが、焼餅に取り乱した小つ恥ずかしさを糊塗する心もあつたらう。

「三山」大和三山の耳成・畝傍・香具山を二女一男に見立てる三角関係の図。若い桜子ツレ庄太郎へ傾く男の気持ちに懊惱する年増の桂子シテ正宜、居クセの中、時は春ながら花無き己れを悟れば、男が「秋(飽き)にならんも理や、と良忍上人ワキ雅介に訴えるかの風情がよく、面泣(か)の憂愁。後シテは面を女増髪に替へ、狂おしいカケリ、ツレと向き合い「打ち散らし打ち散らし」と桂と桜の持枝で打ち合うキリ、胸の端立ち上る憤りを鮮烈にみせるが、因果の報ひはこれまでもなり、と持枝を捨て、ユウケン扇で和解に至る(写真)のは少々逸かされた気分無きにしても、ツレは一ノ松で合掌、シテは常座で拍手踏むトメ。(1時間2分・5月21日・名古屋能楽堂定例公演)

「蝸牛」シテ萬・アド扇丞・小アド与十郎。当初、番組はアド与十郎・小アド万之丞、揭示には代勤とだけあったが、万之丞は半月も経たぬ裡に病魔に冒され死去、病を知る萬一家の胸中如何ばかりであつたらう。しかし大方は事を

「六地藏」先ず容れ物を造り、後から中味を調達するの構図は、予算費消のお役所仕事に似ようか。村の代表たる田舎人・靖浩、地藏堂建立成つて中に納める六地藏の購入に都へ出張、架空業者のスッパ枯一の宣伝に乗せられ、あやや騙されそうになるところなど如何にも今日的。六地藏の印相から持ち物まで、詳しく調べてあつたからの危地脱出に靖浩の愚直ぶ

知らぬ見所は、現実を離れた虚構の舞台空間に、皮肉にも狂言の中で最も浮きに浮いた「蝸牛」を築きむのである。舞台はめりはりの利いた科白の応酬も小気味よく、山伏・萬に「却量を経た、なあ」と見詰められれば、主・扇丞の諫止も上の空に囃子物に乗ってゆく太郎冠者・与十郎の呼吸の素晴らしさ。散々巫山戯ちらして追い込まれる山伏の、大いなる遊び心も絶好調。舞台が命の役者の宿命と言え強靱な役者魂、演者に敬意を表すると共に、謹んで好漢万之丞さんの御冥福をお祈りする。(23分)

「卒都婆小町」シテ泰男、面は氣骨稜々を思わせる白哲の老女、襟白二・白摺着付・網代二藤袴文無紅緒袴巻・萌黄(裾へ暈)水衣・杖・男笠。「余りに苦しう程に、これなる朽木に」と見廻す心に左ウケ、「腰を掛けて休まばや」と思ひ候」と杖を持つ右手で笠を脱ぐと大小前へ、後見の持つて出る床几に掛かる。ワキ閑・ワキツレ謙吉との卒都婆問答に、非常識を衝く相手を諄々と反論して品ぶる気配も見せない老女の、自信は演ずる泰男にも、「逆縁なりと浮かむべし」とワキにアシラヒ直視、断定するシテに、思わず退き「非人なりとて、とワキは下居し、僧は頭を地につけて、と平伏すれば、既に地前下居のワキツレは此の成り行きを見守るばかりである。

素性明かした後は、憐れみを受ける老小町の乞食脚の様。「百歳に、と安座から居立ち、一歳足らぬ九十九歳、と左手に笠、右手に杖を持つと、へか、る思ひ

は、と立って一・二歩出、ワキへアシラヒ「影恥かしき我が身、を笠で面を隠し、背を向け常座へ行く処、羞恥に残んの色香を見せるも、日々の行状に及んでは物乞いの狂乱。へ声変り怪しからず、と杖手放すや、なう物賜べなう、と笠を差し出しワキに迫る辺りの鬼氣は、四位少将ノ靈が憑くと、黙し難い小町への執心と変る。物着に黒風折扇帽子をつけ、水衣を茶地芙蓉下扇面三牡丹文長絹に替へると少将に成り切つた姿。知らせの拍子一ツ踏むと、地(泉・草ら)は再び、閑守はありとも留るまじや出で立たん、とシテの氣勢を述べ、シテは「浄衣の袴かいつとて、と拍子二ツ、右ウケ更に二ツ踏み、直つてイロエになる。脇止先、暫時佇立からスミへ、左へ廻り大小前で直ると左右し、シテは再び「浄衣の袴かいつとて、と語い、地がこれを返す裡に前へ。百夜通いの姿を心象に情景重ね合わせ入念にみせる。袖被キへ人目忍ぶの通路、扇に面を隠す姿など深い味わい。キリは憑き添う少将の怨念も落ち悟道。「花を仏に手向けつつ、ツマミ扇差し出し、へ惜りの道に、と右へ廻りながら扇を右手に替えて小回りに直り常座へ入らうよ、と合掌留は諦念の静けさだった。囃子は五大郎・清次郎・崇志、後見は淳雄・泰行。

なお、老女物の大事は当然装束にも及び、襷色の進んだ年代物の深みのある渋いものが好まれるが、この度の装束は、外に現われる縫箔腰巻・水衣・長絹、何れも山口憲・佐藤芳彦記念山口能装束研究所所長が復原した新作。染色技術で可能な、徒らに古色をつけたイミテーションで無いところが山口の本領だが、使用する今井泰男と提供する山口憲の信頼関係が無ければ実現し得なかつたことだろう。新作を着こなす今井の器量、己れの作品が本物であること、の山口の自負、美しい芸術の世界である。(1時間38分・5月29日・第一回縁の会・宝生能楽堂)



定例公演「三山」左から衣斐正宜、和久莊太郎

NHK放送予定(平成16年8月~9月)

Table with NHK-FM能楽鑑賞 and NHK教育テレビ・能狂言番組 columns, listing dates and program titles.

能 楽 の 友

発行能楽の友社

名古屋千種区千種2丁目18-18 (郵便番号 464-0858) 電話 (052) 731-7984 FAX (052) 733-2837 振替口座 00800-6-36393

初 秋 能

2部制で開催

9月5日 名古屋能楽堂

伝統芸能の「能楽」が平成十三年五月、ユネスコにより世界無形遺産に認定され、能楽協会名古屋支部が主催する「初秋能」の公演にこのタイ...

能楽での重要無形文化財の保持団体である社団法人日本能楽会の新会員として、能楽協会名古屋支部関係の能楽師七氏が認定され、八月十日国立能楽堂で認定授与式が挙行された。

日本能楽会新会員 重要無形文化財 7氏を認定

能楽協会名古屋支部関係

能楽での重要無形文化財の保持団体である社団法人日本能楽会の新会員となるのは次の七氏である。

能「道成寺」公演

10月2日 能楽「鏡座」

名古屋と京都をそれぞれ中心に活動している若手能楽師のグループ「能楽・鏡座」は、第八回「鏡座」公演として、今秋十月二日、名古屋能楽堂で、能「道成寺」を公演する。

演能案内

長田 驍師職分45周年祝賀 喜多流舞之会

八月二十一日(土)十時始 名古屋能楽堂

Table listing performance details for the 45th anniversary of Chigata Ryosai, including acts like 'Kitsune' and 'Kaminari'.

暑中御見舞 申し上げます

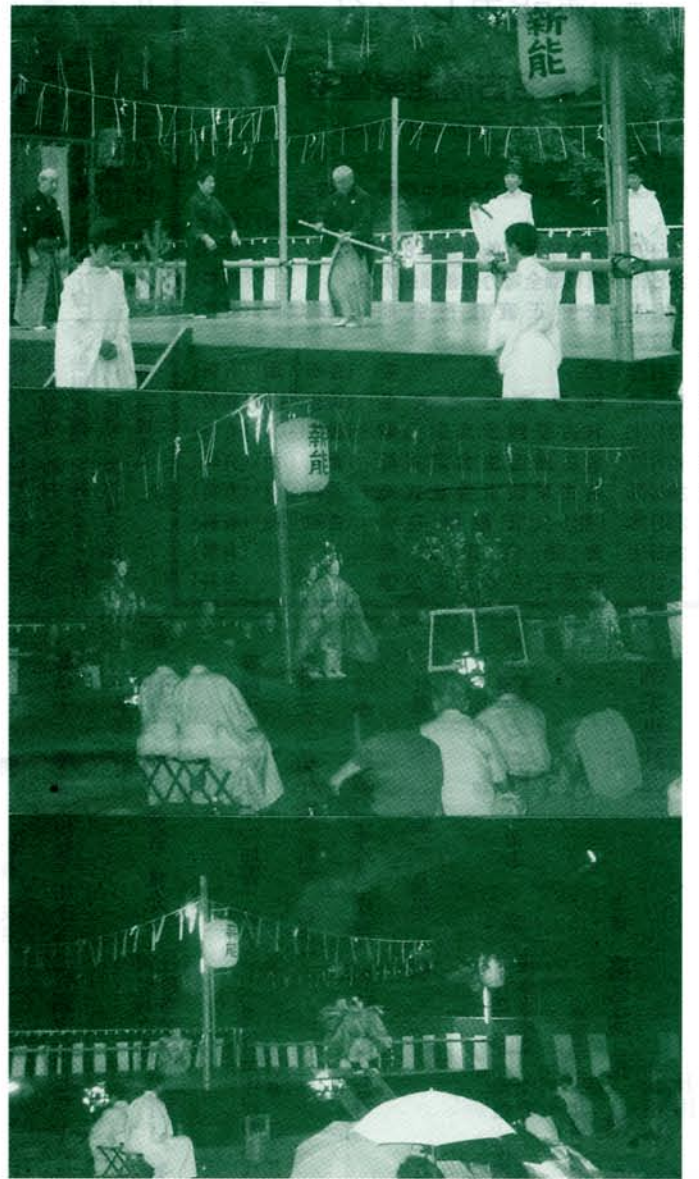
Table listing various associations and their members, such as 'Koban' and 'Koban'.

Table listing more associations and members, including 'Koban' and 'Koban'.

第39回 名古屋薪能

演能 半ばで 豪雨のため中止

第39回名古屋薪能は八月七日(土)午後五時四十五分から熱田神宮神楽殿前の特設舞台で催された。
当日は、連日三十度を越す猛暑つづきのなかで、不安定な気象状態が心配されたが、番組とおり、喜多流、観世流、金春流の仕舞につづき、金剛流舞囃子の上演、熱田神宮宮田理博弥宜により、能楽協会名古屋支部福井啓次郎支部長、井上祐一、久田勘助両副支部長らによってかがりに点火された。
能は、観世流・天人揃による吉野天人の上演について、和泉流狂言「彌宜山伏」の終演間際に沛然とした驟雨で見所はいつせいに避難したが雨が上がる気配はなく、そのまま演能は午後七時四十分中止となった。
写真 ①火入式、②「吉野天人」、③狂言「彌宜山伏」



演能案内

第20回 衣斐正宜後援会能

八月二十九日(日)午後一時始
名古屋 能楽堂

講 演 「能と『生命』について」 作家 林 望

能 楊貴妃 寺井 良雄 工藤 和哉 河村総一郎 大野 誠 福井啓次郎

後見 武田 孝史 地謡 竹内 高成 佐野 登 東川 光夫 村上 茂 近藤乾之助 柴田 賢治 水上 輝和 優

狂言 雷 井上 祐一 後見 鹿島 俊裕

仕舞 三 山 近藤乾之助 地唄 武田 孝史 水上 輝和 優

能 望 月 和久 莊太郎 飯富 雅介 河村真之介 助川 治 衣斐 正宜 佐野 幹 後藤嘉津幸 藤田六郎兵衛

後見 宝生 英照 地謡 竹内 淳一 武田 孝史 内野 飛能 浦野 正二 亀井 保雄 佐藤 友彦 久野 幸三 東川 光夫 輝和 優

附祝言

〔午後五時終了予定〕
後援会申込み・問合わせ
衣斐正宜後援会事務所
名古屋市中区和御器所
3-23-19-802
TEL・FAX 052-882-5600

ユネスコ第一回世界無形遺産認定「能楽」

初秋 能

第一部 午前十時三十分始
第二部 午後二時始
名古屋 能楽堂

〔第一部〕(午前十時三十分始)

能 清 経 三村 恵子 近藤 幸江 高安 勝久 河村総一郎 藤田六郎兵衛 後見 今沢 美和 地謡 星野 路子 加賀 敏彦 武田 邦弘 松山 幸親 清沢 一政 本田 勲 梅田 嘉宏

和泉流 雁大名 野村又三郎 松田 高義 後見 伴野 俊彦

観世流 井 筒 古橋 正邦 梅田 嘉宏 地謡 外山 圭一 梅田 邦久 高橋 瞭一

観世流 昭 君 梅田 嘉宏 地謡 高橋 瞭一

附祝言

〔午後二時始〕
観世流 泉 若 嘉夫 杉江 元 河村真之介 加藤 洋輝 能 杜 若 恋之舞 福井啓次郎 竹市 学 後見 梅田 邦久 地謡 八神 孝充 高橋 瞭一 須部 甫 祖父江修一

〔第二部〕(午後二時始)
金春流 水 空 伊藤 雄二 地謡 鈴木 雅弘 佐久間祥夫 尚久 松井 俊介 長田 郷 鬼頭 尚久

喜多流 鬼界島 橋本 幸 寛 敏一 鹿取 希世 後見 大島 衣恵 地謡 小出 甚吉 和谷 衡市 平塚 昭子 伊藤 英毅 高林 彬 森田 克彦 松井 孝二

和泉流 空 腕 佐藤 融 今枝 靖雄 後見 井上 靖浩

能 船弁慶 坂口 貴仁 飯富 雅介 河村真之介 加藤 洋輝 相元 正樹 後藤孝一郎 竹市 学 鹿島 俊裕 外山 道夫 佐藤 耕司 柴田 勲 水上 輝和 久野 幸三 水川 寿一 優

宝生流 能 船弁慶 坂口 貴仁 飯富 雅介 河村真之介 加藤 洋輝 相元 正樹 後藤孝一郎 竹市 学 鹿島 俊裕 外山 道夫 佐藤 耕司 柴田 勲 水上 輝和 久野 幸三 水川 寿一 優

後見 竹内 澄子 地謡 久野 幸三 水川 寿一 優

後見 玉井 博祐 地謡 久野 幸三 水川 寿一 優

附祝言 (午後五時三十分終了予定)

暑中御見舞 申し上げます

梅春会 井戸 良祐 男

山本章弘 千560-0021 豊中市本町6-10-6 電話〇六六八四六三三六九

名古屋淡交会 橋岡 慈観 三交会 久田 三津子 千465-0883 名古屋市名東区一社3-162 電話〇五二七〇五一一五八五

初陽会 武田 宗和 稽古場 名古屋千種区今池四丁目15-3 浅井ビル 電話〇五二七三三三三三六

上田観正会能楽堂 上田 観正会 TEL〇七八一 社団法人 観正会 TEL〇七八一 六九一―五五四九

武田 宗和 武田 欣司 武田 邦弘

武田 宗和 武田 欣司 武田 邦弘

武田 宗和 武田 欣司 武田 邦弘

武田 宗和 武田 欣司 武田 邦弘

武田 宗和 武田 欣司 武田 邦弘

武田 宗和 武田 欣司 武田 邦弘

笙月会 中川 雅章 千526-0888 長浜市地福寺町八ノ二九 電話〇五九〇六三〇番

名古屋橋岡会 名古屋市昭和区丸屋町五ノ三五 山田紀子方

賀水会 桑名賀水会 名鉄百貨店友の会 加賀 敏彦 千493-0883 名古屋守山区森孝二丁目七〇九 電話〇五二七七一一八九四五番

松盛会 小松 勝憲 松舞台 千511-0881 三重県桑名市西別所一〇六一の五 TEL・FAX〇五九四二三四五八二

洗心会 奥村 富久子 千606-8833 京都市左京区永観堂西町二〇 電話〇七五七七二〇七六七番

観修会 祖父江 修一 千507-0888 多治見市日ノ出町2の2 電話〇五七二二二二二三三五六六

猶惠会 熊沢 惠美子 千465-0883 名古屋名東区平和ヶ丘3-76 日車マンション四〇四

幸謡会 近藤 幸江 千444-2222 岡崎市鳴田本町十一番地ノ三 電話〇五五六四二〇二五二九

千早会 八神 孝充 千494-0882 名古屋瑞穂区穂波町3-60-1 電話〇五二七六二二二二〇一

恵謡会 三村 恵子 千445-0883 西尾市住吉町三一一二二 電話〇五三三三三七二二五九四番

桜月会 加藤 春枝 千509-0266 可児市早ヶ丘3-113 電話〇五七四六四一三〇六

第3回名駅・薪能

7月25日 観世宗家来演

観世文庫、名駅薪能実行委主催

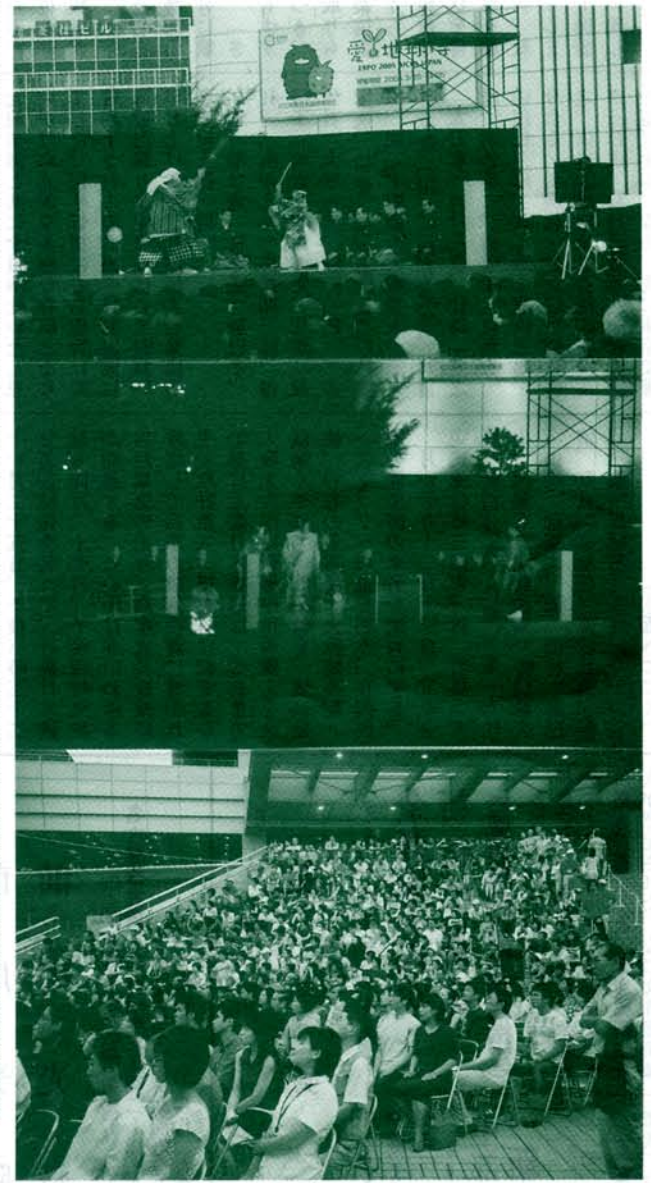
JR名古屋駅タワーズガールズで開催される「名古屋・名駅薪能」は、この第三回を数え今回も観世流・観世清和宗家の来演により、真夏の夜の祭典として話題をよび、定着してきている。

名駅薪能は、主催財団法人観世文庫、名古屋名駅薪能実行委員会、後援は愛知県、名古屋市、市教育委員会、芸術文化協会、新聞・放送関係、連携協力、協賛団体も多く、この薪能を盛り上げている。

とくにJR東海・名古屋支社長は「この伝統芸能を名古屋駅前から発信できることを望んでいる」と力を入れている。

演能は、「橋弁慶(久田勲 鶴)、狂言「呼声」(山本則重 ほか)、舞囃子「葛城」(久田三津子)について能「箱崎」(復曲)「観世清和」の上演で、名古屋駅頭に新しい話題を提供した。

写真①から、能「橋弁慶」「箱崎」とタワーズガールズを埋めた観客



演能案内

和泉流狂言大会

九月十二日(日)午前十時始
名古屋能楽堂

狂言組

三人長者 せせなげ長者 太田 億子 市森長者 石黒 定子
浦生長者 寺西 慶子

柑子 太郎冠者 水間 則子 主人 太田 秀子

盆山 盗人 松岡 利治 何某 井上 靖浩

竹の子 歌主 増山 幸司 畑主 市川 尚美
仲蔵人 松下 尚美

お冷し 太郎冠者 小川 千明 主人 金子 路江

雷 雷 米倉 宏貴 楽師 米倉 愛

雁磔 大名 足立 米子 通行人 安原 美枝
目代 鷺見 政行

清水 太郎冠者 村野 守 主人 井上 祐一

鳴子遣子 茶屋 市川 光子 何某 貝谷世美歌
何某 松井 文子

苞山伏 山伏 三輪 鳥子 山人 長谷川寿美子
歌人 井上 靖浩

小謡 小鶴 銅 矢野 辰義

小舞 岩土 飛車 森 健民
智一

鶏 舞 牧 玉美 太郎冠者 荒川久仁子
何某 高木見枝子

歌 争 男松下 尚美 男 石塚 恵子

二千石 主人 丹辺 文彦 太郎冠者 藤田 茂樹

伊呂波 金法師 井上 弾喜 親 井上 祐一

武悪 武悪 二村 敏勝 主人 石黒 生子
太郎冠者 能登香奈枝

末広かり 果報者 矢田三千代 太郎冠者 小野 豊子
スッパ 矢野 辰義

盆山 盗人 中島 知亮 何某 佐藤 融

長光 スッパ 田澤 義弘 通行人 大沢 芳夫
日代 大野 弘之

伯陽 勾当 吉原 晴美 何某 長船 孝雄
伯陽 石塚 恵子

三人片輪 博奕打 岸田 朋子 博奕打 金子 路江
博奕打 増田 正幸
有徳人 高橋 芳子

入場無料 御来場歓迎 主催 狂言共同社

名古屋観世九阜会能 九月十八日(土)午後一時始
名古屋能楽堂

能組 小 後見 長沼 範夫 鹿島 俊裕 高橋 瞭一
五木田 三郎 地謡 奥川 恒治 中野 喜正
佐久間 二郎 高安 勝久 後藤 孝一郎 竹市 学
トモ 坂 真太郎 小島 英明 中森 貫太
シテ 外山 圭一 鹿島 俊裕 高橋 瞭一

能組 小 後見 長沼 範夫 鹿島 俊裕 高橋 瞭一
五木田 三郎 地謡 奥川 恒治 中野 喜正
佐久間 二郎 高安 勝久 後藤 孝一郎 竹市 学
トモ 坂 真太郎 小島 英明 中森 貫太
シテ 外山 圭一 鹿島 俊裕 高橋 瞭一

狂言 桶の酒 シテ 井上 靖浩 アド 佐藤 融
後見 井上 祐一

仕舞 井 筒 高橋 瞭一 坂 真太郎
須磨源氏 胸瀨 直也 地謡 奥川 恒治
中野 喜正 古川 充

能 一角仙人 飯富 雅介 河村 総一郎 加藤 洋輝
杉江 元 福井啓次郎 大野 誠
龍神 小島 喜正 外山 圭一 高橋 瞭一
シテ 観世 喜之 坂 真太郎 中野 喜正
飯富 雅介 河村 総一郎 加藤 洋輝

附祝言 後見 奥川 恒治 坂 真太郎 中野 喜正
長沼 範夫 地謡 佐久間 二郎 高橋 瞭一
古川 充

全自由席 三枚セツト券 一三五〇〇円
一回券 五〇〇〇円
学生券 二〇〇〇円

主催 名古屋観世九阜会
名古屋事務所
名古屋市中区八剣二丁目1913
名古屋守山区八剣二丁目1913
電話 052-798-9302 外山圭一 方

能楽資料セン ター公開講座 武蔵野大学 都立大学助教授
十一月十八日(日)「三島由紀夫の『近代能楽集』」講師・羽田稔氏(武蔵野大学教授・能楽資料センター長)
時間/午後二時四十分~四時十分
会場/武蔵野大学グリーンホール(西東京市新町1-1-20)聴講無料。
問い合わせ/武蔵野大学能楽資料センター(電話042-4683147)(火・木曜)

武蔵野大学では、平成十六年度能楽資料センター公開講座として「近代の文学者と能」のテーマで六月から四回にわたり開催しているが、後半の十月、十一月の公開講座の日程は次のとおりである。十月七日(日)「泉鏡花と能楽」、講師・鈴木啓子氏(宇

暑中御見舞 申し上げます

名古屋巽会 辰巳 孝

辰巳 満次郎

恵美寿会 衣斐 正宜

衣斐 正宜 後援会

倉本 雅

宝生流 嘉宝会 鬼頭 嘉男

司宝会 佐藤 耕司

松野恭憲能の会 松野 恭憲

松野 洋樹

金剛流 名古屋周星会 岐阜周星会

吉川 周子

金剛流景雲会 能を楽しむ会 宇高通成後援会 宇高通成面乃会 国際能楽研究会 宇高 通成 徳成

宇高 通成 徳成

伊勢金春会 宇仁田 吉邦

長田 驍 後援会

喜多流 和楽会 和谷 衡市

谷田 宗二郎

清水 利宣

〒603 832 京都市北区衣笠街道31-7 電話 075-466-3317 四八七五番

〒569 0817 高槻市桜ヶ丘北町11-25 電話 072-694-5017

演能案内

第四十八期・第三回
名古屋宝生会定式能

九月十九日(日)午後一時始
名古屋能楽堂

- 番組
- 梅若丸 田口 将成
 - 能 組
 - 隅田川 飯富 雅介
 - 後見 石黒 孝
 - 和久 莊太郎
 - 地謡 村 上 茂
 - 石 森 智 幸
 - 外 山 通 夫
 - 大 森 尚 人
 - 後 藤 孝 一 郎
 - 鹿 取 希 世
 - 稲 川 寿 一
 - 馬 塚 富 四 夫
 - 辰 巳 満 次 郎
 - 内 藤 飛 龍
 - 和 久 莊 太 郎
 - 石 黒 耕 司
 - 佐 藤 飛 龍
 - 内 藤 飛 龍

戦後名古屋能楽史 ⑤

〔第十三章〕 竹尾 邦太郎

昭和三十四年 (一九五九)

〔承前〕
前後した伊勢湾台風から六日後の十月一日、総工費約六億円をかけて昭和三十二年六月に着工した名古屋城が戦後十四年半ぶりに復元完成、十月三日から一般公開されるが泥海の市街の惨状を見下ろす金鯱の胸中も亦複雑。同月十五日、この年の文化勲章受章者(第十八回)が内定する。小泉信三(71)、丹羽保次郎(66)、吉田富三(56)、川端龍子(74)、里見淳(71)、古典芸能では文楽の吉田文五郎(89)が文化功労者(第九回)五人の中に選ばれる。

月が改まり十一月八日、観世会第五回は素謡「安達原」増田一雄、仕舞二番「兼平」丹下三義「玉葱」太田重次郎、「景清・松門之山・小返之伝」鳥沢啓次、「鍋八撥」佐藤卯三郎、「三井寺・無休之伝」武田太加志、「一調」龍田小寺俊三・林恩蔵、「紅葉狩・替装束」浅見重信、能三番全て小書付で囃子方に杉市太郎、

〔要員募集〕
当日券 一万円(2枚綴)
学生券 二千元
電話FAX 〇五二一八〇三三七二
〇九〇一七四一六二三四

◆次回予告◆
第四回 十一月二十一日(日)
能 龍 田 衣 斐 愛
能 芦 刈 辰巳満次郎
ほか 狂言・仕舞

融 佐野 高安 勝久 河村真之介 大野 義命
的ノ舞 間 佐藤 友彦 柳原富司忠 鬼頭 義命
後見 倉本 雅 地謡 青木 正文 佐藤 耕司
玉井 博祐 平田 賢治 衣斐 正宜
久野 幸三 辰巳満次郎 和久莊太郎

主催 名古屋宝生会
名古屋市天白区島田二一三〇一
島田橋住宅二一三〇一
佐藤 耕 司 方
電話FAX 〇五二一八〇三三七二
〇九〇一七四一六二三四

曾和博朗・飯島佐六・小寺俊三が来演する。十四日は湧水青陽会第三期第二回、「放下僧」佐藤太俊、独吟「弓之段」林恩蔵、仕舞「松虫」柴田初太郎、能「百万」加藤丈太郎、狂言「宗八」佐藤卯三郎、能「葵上・梓之出」観世武雄。

十一月二十一日は能楽協会名古屋支部が総力を挙げての伊勢湾台風義演。『狂言』紙三十号に歌村彦四郎の次の案内がある。「さて漸くにして被災者の救援もすすみ、復旧にも明るい前途につき、人心もいくらかおちつきを取りもどしたようであります。能楽協会名古屋支部に於ても此の際立ち上り指名楽師は勿論、当地に縁故の深い諸先生の御快諾御奉仕を得て、別記の通りの豪華な番組を編成、伊勢湾台風義演を開き、救援の一助にも致したいと存じます。なにぞ皆様御賛同の上御誘い合され御清鑑の程を御願致します。」

当日は二部制でシテ方五流が揃い、番組には冒頭次の挨拶を載せる。「伊勢湾台風では当地方は誠に未曾有の大災害にて既に皆様も御衆知の事でございます。被災者も夥しい数で、その救援もまだまだ充分に行届いていない現状でございます。吾等能楽人もこの点に少し微力乍ら尽したいと存じ左記の番組で義演を開催いたします。この計画について東西の能楽師も挙げて奉仕を申し出られ、地元能楽師と共に全員奉仕いたし思いがけぬ立派な多彩な番組となりました。何卒皆様にも右趣旨に御賛同下されこの計画の目的達成に御協力賜りますようお願い申し上げます。社団法人能楽協会名古屋支部一同」

第一部は能「枕草子」辰巳孝、狂言「杭かか」佐藤卯三郎、舞囃子「羽衣」本田秀男、仕舞「殺生石」大塚一二、独吟「鶴」二井栄逸、仕舞「玉之段」橋岡久太郎、能「土蜘蛛」大槻秀夫。第二部は能「田村」観世武雄、狂言「太刀奪」河村丘造、仕舞「笠之段」内藤泰二、舞囃子「紅葉狩」山田仁三郎、能「融」思立之出・今合返・名所教「寤之伝」観世喜之。因に入場料は二百円、特別席は三百円。収益の拾万八千五百円を寄託する。なお、先に東京で催

暑中御見舞 申し上げます

西村同門会
飯 富 雅 介
杉 江 元 介
橋 本 正 樹
富 耀 会
柳 原 富 司 忠
小鼓教室
朝日カルチャーセンター
囃子教室
小鼓 後藤孝一郎
丸栄スカイル10階

長生会
鬼 頭 義 命
大蔵狂言会
大蔵 彌 太郎
大蔵 吉 次 郎
狂言やるまい会
野村 又 三 郎
野村 小 三 郎
松 田 高 義
野 口 隆 行
奥 津 健 太 郎

ウシマド写真工房
京都府西陣区区内北野上七軒
TEL 〇七五〇四二一三四一

栄能楽舞台
名古屋市中区栄五六一四
電話(二六二)一八三番

彰 諷 閣
名古屋市天白区植田西二一八〇二二
電話(〇五二)八〇五三三〇一
名古屋市緑区鳴海町有松裏40一9
電話(〇五二)六二一四三三八

前川 光 隆
前川 光 長
名古屋市東区葵二一三三
ツインクルガーデン80前野舞台
電話九三二一八八〇六番

鳳の会
林 和 利
井 上 祐 一
佐 藤 友 彦
狂言 なのり座
井 上 靖 浩
佐 藤 融
野村小三郎

能楽の友社
〔おことわり〕暑中広告の掲載にあたり、まことに勝手ながら七月号、八月号と分載させて頂きましたので何卒ご理解賜りますようお願い致します。併せて発行が遅れましたこととお詫び致します。

葵 心 庵 舞 台
尾張旭市東大道町原田二四九三ノ二
若杉ビル(旭市役所南)
電話 〇五六五〇三三三六番
電話 〇五六二五〇六九八番

金春流5氏が新たに認定
重要無形文化財(総合指定)
中部能面研究会
新作能面展
8月25日(土)29日
名古屋市博物館で
中部能面研究会(代表・磯部峯雲氏)は、きたる八月二十五日(水)

中部能面研究会
新作能面展
8月25日(土)29日
名古屋市博物館で
中部能面研究会(代表・磯部峯雲氏)は、きたる八月二十五日(水)

〔作歴は極めて新しい人から十数年の経験をもつ熟練の人までそれぞれの技量、作品の出来映えもさまざまだが、ご鑑賞頂く皆様への心の琴線に触れることができれば幸い〕とあいさつしている。(入場無料)

(4)面よりつづく

十二月十七日、今秋十・十一両月行われた第十四回芸術祭の参加公演二百四十三作品の中から芸術祭賞に十四作品、芸術祭奨励賞に三十五作品が受賞する。能楽部門からは宝生会(秋の別会の能六曲の企画・演出)が芸術祭賞、冠者会(「彦市ばなし」の企画、「三人片輪」の演出・演技)と喜多実ほか新作品「鶴」の関係者一同が奨励賞を受賞する。

歳晩の二十七日、中部日本新聞は「市民版」に芸術界の一年を映画・演劇・音楽・日舞・洋舞・邦楽・棋界・能楽の各分野毎に回顧、能楽については「今や全盛時代の観」の見出しで次のように総括する。

名古屋のことしの演能数は五流を通じては百番を数え、能楽全盛時代の観があった。そのうち観世流七〇パーセント、宝生流一五パーセント、他の三流が各五パーセントを占めている。二・三年前までは五流をそろえることすら困難であったのに観世以外の流儀が近頃発展を示してきたのは、新聞社主催の犠牲的な企画による五流能が大きな原因となっている。ことしも好演の能を多数たのし

めたが、なかでも金春八条の「景清」梅若六郎の「実盛」喜多実の新作「鶴」本田秀男の「道成寺」にうけた感銘は忘れられない。金剛能の「石橋・俊児之式」も珍しい、囃子方に名手がそろっていただけに格別印象的であった。

地元の能楽師ではシテ方の一部に芸熱心な人がみられるのと、囃子方の若手勉強組の二、三にいちじるしい進歩があるのは頼もしい。春以来、観世会と掬水青陽会を軸とする観世流の充実ぶりが一段と目ざましかった。それぞれ師系を異にする流内各派の師範を、芸の世界で統合するのは困難なこ

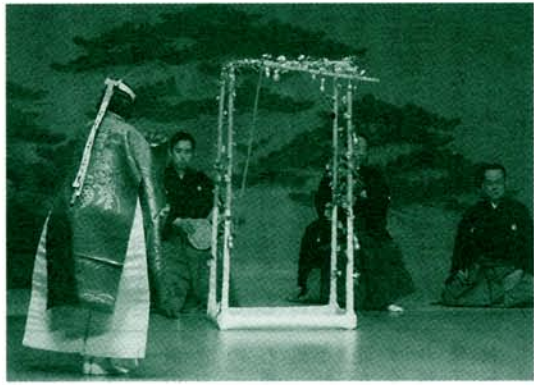
とだが、過去十年のたゆみない努力で確固たる組織を築き上げた林原蔵、柴田初太郎両氏の功績である。これが今日の中京能楽界発展の礎となったといつて異論はなからう。

右の論説、掬水青陽会について言えば、十一月十四日の催能に当り、七月二十九日と八月三十一日の二度、非公開の研究会で「放下僧」佐藤太俊、「百万」加藤丈太郎、共に舞囃子で研鑽を積んで本番の能に臨んでいる姿勢をみても分ろうか。

◆仲夏の舞台から◆

「九世福井五郎五十年祭・第十五回清華能」観世会「名古屋能楽堂定例公演」市民能楽セミナー「金剛能楽堂開館一周年記念能」金剛定期能

竹尾邦太郎



清華能「半部」桜間右陣 (杉浦賢次氏撮影)

「半部」シテ右陣(前名・眞理)、桜間家当主由緒の名跡襲名後の初来名。面小面・襟白二・白地に職文摺着付・白地色入唐織の清楚はクモリがちの面に愁い。ワキ勝久との問答も沈みがちに、素性淡と匂わせ消える短い前場の風情寂々と佳い。

後場、紫引廻しの半部屋は大小前、地(光洋・廣明ら)へさらでも袖を湿すは、と引廻し下ろされる

と、纏わりつく夕顔に金と銀の瓢箪が下がり、草の半部、を左手で押し上げる態に(後見は半部の右側を竿で突上げる)徐に立ち出づる姿は、茅屋に似合わぬ白大口に紫長絹の気品だが、黄昏時に灰白く浮かび上がるかの夕顔(ノ君)の淋しげなイメージには緋大口に白長絹の方が相応しく思う。

光源氏との馴初めを言うクセは、正先に下居へ御嶽精進の、と合掌、(彌勒仏とぞ)唱へける、と立ちワキにアシラヒ、直つて、そぞろに濡るる袂、文字通り左袖でシオル処、慎ましやかな挙指に想いの深さ、あの花折れの型は、スミで作物見込むと、左手の扇を指して進み、袖返すと(写真)袖払い、扇に花を受ける態から扇面



清華能「山姥」桜間金記 (杉浦賢次氏撮影)

手に捧げ、源氏つくづく、花に見入るところ趣深ければ、(主を誰と白波の、と作物の前くるくと小廻りに、誰とも知らない、を象徴する型に見せるのも面白い。序の舞の中、半部の下に入る型は無く、舞上がるときは、鐘も頼りに、と抱へ扇に聴き、(明けぬ前にと、驚してスミから大きく廻りワキ前、雲ノ扇から作物に進み入ると正に直り、半部が閉まると地一杯(夢とぞ)なりにける、と右ウケ膝をつき扇で面隠しトメ。しつとり落ち着いた舞台は詩的情緒漂い上々。囃子は六郎兵衛・良治・眞之介。(一時間16分)

「魚説法」お布施の誘惑に確に経も詠めぬ新発意・又三郎、留守の住持に代わる法談を求められれば聞き直った態度胸。親が漁師で魚の名には通曉の得意は、舌舐りせんばかりの口調で語呂合わせに魚の名を説法らしく繕う処、話術の妙。聴聞する裡に気付き「これ

名古屋観世会定式能(四回)

九月二十日(祝)十二時半始
名古屋能楽堂

富士太鼓

観世・淳夫
観世・鏡之丞
高安 勝久
井上 靖浩
河村眞之介
柳原富司忠
藤田六郎兵衛

鱸庖丁

狂言
佐藤 友彦
佐藤 融
後見 大野 弘之

熊坂

観世 芳宏
飯富 雅介
後見 梅田 邦久
井上 祐一
寛 敏一
後藤藤津幸
竹市 洋輝
松山 幸親
加賀 敏彦
清田 嘉宏
清田 久世
梅田 嘉宏
加藤 勤

附祝言

「要員券」
当日券八〇〇円(自由席)
(枚数に制限あり)

主催 名古屋観世会

第3回迎えた名駅薪能

懇親会を開催

「名古屋名駅薪能」は、財団法人観世文庫、名古屋名駅薪能実行委員会の主催により、ことし第三回の演能をむかえ、市民の関心も非常に高く、回を重ねるごとに定

着してきたが、今回の演能を前に、七月二十四日(午後七時から)名古屋マリオットアソシアホテルで開催され、観世流宗家・観世清和師、JRR東海葛西社長はじめ名駅薪能実行委員会、名駅ロータリークラブはじめ連携協力 協賛企業関係者がつどい、名古屋名駅薪能懇親会が開催された。

第三回 名古屋名駅薪能



は、堀田実行委員長から、「毎回非常にたくさん申込みがあり、真夏の夜の風物詩として定着してきていることは、グループあげて支援のJRR東海 関係各社 観世宗家 名古屋ロータリークラブ同好会などのご援助を感謝する」と述べ、観世文庫理事長として観世

第十七回「能」久田観鷗の会

九月二十三日(祭)午後一時三十分開演
名古屋能楽堂

能「望月」のお話し

仕舞
松 風
船 弁慶
藤井 徳三
上田 貴弘
地謡
藤谷 音彌
下川 宜稔
上田 拓司

清 水

狂言
太郎冠者 井上 靖浩
主人 佐藤 友彦
後見 佐藤 融

望 月

仕舞
後見 藤谷 音彌
下川 宜長
地謡
祖父江修一
山田 義高
上田 大介
上田 貴弘
上田 徳三
上田 拓司

「入場料」(全自由席)
一般 前売六千円(当日五千円)
学生 前売三千円(当日四千円)
取り扱いチケットぴあ、市内各プレイガイド、久田観鷗事務所

主催 能「久田観鷗の会」
事務所 名古屋市中区一社三丁目一六二
TEL・FAX 〇五二一七〇五一一五八四

伊藤忠敬の日本地図展

徳川美術館の秋季特別展
徳川美術館(名古屋市中区徳川町)は、徳川園開園記念・秋季特別展として、10月2日から11月7日まで「初公開」アメリカから里

清和宗家は「能楽は世界文化遺産」として第一回に推薦をうけた。遺産とはいえ、能は古くさいものでなく、六百年前のもっと自由であったと文獻に残っている。文明の最先端の駅にさわで、六百年前の能楽を演ずることに意義がある」とあいさつ、さらにJRR東海葛西社長の乾杯で懇談を重ねた。(写真)あいさつする観世清和宗家)

この地図は、日本人が作った世界一正確な地図、として知られた伊藤忠敬の大縮尺図「大図」をアメリカから里帰りさせて初公開するものである。これは二〇〇一年にワシントンの米国議会図書館で、江戸時代後期の測量家・伊藤忠敬が作った「大図」と呼ばれる日本地図の写し(明治時代)二百七枚が発見され、本邦初公開となる。大図のうち、この地方に関係の深い地域を中心に出品される。約七十点展示。主催 徳川美術館、国土地理院、アメリカ伊藤大図展研究会、中日新聞、NHK、共同通信。観覧料千二百円、高大生七百円。



〔蟬丸〕武田志房、祖父江修一
〔引括〕野村又三郎、野村小三郎
（名古屋観世会）



④〔蟬丸・替装束〕逆髪・武田志房、蟬丸・祖父江修一
⑤〔融・究〕観世喜之（名古屋観世会定式能）（杉浦賢次氏撮影）

冠者もそ

を真似（写真）取捨不可能、仏頂面の咲鳴に焦る主、人真似ゲームを楽しむかの太郎冠者は元氣一杯、又三郎家トリア息の合った舞台。（28分）

「淡路・急々之舞」前場、ワキツレ從臣・利宣・正樹を伴うワキ廷臣・勝久、淡路島で老夫婦シテ永譲ツレ泰能の祭事めく田仕事に

「飛鳥川」四十八年前に先代蔵宗家の上演があるが、喜多との二流にしか無く稀曲。

この後「薩摩守」あきら、「野守」道一があったが紙幅が尽きた。（6月27日・金剛定期能第六回・金剛能楽堂）

〔蟬丸・替装束〕小書でツレ蟬丸の位が上がり双ジテ扱い、萩葉屋も笛前に角掛出て出す。蟬丸・修一、物着で僧体になるため着込む黒水衣が単袴の下からちよろちよろするのは感心しないが、薄幸の皇子の気品は盲目ゆえの慎重な筆措に表われ端正。ワキ清貫・雅介の蟬丸への恭敬は、深刻な事態への重苦しい雰囲気伝えるワキ語に活写され前場が引き締まる。運命、と諦観の蟬丸もいざ独り残されると知って伏し転び、笠と杖を捨て双シオリの直情、修一克明にみせる。

後場、逆髪・志房。逆しまの髪は、手にも分けられず、左手で抜く奇立ち写真とは花の都を、橋懸へ立ち出でる道行へ投影するか。狂女なれど、里人も咎むなよ、と狂狂で指差開キの型も亦里人を牽制するかの奇立ち。しかし、女心は、勾欄に寄って水鏡に映る己が姿に、髪は荊棘を、と左手で頭上を指シ、更に右手を

「融・究」シテ喜之。前場、月の出と共に満ちてくる潮の気配に浦は寂寥の気色が弥漫するところ、一息入れる様に一ノ松で田子

「融・究」シテ喜之。前場、月の出と共に満ちてくる潮の気配に浦は寂寥の気色が弥漫するところ、一息入れる様に一ノ松で田子

「淡路・急々之舞」前場、ワキツレ從臣・利宣・正樹を伴うワキ廷臣・勝久、淡路島で老夫婦シテ永譲ツレ泰能の祭事めく田仕事に

「飛鳥川」四十八年前に先代蔵宗家の上演があるが、喜多との二流にしか無く稀曲。

この後「薩摩守」あきら、「野守」道一があったが紙幅が尽きた。（6月27日・金剛定期能第六回・金剛能楽堂）

曲見・襟白淺黄・白摺箔着付・紺地蛇籠二流水文無紅籠箔腰巻・浅黄水衣・右手杉桶。ツレ克紀・幸洋、連面・襟赤・白摺箔着付・赤地縫箔腰巻・白水衣・左手苗入籠の姿、小憩の後に田植を、とシテは常座へ出、笠を取ると大前へ。ツレ二人は地前へ、うち一人は下居。この眺めを余所目にワキが川を渡る処、田植女の一人が「昨日の淵は今日の瀬」と古歌を引き答める。此の過ぎゆく時の早さの連想から田植の植え時をけしかけられ、クセ中、「いざや植えようよ」と正面横列に植えられる苗は各人一本宛。喜多流は各人三本と聞くから少々寂しい。しかも、抑も幾許ゆので慌しく、舞台面も映えな

（5）面よりつづく
据え、（その時我が姿をも）現はし、とツレに左袖アシラヒ、（移り舞を舞ふ）べし、と颯と身を翻す様に右へ廻り橋懸へ向かう処鮮やか。

から右へ体も巡らせ高く眺めて、上求菩提を願し、と頭取し、直ッて下化衆生を（表して）、と音させず拍子二ツ、（金輪際）に及べず、と左半身に扇逆さ下を指す象徴的な型の描写も亦冴える。床几立ってからの型は、（花は紅の）色々、と踏む拍子二ツ、（休む重荷に、と合膝に扇へ遣る処、（砧に声の）して打つは、と大きく打合二ツ、（よし足引の山姥が、と翳して廻ると、山廻りするぞ苦しき、ではくるくる小廻りに苦痛の表情を現わすなど、抽象・具象の型も美しい。扇を鹿背杖に替えて立廻は、途中右膝つい

て鹿背杖の両端を持ち、頭上に掲げる姿が如何にも苦行の趣。キリは、（暇申して帰る山姥、と再び鹿背杖を扇に替へ、（影を）尋ねて、と月ノ扇（写真）から翳してスミへ行く、と、時雨の雲の、とゆるく面使つと、白頭のゆらりたゆたう様は得も言われぬ風情。トメは、山また山に山廻り、と合膝から返す句に一ノ松へ走り右ウケ留拍子、一貫して表情豊かな型をもった好舞台だった。地謡は光洋・安明ら。囃子は誠・啓次郎・総一郎・義命。（1時間34分・6月12日・九世福井五郎50年祭第15回清華能）

着をつけるが手切れの証を求められる夫・又三郎。「暇をやったが証しや」と突つ撥ねるも粘る妻に根負け、目ぼしい家財とて無い強みは「この上は何など汝の氣に入つた物を持って行け」の言葉を与えてしまふ。為て遣つたり、と使い古した大きな袋を持ち出す妻に、薄笑い浮かべる夫は背後に陥穽が近づくとを知らない（写真）袋を押す被せて處にし、「エイトウ、エイトウ」と聞の声を挙げ夫を背負ってゆく妻、女心を知らぬ男のエゴの痛烈な批判、好短篇を讀む味わいである。（10分）

「淡路・急々之舞」前場、ワキツレ從臣・利宣・正樹を伴うワキ廷臣・勝久、淡路島で老夫婦シテ永譲ツレ泰能の祭事めく田仕事に

「飛鳥川」四十八年前に先代蔵宗家の上演があるが、喜多との二流にしか無く稀曲。

この後「薩摩守」あきら、「野守」道一があったが紙幅が尽きた。（6月27日・金剛定期能第六回・金剛能楽堂）

曲見・襟白淺黄・白摺箔着付・紺地蛇籠二流水文無紅籠箔腰巻・浅黄水衣・右手杉桶。ツレ克紀・幸洋、連面・襟赤・白摺箔着付・赤地縫箔腰巻・白水衣・左手苗入籠の姿、小憩の後に田植を、とシテは常座へ出、笠を取ると大前へ。ツレ二人は地前へ、うち一人は下居。この眺めを余所目にワキが川を渡る処、田植女の一人が「昨日の淵は今日の瀬」と古歌を引き答める。此の過ぎゆく時の早さの連想から田植の植え時をけしかけられ、クセ中、「いざや植えようよ」と正面横列に植えられる苗は各人一本宛。喜多流は各人三本と聞くから少々寂しい。しかも、抑も幾許ゆので慌しく、舞台面も映えな



⑥市民能楽セミナー「咲鳴」⑦より
松田高義、野村又三郎、野村小三郎
⑧「清経」長田駿
（名古屋能楽堂定例公演）
（杉浦賢次氏撮影）

発行能楽の友社

名古屋市千種区千種2丁目18-18 (郵便番号 464-0858) 電話 (052) 731-7984 FAX (052) 733-2837 振替口座 00800-6-36393

購読料 1年 1100円 郵送の場合 1年 1800円

NHK放送予定(平成16年9月~10月)

- NHK-FM能楽鑑賞(毎週日曜日午前7時15分~8時) 9月26日「天鼓」(再)(宝生流) 三川淳雄ほか 10月3日「船弁慶」(親世流)角次朗ほか 10月10日「富士太鼓」(枕慈童)(宝生流)寺井良雄ほか 10月17日「龍田」(金春流) 桜間金記ほか 10月24日「養老」(再)(親世流) 遠藤六郎ほか 10月31日「無布施経」(和泉流) 三宅右近ほか

NHK教育テレビ・能狂言番組

土曜日(10月2日、9日、16日、23日)

放送時間 午後1時~1時30分

日本の伝統芸能「能狂言鑑賞入門」

能楽の友

「愛・地球博」をかかげる二〇〇五年日本国際博覧会(愛知万博)は明春三月から九月まで開催されるが、この万博会場内のEXPOドームで、能・狂言の「ドリムチーム」により、「咲きほこる伝統一〇〇〇年の時空を超えて」と題して能・狂言の公演が催される。

愛知万博で能狂言

1000年の時空を超えて 明年9月 EXPOドームで

各流競う総出演

「文化遺産」の発信期待

能上演は九月十二日(月)午後二時開演。演目は宝生流半能「高砂」(宝生英照)、金春流半能「田村」(金春安明)、喜多流能「羽衣」(友枝昭世)、親世流能「船弁慶」(親世清和)、金剛流能「土蜘蛛」(金剛永護)、狂言和泉流「鬚槽」(野村万作)、大藏流「靉猿」(茂山千作)など、さらに囃子方にも人間国宝の出演が予定されている。

第25回

金春流能

11月6日 名古屋能楽堂 名古屋金春会はきたる十一月六日(土)「第二十五回金春流能」を名古屋能楽堂で開催する。

第3回廣田鑑賞能

10月3日金剛能楽堂 金剛流「廣田鑑賞能」は十月三日(日)、京都・金剛能楽堂で第三回鑑賞能を公演。

能「山姥」はシテ廣田幸稔、ツレ廣田泰能、ワキ谷田宗二朗、笛・帆足正規、小鼓・林光寿、大鼓・石井保彦、太鼓・前川光範、後見・金剛永護ほか。狂言「栗焼」茂山あきら、丸石やすし。

「武悪」「力こぶ」

新作狂言 10月17日

名古屋市民芸術祭2004主催事業として、十月十六、十七日の二日間、名古屋市青少年文化センター・アートピアホール(ナナイパーク11階)で「狂言」を上演。演目は、名古屋を代表する二人の劇作家、北村想と佃典彦の両氏による新作書き下ろし。現代の人々にも分かりやすい内容で狂言の楽しさを伝える。

伊勢の伝統の能楽まつり

伊勢の伝統の能楽を継承する会(土谷喜八郎会長)は、来る十月十七日(日)伊勢市生涯教育センターで「第七回伊勢の伝統の能楽まつり」を開催する。

青陽会定式能(第四十八回)

九月二十五日(土)午前十一時開演 名古屋能楽堂

仕舞 遊行 柳ヶセ 近藤 幸江 地謡 久田三津子 生駒 里翠 前野 郁子 今沢 美和

能 菊慈童 黒田 博 河村総一郎 加藤 洋輝 柳原富司忠 竹市 学

仕舞 清 経キリ 松山 幸親 八神 孝充 大江 山 清沢 一政 梅田 嘉宏 高橋 瞭一

能 野宮 久田三津子 河村眞之介 大野 誠 間 井上 祐一 後藤嘉津幸

能 阿漕 祖父江修一 佐藤 融 寛 敏一 後藤孝一郎 鬼頭 義命 竹市 学

附祝言 主催 青陽会

当日券 三千円、学生券 千円 問合せ 名古屋市名東区一社三の一六二 久田 勘 方 電話 〇五二一七〇五一五八四

狂言「ござる乃座公演」

九月二十六日(日)午後二時開演 名古屋能楽堂

狂言 伊呂波 親子 野村 裕基 野村 万作

狂言 名取川 名取の某 野村万之介

素囃子 鞆鼓 小鼓 大野 誠 太鼓 後藤嘉津幸 野村 万作

狂言 文荷 太郎冠者 野村 万作 次郎冠者 高野 和憲 石田 幸雄

取扱い チケットぴあTEL 0570-02-9999 名古屋三越ブレイクガイドTEL 052-953-0077 主催・お問い合わせ 万作の会 TEL 03-3997-8778

名古屋市民芸術祭2004参加 第八回能楽「鏡座」公演

十月二日(土)午後一時三十分開演 名古屋能楽堂

舞囃子 葛 城 片山九郎右衛門 河村総一郎 後藤孝一郎 前川 光長 大和舞 藤田六郎兵衛

狂言 狐塚 太郎冠者 野村小三郎 次郎冠者 野村 隆行 高義 後見 奥津健太郎

能 道成寺 味方 団 森 常好 河村眞之介 後藤嘉津幸 前川 光長 則久 英志 野村小三郎 野村又三郎

能 阿漕 祖父江修一 佐藤 融 寛 敏一 後藤孝一郎 鬼頭 義命 竹市 学

附祝言 主催 能楽「鏡座」

当日券 三千円、学生券 千円 問合せ 名古屋市名東区一社三の一六二 久田 勘 方 電話 〇五二一七〇五一五八四

「有料」指定席(正面) 二、〇〇〇円 九、〇〇〇円 自由席(正面、正面上手側) 六、〇〇〇円 学生券 一、〇〇〇円 (当日券は一、〇〇〇円増)

チケット問い合わせ 090-7671-8945 電子チケットぴあ 0570-02-9999 ファミリーマート・セブンイレブンでも取扱

名古屋泉楽会秋季大会

十月三日(日) 正午始
名古屋能楽堂

能巻 若山弥栄子 飯富 雅介 河村真之介 加藤 洋輝
 船弁慶 子方 簡井 俊隆 観世 喜正 鹿取 希世
 采女 林 政興 竹村 武
 観世 喜正 野村小三郎 後藤嘉津幸 鹿取 希世
 高橋 徹一 地謡 坂 真太郎 小森 喜久
 後見 観世 喜之 中森 貫太 駒瀬 直也
 独吟 屋 鳥 山田 延恒

秋の清謡会 (第二十七回)

十月八日(金) 午前十一時始
名古屋能楽堂

花 観世 喜正 飯富 雅介 河村真之介 大野 誠
 西行桜 深見 しげ 後藤嘉津幸 鹿取 希世
 舞囃子 観世 喜正 観世 喜之
 番外仕舞 遊行柳キリ
 附 祝 言 (終了五時頃) (素謡省略個所有)
 主催 名古屋泉楽会
 補導 観世 喜正 名古屋喜謡会
 伊藤 礼子 金井 邦夫 榎山きよ子 地謡 本田 勲
 清 沢 一 政 須部 甫
 鶴 亀 清沢 一 政 須部 甫
 番外素謡 鶴 亀 清沢 一 政 須部 甫
 伊藤 礼子 金井 邦夫 榎山きよ子 地謡 鬼頭なみ江
 手嶋なみ江 鬼頭なみ江
 宮崎 陸夫 近藤富士雄 神谷 鏡一 高島 順子
 熊野 野 神谷 鏡一 高島 順子
 吉野 象 宮崎 陸夫 近藤富士雄 神谷 鏡一 高島 順子
 玄 象 宮崎 陸夫 近藤富士雄 神谷 鏡一 高島 順子
 連吟 敦 盛 樋口あけみ 久松 直代 小栗知津子 高見かね子
 待謡 ケセマテ 樋口あけみ 久松 直代 小栗知津子 高見かね子

武田謳楽会秋季大会

十月十七日(日) 午前九時半始
名古屋能楽堂

雪林院 林 和子 今川 米子地謡 西野 志保
 葵 上 小島 恵子 矢根 敬子 伊藤 泉
 玉 鬘 小島 恵子 矢根 敬子 伊藤 泉
 羽 衣 伊藤 泉
 鄂 古澤ひさ子
 連吟 葵 上 上 歌へ我人のつらければ
 三 輪 宮地 滋子
 胡 蝶 丹羽佳世子
 花 籠 奥村 小浪
 松 虫 サシへあしたに
 舞囃子 野 正 織田 敏男 河村総一郎 鹿取 希世
 芭 蕉 鬼頭みゆき 河村総一郎 鹿取 希世
 菊 慈童 不破 峰子 河村総一郎 鹿取 希世
 今澤 美和 高安 勝久 河村総一郎 鹿取 希世
 通小町 高安 勝久 河村総一郎 鹿取 希世
 白楽天 金井 邦夫
 井 筒 金原 孝典
 自然居士 山口 耕造
 三井寺 高見かね子 久松 直代
 シテ 面白の鐘の音 ケセマテ 小栗知津子 小栗知津子
 松 風 梅田 邦久
 國 栖 清沢 一 政
 山 姥 古賀満月子 小畑喜代治
 花 籠 水田 慶子 林 信吾
 清 経 前山 鎮男 新開 隆巳
 番外仕舞 富士太鼓 武田 邦弘
 齊藤 徳子 新開 隆巳

第37回公演 狂言鳳の会

十月二十三日(土) 午後一時三十分開演
名古屋能楽堂

笠之段 土田 衛
 清 経 川合 圭子
 班 女アト 小瀬古喜代子
 善知鳥 加藤 愛郎
 砂 辻岡 勝洋 河村真之介 井上 敬介
 八段之舞 柳原富司忠 井上 敬介
 蝶 下里 紀子 河村真之介 井上 敬介
 胡 蝶 小瀬古喜代子 柳原富司忠 井上 敬介
 狸 々々 久田勤吉郎 河村真之介 井上 敬介
 子方 清沢 一 政 吉井 基晴 祖父江修一
 同山 清沢 一 政 吉井 基晴 祖父江修一
 田中 萬子 杉江 元 河村総一郎 井上 敬介
 高 砂 柳原富司忠 藤田六郎兵衛
 安 宅 片山 芳昭 片山 清司
 道成寺 柳原富司忠 藤田六郎兵衛
 梅 守 阿竹登代子 今村 香
 桑原 寿子 井上 敬介
 野 守 桑原 寿子 井上 敬介
 番外仕舞 鶴之段 吉井 順一
 松 虫 片山慶次郎
 遊 行 柳 渡辺 一彦 河村総一郎 井上 敬介
 安 宅 井田 順子 河村真之介 藤田六郎兵衛
 遊 行 柳 渡辺 一彦 河村総一郎 井上 敬介
 菊 慈童 市川 敦子 河村総一郎 井上 敬介
 花 籠 松岡満寿子 藤田六郎兵衛
 北田 尚子
 小 督 奥田えつこ 河村真之介 竹市 学
 松 風 鈴木 利治 河村真之介 竹市 学
 融 齊藤 忠佳 河村真之介 井上 敬介
 番外仕舞 女郎花 武田 欣司 竹市 学
 狂言 富士松 太郎冠者 佐藤 友彦
 狂言 柑子俵 柑子買 井上 祐一
 狂言 主人 井上 靖浩

能巻 松 風 瀬戸 綾子 観世 喜正 鹿取 希世
 船弁慶 森田 早紀 高安 勝久 福井啓次郎 鹿取 希世
 舞囃子 羽 衣 瀬戸 勝治 後藤嘉津幸 鬼頭 義命
 和合之舞 瀬戸 勝治 後藤嘉津幸 鬼頭 義命

狂言 釣 針 太郎冠者 井上 祐一
 主人 大野 弘之
 妻 佐藤 藤之
 要 今枝 靖雄
 今枝 郁雄
 林 泰礼
 米倉 智愛
 中島 智亮
 鹿島 俊裕
 佐藤 友彦

三交會大会
 第一日 十月二十三日(土) 午前十時三十分始
 第二日 十月二十四日(日) 午前九時三十分始
 第三日 十月二十三日(土) 午前十時三十分始
 熱田神宮能楽殿
 名古屋能楽堂

入場料 (全席指定)
 A席 五〇〇円、B席 三〇〇円、C席 一五〇円
 学生会員 二〇〇円
 会員A席 四〇〇円、会員B席 二五〇円
 チケット取扱
 チケットぴあ 052-320-9999
 Pコレド 354-894
 井上祐一宅 052-834-6112

狂言 釣 針 太郎冠者 井上 祐一
 主人 大野 弘之
 妻 佐藤 藤之
 要 今枝 靖雄
 今枝 郁雄
 林 泰礼
 米倉 智愛
 中島 智亮
 鹿島 俊裕
 佐藤 友彦

◆盛夏の舞台から◆

【第三回三の会】【第五回御洒落名匠狂言会】【名古屋能楽堂定例公演】
【豊田市能楽堂定例公演】【名古屋観世会】

竹尾邦太郎

「宗論」 旅は道連れ、似合わしい相手とみて都まで同行を申し出ると、請われるまま先に素性を明かす法華僧・小三郎、相手の宗旨を知るや初手から小馬鹿にしたように北受笑み、玩弄してやろうの浄土僧・又三郎。宗旨相容れないと言え、法華経を貶して転向を迫り、顔面撫で上げんばかりに「ちと預かせられい」と伝、法然上人の珠数を振り翳す浄土僧の横暴。懸命に抵抗する法華僧だが先手先手と取られて怯み、宿屋(高義)に隠れるも、敏い浄土僧に直ぐ見付かり、何とも情無い表情の一方で、「連ちやもの来いでならうか」と囁く浄土僧は如何にも憎体。宗論は、法華の法文の「五十転々随喜の功德」に浄土の「念弥陀仏即滅無量罪」、論旨は芋茎(すいき)と菜(さい)の因って来るところの有難さだが、互いに理解の外で噛み合わないところが味噌。これまでの劣勢挽回と意気込む法華僧が元氣。キリは朝課の勤行合戦、互いに負けじと唱える念仏と題目が遂には錯綜する辺りは、主導する浄土僧の、ばつの悪

さらから突然解悟、神妙になる処、ねち／＼とした粘っこさの消えるのも妙。(36分)
「随方角」 茶鏡べに用意万端を伯父・又三郎の気前の好きに頼る主・高義の横着は、茶ばかりか太刀に馬まで借りてこいと太郎冠者・小三郎に命じる。「案内は誰ぞ」と重々しく出る伯父、客が誰と分かるや「えい、太郎冠者」と口吻いかにも軽く打ち解けてくる機嫌に、太郎冠者との合口の好きが知れ、交渉巧く進展するを期待させるが、それも至らぬ主を庇う太郎冠者の慮りあればこそ、駆引き上手に和やかに対応する太郎冠者も旨い。無事三点を調達して機嫌よく戻るさ、迎える主は喜色でねざらうどころか遅いと怒気満面、馬の手綱を引つたくるや馬上の人。流石の太郎冠者も腹に据え兼ね、咳に暴れ癖の馬を挑発、二度まで主を落馬させて己れが馬上の人となるに因り、人の気の無いを幸い主従立場を逆にして貰い、主人風を吹かせる辺りは聊か意趣晴らしの気味もあり軽妙、小三郎大いに楽しんでた。馬は健

方より童画の世界めいて面白いのでは。伝承の過程の複雑微妙。なお「随方角」は野村又三郎家の表記で、読みは「止動方角」に同じ。「随」は思い通りになること、「方角」は手段・方法の意味。思うに「し・どう」は童謡「金太郎」の詩句「鉞担いだ金太郎、熊に跨りお馬の稽古、はい・し・どう・どう・はい・どう・どう」と同じ間投詞。「はい」は馬を進ませる時の掛声だが、「し」は制止させるために発する声、「どう」は牛馬を停止させる時の掛声(語釈は「広辞苑」)。されば「し・どう方角」は「馬を思い通りに制止させる法」そのまの呪文。(30分・7月4日・第三回三の会)

「蚊相撲」 事毎に見栄を張る大名・又三郎、それを巧くあしらう共存する太郎冠者・高義、八千人の雇用をそち共に一人、と減らしゆく辺りの頑は無い駄々っ子は志村けん馬鹿殿の先駆。備った新参の異相の男・小三郎が馬の伏せ起こしも得意と聞けば、「馬も持たぬに馬の伏せ起し、はははは」と破顔大笑して己れの台所事情を暴露、馬脚を現わして太郎冠者に窘められ首を絞めるのも無邪気。折から大相撲名古屋場所が中日な戦。立合い一瞬らく／＼となつて脳震盪を起こし、相手の正体が蚊ノ精と分かるや第二戦は大蔵流と同様に行司の太郎冠者を加勢させて扇で煽らせる(写真)。大名の家来ということもあるが、行司の立場を考れば和泉流他派の様に大名自身が大きな浪団扇で対抗する



お洒落名匠狂言会 ①から「蚊相撲」「船渡聲」「太鼓負」

「船渡聲」 大蔵流は船頭と男は別人、それゆえ船中の船頭・東次郎と鯉・泰太郎との酒をめぐる押し問答から酒宴となる処に力点。対岸の船客(鯉)の「ホイイ／＼」と呼び掛ける声に「ホイイ／＼」と応えて漕ぎ寄せる船頭の櫓捌きの巧みは、船を揺らさず危なげなく乗る客で知れる。安心に身を任せた客は身じろぎもせず、櫓が気掛かりな船頭は、頃合いを計り客に話し掛ける。以下、二人の間答は、執拗に誘導尋問して酒にありつこうとする船頭と、率直にそれを拒む客の呼吸のよさである。問われるまま、櫓は祝儀で届けるもの、また、出掛けには飲んだが寒さで最早醒めたこと、まで答える客の生真面目と、客が上戸と知れての一種の狎れは、拒まれては「手が凍えて櫓が押されませぬ」と櫓を手放す実力行使の船頭の嫌味、心象描写が旨い。ただ具象の描写となると、船の揺れ工合に左右大きく身体を傾ける客は少々大仰。

漸う酒にありついた船頭、口をつける前に目を瞬かせるのも細かく、「何はさて三つとは頂きません」も怪しく口だけ。そうなる固より行ける口の客、船頭の「飲ませらるるを見ましたれば」と、船頭の酌に喉も鳴らさず一気呑みは如何にも若さ、現代風(?)。飲めば客も気宇宏大、ざつと酒盛となつて小話から小舞まで飛び出し、「今のお骨折に今一つ」と酌を受ける客、献酬の挙句は「イヤ、これは皆になりました」と櫓を傾げる(写真)。今や兩人すっかり和気満々、戻りを約して別れるところなど一抹の寂しみをさえある。キリは酔いの勢いの鯉の大胆不敵の空樽、盃事にまさかお持たせは開くまい、の思い込みが外れ、狼狽する鯉にこれ見よがし、「この様な空樽でござる」と転がしてみせる太郎冠者・則秀、しかし、面目失墜の鯉の心中推し量り「苦しいことござる」と追う勇

②面三交会番組つづき

Table listing cast members for various plays including 'Sanjūji', 'Hana', 'Bishamon', and 'Utsurohime'.

邦謡会秋の会

Table listing cast members for the 'Kokoro no Kai' (邦謡会) event.



お洒落名匠狂言会「隠狸」

（3面よりつづき）

・則直の温もり、山本家一門の好アンサンブル。（34分）

「隠狸」 汝は狸を釣るか、と不意に聞かれ、内緒の稼ぎ露見かと慌てて否定する太郎冠者。萬、客に狸汁振舞うつもりの主・与十郎はその狼狽しとみるが、仕方なく市へ狸を求めに遣る。やれく太郎冠者、昨夜の狸を序でに売り仕舞ってからの算段とばかり大声で売り歩くところと出合し、その場を繕うに四苦八苦。酒を餌に胸に一物の主は、市の人前を憚る太郎冠者に益を勧め、更には「この市場で舞ひましたらば人が笑ひます」と拒む太郎冠者に唇の舞を所望すれば、酒の勢いに小舞は「花の袖」更に連舞は「鶴飼」から「兎」へと、後ろに隠した狸の在り処も忘れさせ、文字通り兎ならぬ狸の尻尾を掴まれ、「南無三寶現れた」と太郎冠者（写真）主従虚々々々の駆引きから上戸の太郎冠者が籠絡されてゆく一部始終、円転滑脱の萬の軽みと与十郎の厚み、親子共演の好舞台。なお、前日は早稲田大学大隈講堂での五世野村万之丞楽劇葬、父と弟の胸を思うと胸潰れる思い、謹んで御冥福をお祈りする。（28分）

「太鼓負」 祇園会の祭行列の先払い、警固役を仰せつかった男シテ友彦、毎度人足の役に甘んじる夫を侮り罵る妻・祐一。さすが愚直な男も「わ女め」と喚き家を飛び出して頭人・弘之に訴えれば、特に目立つ太鼓背負う役を宛がわれる。祭の身支度に男と頭人が中入ると後見座にクツグ妻は立って常座、立シヤベリに男の首尾を案じる殊勝もあつて祭の渡る刻限、「祇園の社へ詣り、それから山を見物しやうと思ひます」と

一拝の後は屋台見物の冷やかしかから「さて山はどれにあるかしらん」と首座前。囃子（誠・啓次郎・総一郎・洋輝）が入り「さてく賑やかになつてきた」と舞台あちこちすのり「見物左衛門」に似る。脇座床几に掛かると、警固を先立下袴・白練袴（肩取ル）の頭人一行、祇園会に、の連吟で美々しく出て座着く。巫女（靖浩・融）が笛・小鼓で神楽を舞い始めると、座を抜け出したシテはそれを一ノ松から眺めるうち興に乗り、戻って稚児から銅拍子を取り上げると、拍子を踏み舞い出すおつちよこちよい振り。囃子が笛だけで踊り節風になると、益々調子づき我を忘れるシテ（写真前頁）、大熱演である。舞上げ一ノ松へ退くと、一同は頭人の休息と言ふ声に立ち、舞台一巡から後座を通り切戸へ、囃子方も後へ続くと舞台はシテ男とアド妻だけになる。

そそくさと男の方へ寄ると袖を引き、「今日の風流のその中に一骨折と見へたるは太鼓を負へる人やらん」と妻。まじく見詰められ、臆もなないお追従に腰が引ける男も、妻に「元の如くに契るべし」と来られれば、「それは誠か」と男は飽くまでも甘い。大きな太鼓汗だくで背負うのがそれ程の雄姿とは思えぬが、そこは価値観の相違、元の鞘に収めれば好いではないかということだろう。

キリは二人仲良く連吟へ負える太鼓の当座の契り打ち連れて行くこの太鼓同道してぞ帰るける、の道行、男愛しさに妻が太鼓を打てば、「こりや何事ぢや」と踏踏めく瘦身の男（稀曲だが平成元年の上演があり、元秀宗家の大兵を思い出す。この時も妻は祐一）、叱りもならず「愛しの人よちやとござれ」と言われれば「心得た」と囃唱夫随、当今の夫婦の構図に似ないか……。出演は他に警固の靖雄・郁雄・泰礼・俊裕、稚児に宏貴・智亮、総計十一人、狂言共

同社の充実である。（49分・7月11日・第五回お洒落名匠狂言会）

「佐渡狐」 堅そうに見えるが袖の下次第で融通も利く苦虫噛み潰した様な奏者・弘之が良い味を出し、行き掛かり上あとに退けない佐渡ノ百姓・友彦の、卑しい微笑に賄路を差し出す小手回しの利く狡さ（写真）、越後ノ百姓・祐一の純朴な中の我が強さ、が旨く調和した微笑の狂言世界。番組にはシテ奏者であるが、佐渡ノ百姓のときとの演出上の相違は奈辺に在るか。（32分）

「邯鄲」 求道の哲学青年シテ盧生・勘助、夢中、玉殿に上るところ、位重々しく、勢威は日月運しと、双手高々と挙げる姿にみせる。在位五十年を更に一千歳まで、と汲む菊の酒を舞童・勘吉郎から受けると、座興の舞童の舞に触発されて御機嫌に舞う台上の楽（かく）の伸びやか。空下りは左足外すとハッと右手に柱を掴み頭を左右に振る（所謂イヤイヤ）ところが面白い。楽あとは地との掛合に舞い継ぎ、昼夜の暇も知らず四季の景も一挙眼前の愉楽。不思議やな、と後ろ向きに台へ近付き腰掛けるのも、その不思議に呆気にとられる無意識の行動か。かくて時過ぎ、の返す句に立ち、「五十年の榮華、と大小前へ。飛入りはツツと進むや拍子二ツ踏んで飛び上がり（写真横臥、鮮やかに極まる。夢醒めてからも、松籟を聞いて、宮殿樓閣、は幻であったのか、と右から左へ面使フ沁々した感懐は、一炊の間の不思議、計り難しや、と左膝両手に抱えるところ、心持充分だった。子

方勘吉郎君の舞の巧さが爽やかなアイ融の宿ノ女主の品のよさ、口開から最後に枕を頂いて退いて行く迄の間、狂言座に居て終始端然、舞台を引き締めた。（1時間24分・7月16日・名古屋能楽堂定例公演）

「文蔵」 シテ主・小三郎、太郎冠者・高義の無断欠勤を激怒するも京内詣と知り懐しさに有免、更に伯父御様へ伺つた由を聞くと、持て成し好きの伯父に何を馳走になつたか気掛り尋常ではない。執拗に訊ね、あれかこれか思いつく儘を並べても持たあかず、食い物に頼る主は苛々して語気荒らげてくる。忘れて済むものか、の気持ちは誰しも、小三郎惹きつける。そして、物に寄せて、と言われて太郎冠者の氣付いたこと、主の読む石橋山合戦譚の中に出てくる物、と。飽くまで固執する主は床几を持ってこさせ、酒々と語り出すが、得意の読み物に熱が入ると少々自己陶醉気味（写真）になるのも可笑しい。長々と語らせておいて「文蔵を」と太郎冠者、「汝が食うた物をきつと推量した」と床几を立つ主、音の類似は温精（うんせう）粥、「主に骨を折らす、しさり居らう」の叱り留まで小三郎気合充分にはきはきと上々の語り。（26分）

「俊寛」 シテ俊寛・順之、沙門帽子・標浅黄・茶地唐花二宝尽シ文縫箔着付・黒練水衣・腰篋。僧都の自負も逆境に疲弊、黒練水衣にそれを見るが飽くまで狷介の風情。殊勝に神信心のツレ康頼・高夫と成経・慈一に水を酒を進める辺りの理屈にも皮肉感じられる。

しかし、酌をするうちに真情吐露、千年を経る心地する、と今の配流の気持を、また、法勝寺法成寺、と昔在京の春の懐旧の思いを、二人に同意求めるかにアシラフが、二人との融和は考えられない孤愁。落つる木の葉の蓋、の処は桶の底に左手添え前に出して受け、落魄の因は、我なるものを、と速く正を見て面伏せる処は、上臉の腫れた様に見える面のせい、涙ぐむ様な姿に如実。救免状の場は康頼が読み、「何とて俊寛をば」と重苦しい語調で詰問、状を受取り「さては筆者の」とキツと面だけ救免使ワキ和哉へアシラフは、憤懣徒ならずも一転クドキの沈痛、順之名調を開かせる。クセは「もしも札紙にや、と一呼吸、巻返して、と熱視、こは夢か、と右膝打つて立ち、覚めよ覚めよ、と二ツ打合、退つて安座双シオリの激情。船出の場は独り取り残される悲哀、康頼の袂に取りつけば（写真）船權權するワキ、「せめては向ひの地まで」と左手を指すが、打とうとするワキに辟易ろき、纏に縛るが断ち切られてたじくと退つて尻餅をつき安座双シオリ。傷はしの御事や、と船上の三人、シテは「帰洛を待てよとの、と静かにシオリを解いてゆく。（必ず帰洛）あるべしや、でパツと居立ち船を望み、頼むぞよ、と立つも頼もしく、と直ぐまた右膝つく、と再び立ち、二・三足前へ出ると人影も消えて、と乗り出す姿も切なくシオリ留。（1時間8分・7月17日・豊田市能楽堂定例公演）

「俊寛」 シテ邦久、黒頭・小格子厚板着付・焦茶縷水衣（肩取ル）・腰篋。僧都の自負も今や蓬髪は無頼の野放図、康頼・正邦と成経・一致に酒を勧める辺りも冷やかに軽侮もありそう。配流の気持ちは「千年を経る心地する、と面クモラセ、夏開けて、と水桶持ち立つと二人から離れ常座へ。恋し昔の「思ひ出、を一足引いて惚ふ心はクモリがちの面、其処で二人と向き合すが、その距離に沙門の順之とは異なる黒頭の邦久は拗ね者の印象が強い。落つる木の葉、は腰から抜く扇を掴まむ指で開き、「五哀、と細かく面使じ前へ出る」と膝をついて受け、「飲む酒は谷水の、を右から左へ一ノ松の方に眺め、水上は我なるものを、と直つと立つと、「物思ふ時しも、と正中へ行き、「今こそ（限りな）りけれ、と下居、桶を置き扇ハツタと捨てる処、拗ね者の自暴自棄にも思える。

「瓜盗人」 「口調法をもつて一日一日を送る」盗人シテ靖浩、暗夜、瓜畑に寝転ぶが瓜の所在は確か、採り終えてふと人影に気付き許しを乞えば、畑主の正体見たり案山子。腹巻に打ち壊し、畑を荒して逃げる。が、この瓜、進上さきで偉く褒められたと又調達の羽目に。出向けば、「今度は念を入れて上手に作つたものぢや」と畑主・友彦の変装とも知らず、案山子の持つ杖の下げ緒を手繰れば杖が振り下ろされる仕掛けに破顔一笑（写真）有頂天になって祇園会の出し物は鬼の責めの積古を始め出し、独りではしゃぐ。靖浩のおおどかな味わい。（30分）

「鉄輪・早鼓」 シテ邦弘、面泥眼・標浅黄・白地小葵文摺箔着付・納戸地福二鳴子文縫箔巻・黄萌黄段露芝蒲公英文唐織摺、小書では被衣で出るといふが常と同じ女笠。丑の刻詣の女人の嫉妬の怖さは恨みの鬼となつて不実な男に復讐、「思ひ知らせん」と邪魔が入れば押し退けんの勢いの中入は一ノ松から走り込み。後場は面橋姫・標浅黄・赤地金鱗箔着付・浅黄地丸紋絞箔巻、「枕に寄り添ひ、と正中で見込み、一畳台へすつと上がつて右膝つく、と、いかに殿御よ珍しや、と打杖胸に当て烏帽子（男冷たく凝視の）ころ、鬼気迫り、クドキは肺腑を抉る愁嘆に恨みの深さ。髪を手に巻きつけて打つ処は、「打つや宇津の山の、と拍子踏んで二ツ打ち、と夢現とも、と右ウケルのが茫然の態に思え、「今更さこそ、と髪を見て亦一ツ打つた。トメは三ノ松で拍子一ツ踏んだ。（1時間5分・7月18日・観世会）

「おこわり」 「戦後名古屋能楽史」は、紙面の都合にて今号休載させて頂きました。何卒ご理解頂きますようお願い致します。（編集部）

「おこわり」 「戦後名古屋能楽史」は、紙面の都合にて今号休載させて頂きました。何卒ご理解頂きますようお願い致します。（編集部）

「おこわり」 「戦後名古屋能楽史」は、紙面の都合にて今号休載させて頂きました。何卒ご理解頂きますようお願い致します。（編集部）

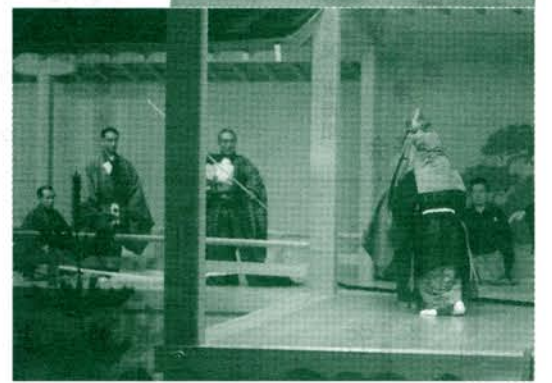
「おこわり」 「戦後名古屋能楽史」は、紙面の都合にて今号休載させて頂きました。何卒ご理解頂きますようお願い致します。（編集部）

「おこわり」 「戦後名古屋能楽史」は、紙面の都合にて今号休載させて頂きました。何卒ご理解頂きますようお願い致します。（編集部）

「おこわり」 「戦後名古屋能楽史」は、紙面の都合にて今号休載させて頂きました。何卒ご理解頂きますようお願い致します。（編集部）

「おこわり」 「戦後名古屋能楽史」は、紙面の都合にて今号休載させて頂きました。何卒ご理解頂きますようお願い致します。（編集部）

「おこわり」 「戦後名古屋能楽史」は、紙面の都合にて今号休載させて頂きました。何卒ご理解頂きますようお願い致します。（編集部）



豊田市能楽堂定例公演 ④「文蔵」野村小三郎、⑤「俊寛」山本順之（杉浦賢次氏撮影）



名古屋能楽堂定例公演 ①「佐渡狐」、②「邯鄲」（杉浦賢次氏撮影）



名古屋能楽堂定例公演 ④「俊寛」梅田邦久、⑤「瓜盗人」井上靖浩（杉浦賢次氏撮影）

発行能楽の友社

名古屋市中種区千種2丁目18-18 (郵便番号 464-0858) 電話 (052) 731-7984 FAX (052) 733-2837 振替口座 00800-6-36393

購読料 1年 1100円 郵送の場合 1年 1800円

NHK放送予定(平成16年10月~11月)

- NHK-FM能楽鑑賞(毎週日曜日午前7時15分~8時) 10月24日「養老」(再)(親世流) 遠藤六郎ほか

- NHK教育テレビ・能狂言番組 11月13日(土) 15時から教育テレビ 能「大江山」 シテ:粟谷菊生

能楽の友

国民文化祭池田町実行委員会として、能楽製作は、三ヶ月〜六ヶ月を必要とされるため、十カ月前からの募集告知とし、応募受付期間も二〇〇五年七月一日(金)〜七月三十一日(日)と設定している。

応募受付 明年7月1日~31日

現在も鶴岡神社の「水海の田楽能舞」(国指定重要無形民俗文化財)が奉納されており、他の地区では祭礼の当日にお面様を祀り、往時の面影をしのいでいる。

- ① 応募対象 年齢・国籍は問わない ② 応募点数 一人一点(写面、創作面は問わない) ③ 作品の規定 未発表の新作面に限る

第20回国民文化祭 ふくくい2005

新作能面公募展 福井県池田町主催事業

福井県では平成十七年に国民文化祭が開催され、「能楽の里」池田町では「能面の祭典」を開催することを決定、全国から新作の能

面を募集し、「新作能面公募展」を明年10月(展示期間10月22日(土)~10月30日(日))に開催する。

の神秘性と芸術性、さらに民俗芸能で神格化され、今も人々の心に生きている価値を次世代に継承する祭典とする。

演能カレンダー

名古屋能楽堂

(TEL 052-231-0088)

- [10月] 23日(土) 狂言鳳の会第37回公演 (無料) 24日(日) 三交會大会 (無料) 31日(日) 邦謡會秋の會 (無料)

熱田神宮能楽殿

(TEL 052-671-0852 文化殿)

- [9月] 23日(土) 三交會大会 (無料)

名古屋金春会能

十一月六日(土)午後二時開演 名古屋能楽堂

- ⑦賞 文部科学省大臣奨励賞▽国民文化祭実行委員会会長賞▽福井県知事賞▽第20回国民文化祭福井県実行委員会会長賞▽第20回国民文化祭池田町実行委員会会長賞▽池田町教育委員会賞▽能楽の里池田賞2点

URL http://www.townikedafuku.jp/ikedanou/index.html E-mail: kyouni@town.ikedafuku.jp

西行桜

飯富 雅介 高安 勝久 杉江 元 後藤 孝一 鹿取 希世

狂言鏡男

井上 祐一 佐藤 友彦 鹿島 俊裕 後見 今枝 郁雄

仕舞源太夫

本田 芳樹 金春 安明 地謡 本田 由樹 本田 光洋 井上 孝敬

能船弁慶

杉江 元 飯富 雅介 井上 靖浩 福井 啓次郎 大野 義誠

附祝言

(六時頃終了)

郁調會大会

十一月七日(日)午前十時半始 名古屋能楽堂

入場券 五千円(正面指定席) 四千円(中正面自由席・脇正面自由席) 学生席 三千円

主催 名古屋秀麗會 名古屋春榮會 (社)金春円満井會 (フシハラ内) TEL 052-842-7931

連吟 竹生島

名古屋大学観世會 名古屋大学観世會

仕舞 花盛

野崎 和恵 河村真之介 柳原富司忠

舞囃子 敦盛

河村真之介 柳原富司忠 鹿取 希世

能三輪

志津 明子 高安 勝久 柳原富司忠 鹿取 希世

素謡 盛久

門脇 千鶴 下川 宜長 松山 幸親

舞囃子 定家

渡辺 郁子 寛 鉦一 大野 誠

素謡 俊寛

成経 中澤 孝文 康頼 佐治 光幸 濱田 國松 赤尾 正

舞囃子 松虫

熊谷 見子 寛 鉦一 大野 誠

歌占

佐治 光幸 久田 舜一郎 大野 誠

附祝言

(終了予定四時半頃)

主催 郁調會 前野 郁子會

野村家三代披露公演

12月23日 名古屋能楽堂

和泉流狂言・野村又三郎家は、十二月二十三日(木・祝)名古屋能楽堂で「野村家三代披露公演」を開催する。

狂言「朝猿」は、野村又三郎、小三郎、信朗の一家三代による公演。狂言「千切木」「貴掬」はじめ、観世流・片山九郎右衛門師の舞囃子「鶴亀」が上演される。

演目は次のとおり。
狂言「朝猿」野村小三郎、野村又三郎、松田高義、野村信朗
狂言「奈須与市語」野村万作、舞囃子「鶴亀」片山九郎右衛門。

狂言舞囃子「三人長者」井上祐二、佐藤友彦、大野弘之

大槻能楽堂 自主公演

特別公演も開催

大槻能楽堂では、2004年自主公演能・特別公演を10月30日(土)開催する。平成16年度(第59回)文化庁芸術祭協賛公演、午後二時開演。

狂言「首引」鎮西・茂山逸平、親鬼・茂山七三、姫鬼・茂山童児、眷属・茂山正邦、茂山宗彦、茂山茂、島田洋海、後見・茂山千三郎。

能「大原御幸」建礼門院・梅若六郎、法皇・観世栄夫、内侍・斎藤信隆、大納言局・武富康之、ワキ・福王茂十郎、ワキツレ・森本幸治、山本順三・中村宣成、アイ・茂山良暢。

笛・左鴻雅義、小鼓・林光寿、大鼓・白阪信行、後見・泉嘉夫、赤松禎英、山崎正道、地謡・大槻文藏、梅若晋矢、多久島利之、山本博通、山本正人、生一知哉、寺沢幸祐、水田雄吾。

入場料(全自由席)一般当日五、五〇〇円(前売五、〇〇〇円)、学生当日三、五〇〇円(前売三、〇〇〇円)、発売所「電子チケットぴあ」、ローンチケット、大槻能楽堂(TEL06・6761・

8055)

名古屋観世会定式能(納会)

十一月十四日(日)十二時半始
名古屋能楽堂

頼政 関根 祥六、能 宝生 欣哉、河村総一郎、大野 誠、井上 靖浩、後藤孝一郎、梅田 邦久、地謡 松山 幸親、関根 祥人、梅田 邦久、地謡 松山 幸親、関根 祥人、梅田 邦久、地謡 松山 幸親、関根 祥人。

茶壺 狂言 野村小三郎、松田 高義、野村又三郎、後見 伴野 俊彦、仕舞 関根 祥人、花 籠 クレイ、武田 志房、通小町 武田 志房、梅田 嘉宏、梅田 勤、梅田 正邦。

船弁慶 子方 久田勘吉郎、大槻 文藏、杉江 元、寛 敏一、高安 勝久、梅田 勤、梅田 正邦、梅田 勤、梅田 正邦、梅田 勤、梅田 正邦。

附祝言 主催 名古屋観世会 (終了四時半頃) 当日券八千円(自由席)

名古屋能楽堂定例公演

名古屋市民芸術祭2004協賛

十一月十九日(金)午後六時三十分始
名古屋能楽堂

鎌腹 狂言(和泉流) 男 野村小三郎、女 松田 高義、仲見人 佐藤 友彦、後見 野村又三郎

碓 清沢 一政、泉 嘉夫、飯富 雅介、寛 敏一、松田 高義、福井啓次郎、鹿取 希世

後見 松山 幸親、地謡 八神 孝光、梅田 勤、久田 勘吉郎、地謡 黒田 博、古橋 正邦、高橋 瞭一、祖父江修一

主催 能楽普及事業実行委員会、名古屋市・財名古屋城振興協会、財名古屋市文化振興事業団、協賛 能楽協会名古屋支部

名古屋宝生会定式能(第48期)

十一月二十一日(日)午後一時始
名古屋能楽堂

竜田 飯富 雅介、河村総一郎、鬼頭 義命、橋本 幸、福井啓次郎、竹市 学、野口 隆行、竹内 澄子、平田 正文、稲川 寿一、竹内 澄子、村上 淳一、水上 輝和、後見 玉井 博祐、地謡 寺部 一威、和久莊太郎

胸突 狂言 松田 高義、野村小三郎、後見 野村又三郎、仕舞 佐藤 耕司、稲川 寿一、松 虫クセ、佐藤 耕司、馬黒 富四夫、雲林院キリ、衣斐 正宜、内藤 飛能

芦刈 和久莊太郎、辰巳満次郎、高安 勝久、寛 敏一、藤田六郎兵衛、奥津健太郎、柳原富司忠、柴田 勲、佐藤 耕司、加賀山憲治、衣斐 正宜、玉井 道夫、水上 輝和、後見 倉本 雅、地謡 久野 幸三、内藤 飛能、玉井 博祐、地謡 久野 幸三、内藤 飛能

主催 名古屋宝生会、名古屋市天白区島田二一三〇一、島田橋住宅二一三三〇、佐藤 耕司、電話FAX〇五二一八〇三二七三七二、携帯TEL〇九〇一七四一六一三三四

要員券 当日券一万円(2枚綴)、学生券二千元、(年4回5枚綴2万円)

久田観正会秋の大会

十一月二十八日(日)十時始
名古屋能楽堂

素謡 楊貴妃 吉田 勝巳、内田 永男、遊行柳 村瀬 隆夫、渡辺 清彦、野屋 島 三浦 敏靖、内田 永男

素謡 安宅 田中 信子、下川 宜長、舞囃子 芦 刈 杉山 範彦、河村眞之介、竹市 学、井 筒 大竹富三三、福井啓次郎、鹿取 希世、海 士 橋本 桂、福井啓次郎、鹿取 希世

素謡 恋重荷 仲村 スミ、上田 拓司、小池 房子、岡田 信達、高安 勝久、河村眞之介、加藤 洋輝、相元 正樹、柳原富司忠、竹市 学

素謡 望月 久田勘吉郎、後藤 玲子、丸山 敏子、久田 勘吉郎、舞囃子 三 輪 志賀 禮子、福井啓次郎、鹿取 希世、遊行柳 仲村 スミ、福井啓次郎、鹿取 希世、後藤 玲子、寛 敏一、加藤 洋輝、福井啓次郎、鹿取 希世

素謡 経正 川村 勝廣、藤井 圓隆、番外仕舞 花 籠 クレイ、久田 勘吉郎

附祝言 主催 久田観正会、名古屋市名東区一社三一六一二、久田 勘吉郎、TEL(〇五二)七〇五一五八四

(終了予定四時半頃)

戦後名古屋能楽史

〔第十四章〕 竹尾 邦太郎

昭和三十五年(一九六〇)

戦後十五年、熱田神宮能楽殿舞台披きより五年の正月である。世情落ち着き、名古屋の能楽界も活況を呈してきた矢先、昨秋未曾有の台風に見舞われたが、幸い能楽殿は大過無く、何よりもその被害を軽減し、一ヶ月も経たぬうちに、能楽協会が二日間に亘り東京で義捐金を催した能楽界の連帯感、友情が強く印象づけられる。例年通り、共に非公開ではあるが、一月二日には能楽協会名古屋支部長・田鍋徳太郎邸では五十回を数える打初があり、能楽殿では翌三日、新年の謡初式が滞りなく行われる。因に、著名な能評家・国文学者の坂本雪鳥(明治12~昭和13)に「謡初めに鼓を打たせつ」の一句がある。

一月十五日、成人の日は名古屋清韻会。大槻十三の古稀祝賀会記念の社中で、祝言の半能「嵐山」はシテ十三、番外能とせず、地謡やツレに社中も交じるが、大槻十三の風貌がよく分かる西田三好の能評を次に抜粋する。

正先に一畳台を二つ並べて両端に桜の木を立てる。シテは早笛をぬきにしてツレの合舞のうちに幕をはなれ、紺の唐織をかきつけて出る。一の松でとまって、それを後ろへかけてヌツと現われたが、白頭の下に金泥の「大飛出」がランランと光り、白地金模様の狩衣、半切姿は神々しく、見あげるほど大きく、すばらしい威圧を与えている。早笛をぬいて十三に橋懸りを走らせなかつた演出は、この姿の偉大で一応成功していた。

氏の白頭物にはドツシリと心に響くような豪快さと威厳があり、あくまで能の白頭である、現今これほど大まかな味わいをもっている人はいない。

なお番外仕舞五番「難波」岡田光紘「草子洗小町」杉村竹翠「放下僧」泉嘉夫「鞍馬天狗」大槻文蔵「狸々」田村勇、がある。

二月十七日、昭和三十四年度(第十七回)芸術院賞の受賞候補者二十三人が決まり、内第三部芸術部の部門では安倍季敏(雅楽)木下保(音楽)清元栄寿郎(邦楽)近藤乾三(能楽)の四人が選ばれる。

二月二十一日は辰巳孝一郎十七回忌追善能、「海人」近藤乾三、「呂運」佐藤秀雄、「大原御幸」宝生九郎、仕舞十一番、「石橋・連獅子」宝生英雄(白)辰巳孝(赤)。催主は異会・辰巳孝、孝一郎の長子である。

三月十三日、第二回朝日狂言会は「和泉流の若き宗家を観る会」のサブタイトルを付け、「狂言」紙の歌村彦四郎は次のように言う。「和泉保之氏は三宅藤九郎氏の息で和泉流の家元を継承され、父君のよき薫陶をうけ、近來めきめきと腕をあげ、その貫録も充分に出て来ました。昨秋東都に於て若冠二十才で秘曲花子、と取組み見事にしなとけて喝采を博しました。これを名古屋にむかへ多く

の観客層に観て欲しいと思ひ今回の企画となつたのであります」と。舞台上に先立ち国文学者の高木市之助の講演「これからの狂言」があり、番組は「鬼瓦」河村丘造「鎌腹」三宅藤九郎「縄ない」井上松次郎「花子」和泉保之「首引」石田喜樹・佐藤三郎、である。

三月二十日は芸術院賞受賞者であった故松間弓川の追善能。催主の金桜会・松間龍馬は番組の中で次の挨拶をする。「父、弓川(田名金太郎)昭和三十三年三月一日逝きて早や三年、顧みるに祖父伴馬が明治三十三年那古野神社能楽殿に於いて、俊寛を御勤めし、継いで金記が三十三年に、次いで三十六年には父金太郎の佐々木を演じ爾來約六十年の長きに亘り御支援を頂きました。御地の各位の御奨めに従ひまして、今回左記の様な番組を以て、追善能とし聊か冥福を祈り度いと存ずる次第で御座います。だが是れども一重に各流の同好諸賢の御後援なくしては覚束なく、何卒絶大の御高庇に依りまして御観覧を賜ります様、伏して御願申上げて御挨拶に代る次第で御座います。番組は舞囃子「三輪」金春信高、能「清経」松間道雄、狂言「悪太郎」佐藤三郎、能「隅田川」松間龍馬、仕舞二番「笹之段」松間辰之「船橋」興進、能「葵上」本田秀男。

また「狂言」紙の歌村彦四郎は同紙33号で「故松間弓川先生」の見出しで故人を懐かしむ。「三月二十日故松間弓川先生の三年にあたり、親しみの深い当地で追善能が営まれるについて思ひ出すのは、私の父初代井上菊次郎在生のころ、伴馬翁に伴はれて当時金ちゃんのお見えになりました。道を歩くにも便所へ行かれても、口の中には謡のけいこです。唯頭の中には能以外のものは無かつたのではなかつたと思はれます。伴馬翁亡きあともただ芸一筋の虫のような方でいられた。いづこの楽屋でも能・狂言に拘らず鏡の間からじつと見つめていられた姿は実に頭がさがる思いでした。かくてこそ流儀を越えて愛される弓川師、惜まれる弓川先生であつたのです」



昭和5年頃 孝一郎、辰巳孝(左) 辰巳孝(右) 辰巳孝(左) 辰巳孝(右)

真は前年度回顧のものでなく、今年度の曲目案内。曲目と撮影者は次の通り。「青衣女人」「山姥」小野長生、「敦盛」「彦市はなし」「青衣女人」前島久男。「住吉詣」「野宮」前西芳雄、「通小町」「鬼ヶ宿」杉本藤次郎。

三月二日、芸術院賞の受賞者が決まり、先の第三部の四人の候補者の中から近藤乾三が選ばれる。受賞理由は宝生流シテ方の演技に對し、因に昭和二十九年「満仲」の演技で芸術祭文部大臣賞の受賞歴がある。この芸術院賞について自著「芸の道・人の道」自由現代社・昭和五十二年十月刊に「芸術院賞のこと」と題して、次の文章(抜粋)がある。

今上陛下には先年(昭和三十五年)芸術院賞の授賞式の折、お目にかかつて親しくお言葉を賜りました。

また、近藤乾三は名前の「乾」を探り「いぬみ」と号する知る人ぞ知る俳人でもあり、芸術院賞宮中御陪食、の前書をもつ一句に「御機嫌に聞こえ上げたる涼しさよ」がある。

三月六日、戦前なら地久節、当代の皇后誕生日、これと全く無縁だが水青陽会は第三期第三回。これまでもそうであるが、これより先、研究会と称する非公開の稽古の場を持ち、それを踏まえての公演である。番組は素謡「嵐山」石谷初蔵、「田村」塚本秀雄、仕舞二番「経正」佐藤太俊「雲林藏」甲子夫、「班女」上田照也、仕舞二番「三輪」加藤丈太郎「花筐」柴田取武、狂言「蜘蛛盗人」井上松次郎、仕舞「雨月」柴田初太郎、能「野宮」河村鉦二。

また「狂言」紙の歌村彦四郎は同紙33号で「故松間弓川先生」の見出しで故人を懐かしむ。「三月二十日故松間弓川先生の三年にあたり、親しみの深い当地で追善能が営まれるについて思ひ出すのは、私の父初代井上菊次郎在生のころ、伴馬翁に伴はれて当時金ちゃんのお見えになりました。道を歩くにも便所へ行かれても、口の中には謡のけいこです。唯頭の中には能以外のものは無かつたのではなかつたと思はれます。伴馬翁亡きあともただ芸一筋の虫のような方でいられた。いづこの楽屋でも能・狂言に拘らず鏡の間からじつと見つめていられた姿は実に頭がさがる思いでした。かくてこそ流儀を越えて愛される弓川師、惜まれる弓川先生であつたのです」

各地だより

平成16年度 梅猶会定期能 12月5日 最終公演

梅猶会定期能は、本年度最終公演として12月5日(日)大槻能楽堂で、能「経正」「野宮」「山姥」の三番を上演する。正午開演。

能組は次のとおり。

能「経正」、シテ立花香寿子、ワキ福王和幸、笛・齊藤敦、小鼓・高橋宗子、大鼓・大村滋二。

後見・梅若善高、梅若基徳、地謡・池内光之助、井戸和男ほか。

狂言「酢薑」善竹隆平、善竹隆司

能「野宮」拜留・シテ梅若吉之丞、ワキ清水利宣、笛・野口伝之

梅猶会定期能連絡所 豊中市新千里南町三一八一・二、梅若善高方、電話06・6831・7854

平成17年度 宝生会定期能 予定

平成十七年度の名古屋宝生会定期能(第四十九期)は、一月二十三日(日)を初回として四回開催される。予定番組は次のとおり。

会場は名古屋能楽堂。

〔第一回〕一月二十三日(日)

能 西行桜 倉本 雅

能 歌 占 辰巳満次郎

その他 仕舞、狂言

〔第二回〕六月十九日(日)

能 千手 衣斐 愛

能 国 栖白頭 佐野 萌

その他 仕舞、狂言

〔第三回〕九月十八日(日)

能 草紙洗 玉井 博祐

能 狸々 佐藤 耕司

その他 仕舞、狂言

〔第四回〕十一月二十日(日)

能 楊貴妃 竹内 澄子

能 飛雲 衣斐 正宜

その他 仕舞、狂言

(当日の販売も取り扱う)

当日券一万円(二枚綴・年内通用)、学生券各回当日券二千円。

◆晩夏から初秋の舞台◆

第十二回能楽後継者育成研修発表会
「第廿回衣斐正宜後援会」と「梅猶会
定期能（平成16年度第3回）」「初秋能
第二部」

竹尾邦太郎

〔金札〕平安遷都の際、伏見に神社造営、の勅を受け下向の延臣、其処で曰く有りげな老翁に出遇う。長生・朝恩を壽き、木尽し



後継者研修発表会「金札」久田勘吉郎（杉浦賢次氏撮影）



後継者研修発表会「金札」久田勘吉郎（杉浦賢次氏撮影）

金札を取り上げ姿を消す老翁だが、やがて虚空に伊勢の使い天津太玉神と声あり、猶も拝顔を願わば造営に励み崇敬を、と声ばかりが残る。観世流はこの前場を廃し後場だけの半能形式として「祝言能」とする。

伏見へ下向の廷臣ワキ勝久、異香薫る不思議さよ、と座着くと出端（希世・嘉津幸・眞之介・洋輝）で天津太玉神シテ勘吉郎が出る。直而・黒垂に金札戴輪冠・襟赤・色違幸菱文厚板着付・赤地龍ノ丸文半切・紺地法被・袖折込に弓矢を持つ。一ノ松で「守るべ

〔楊貴妃・玉簾〕シテ良雄。眩いばかりに煌やかな扇簪帯が宮に下がる小書「玉簾」、九華の帳を、とシテはその御簾を左手に掻き分け、深窓の姿を垣間見せるも、初同乾之助・光夫ら（雨を）帯びたる装ひの、で左手下ろせば御簾は再び閉じられる。方士ワキ和哉、玄宗が貴妃の消息尋ねさせる心の裡、切々と伝えれば、御簾の内より伝えるシテは懐旧に「魂を消す」とシオル哀傷も一入である。拝調し得た証を求め

の胸中を述べる地謡の名調は、来世の逢瀬を頼むと語り給へやと、平伏のワキにアシラフ処、心持充分。直ぐの別れを惜しみ、へげにや驪山の宮の中、と漸く左手で御簾掻き分け宮を出る。面筋木増・襟白二・撫子文白摺着付・緋大口・金地松皮菱地紋枝垂桜鳳凰文唐織重折の豪華な姿。へその叙にて、とワキから受取る天冠を物着につけ、へ哀れ胡蝶の舞ならん、と昔日の華やき寂しく反芻するかのイロエ。地との掛合に生々流転・生者必滅を言くと、舞クセは玄宗との出会いから別れに至る感慨、へよしそれととも、と低く弱しめてスミから左へ大きく廻るの、逃れ得ぬ命者定難の象徴とも思える。序ノ舞を省き、直ぐへ恋しき昔の物語、地が受ける裡に脱いだ天冠を再びワキに与え、と、ワキは戴いて平伏、立って橋懸へ去るのをシテは、へさるにて

「いと、命あつての雷ちや」などと悲鳴を上げはしても頼るはアド、心の交流もほほのほと微笑ましい。治療代の請求に、手元不如意のシテは、代りに雨露の恵みを確かめ、へ汝は薬師の化現かや、とお世辞も忘れず「ピツカリ、ガラ」と喜び一杯の昇天に、「桑原く」とアド、童話の世界は几帳面な融を包み込む様な祐一の温もり、結構。（27分）



初秋能・第二部「鬼界島」長田驥、後藤嘉津幸（杉浦賢次氏撮影）

「あつての雷ちや」などと悲鳴を上げはしても頼るはアド、心の交流もほほのほと微笑ましい。治療代の請求に、手元不如意のシテは、代りに雨露の恵みを確かめ、へ汝は薬師の化現かや、とお世辞も忘れず「ピツカリ、ガラ」と喜び一杯の昇天に、「桑原く」とアド、童話の世界は几帳面な融を包み込む様な祐一の温もり、結構。（27分）

「いざさればこそ」と話柄を纏いでゆくところ、後場の実盛その人力充実をみる。中人はへ幻となりて失せにけり、と地一杯に一ノ松へ、坦々と行くのが如何にも幽霊。

「班女・笹之伝」梅若修一のシテ遊君花子、ワキ吉田少将・茂十郎と交わした形見の扇に増増す恋慕の情、部屋に閉じ籠れば激怒する宿ノ長アイ忠三郎、花子を放逐する。

「鬼界島」シテ俊寛・驥、淡浅

「あつての雷ちや」などと悲鳴を上げはしても頼るはアド、心の交流もほほのほと微笑ましい。治療代の請求に、手元不如意のシテは、代りに雨露の恵みを確かめ、へ汝は薬師の化現かや、とお世辞も忘れず「ピツカリ、ガラ」と喜び一杯の昇天に、「桑原く」とアド、童話の世界は几帳面な融を包み込む様な祐一の温もり、結構。（27分）

「いざさればこそ」と話柄を纏いでゆくところ、後場の実盛その人力充実をみる。中人はへ幻となりて失せにけり、と地一杯に一ノ松へ、坦々と行くのが如何にも幽霊。

「班女・笹之伝」梅若修一のシテ遊君花子、ワキ吉田少将・茂十郎と交わした形見の扇に増増す恋慕の情、部屋に閉じ籠れば激怒する宿ノ長アイ忠三郎、花子を放逐する。

「鬼界島」シテ俊寛・驥、淡浅

「あつての雷ちや」などと悲鳴を上げはしても頼るはアド、心の交流もほほのほと微笑ましい。治療代の請求に、手元不如意のシテは、代りに雨露の恵みを確かめ、へ汝は薬師の化現かや、とお世辞も忘れず「ピツカリ、ガラ」と喜び一杯の昇天に、「桑原く」とアド、童話の世界は几帳面な融を包み込む様な祐一の温もり、結構。（27分）

発行能楽の友社

名古屋市中千種区千種2丁目18-18
(郵便番号 464-0858)
電話 (052) 731-7984
FAX (052) 733-2837
振替口座 00800-6-36393
購読料 1年 1100円
郵送の場合 1年 1800円

能楽の友

NHK放送予定(平成16年11月~12月)

NHK-FM能楽鑑賞(毎週日曜日午前7時15分~8時)
11月21日 「井筒」(金剛流) 金剛永謹ほか
11月28日 「班女」(再)(親世流) 藤波重和ほか
12月5日 「巴」(親世流) 野村四郎ほか
12月12日 「黒塚」(宝生流) 今井泰男ほか
12月19日 「阿漕」(金春流) 本田光洋ほか
12月26日 「紅葉狩」(再)(喜多流) 塩津哲生ほか
教育テレビ能狂言番組は放送予定はない。

演能カレンダー

名古屋能楽堂

(TEL 052-231-0088)

[11月]
19日(金) 名古屋能楽堂定例公演 (有料)
21日(日) 名古屋宝生会定式能 (有料)
28日(日) 久田観正会 (無料)
[12月]
4日(土) 名大観世会 40周年記念大会・第8回定期自演会 (無料)
5日(日) 歳末助け合い運動 協賛能 (番組①面)(有料)
11日(土) 朝日カルチャーセンター能楽会 (番組①面)(無料)
23日(木・祝) 野村家三代披露公演 (番組②面)(有料)

久田舜一郎師還暦記念 能「道成寺」「猩々乱」

12月26日 女流小鼓方が抜き 大阪能楽会館

小鼓方大倉流・久田舜一郎師主宰の久田松月会では、きたる十二月二十六日(日)大阪能楽会館で、久田舜一郎還暦記念「松月会能」を公演、喜多流能「猩々乱」(シテ高林伸二)、親世流能「道成寺」を上演する。

朝日カルチャーセンターは、ことし創立四十周年を迎え、これを記念して、きたる十二月十一日(土)名古屋能楽堂で記念能楽会を開催する。

開講40周年記念 朝日カルチャーセンター能楽会

12月11日 名古屋能楽堂

寺・赤頭(シテ寺澤幸祐)を上演。猩々乱の小鼓には高橋奈王子師、道成寺の小鼓には久田陽春子師の女流小鼓方が勤める。女流による乱、道成寺は珍しく、能楽界での女流の活躍を象徴するものと注目と期待がよせられる。この演能は後援・久田舜一郎後援会、当日12時30分始。能二番のほか狂言、舞囃子、一調、一調一管、仕舞など。梅若吉之丞、大西智久、大槻文蔵、山本勝一、辰巳満次郎、久田勘助、福王茂十郎、茂山千之丞、藤田六郎兵衛、大倉源次郎の諸師が出演する。

観能券は一階指定席二二〇〇円、同自由席一〇〇〇円、二階自由席七〇〇円、学生席四〇〇円。問い合わせ・申込みは、松月会 0798・73・6586、好声会 06・6324・6199 (番組②面掲載)

歳末助け合い運動 協賛能

12月5日 名古屋能楽堂

中部能楽師会主催、能楽協会名古屋支部共催による「歳末助け合い運動・協賛能」は、毎年十二月に開催、協会名古屋支部所属の各流能楽師による演能で、愛好者の協力を得て開催されているが、ことしは12月5日(日)名古屋能楽堂で、能三番、狂言一番はじめ舞囃子、仕舞で行われる。能組は、親世流能「蟬丸」(シテ梅田邦久)宝生流能「百万」(シテ竹内澄子)親世流能「国栖」(シテ清沢一政)の三番。狂言は和泉流「骨皮」(今枝郁雄)、舞囃子・金春流「紅葉狩」(シテ鬼頭尚久)、仕舞・金剛流「野

守」親世流「三輪」「葵上」喜多流「采女」の四番。午前十時半始。入場券は前売券二五〇〇円(当日券三〇〇〇円)、学生券一五〇〇円。前売りは市内ブレイガイド、チケットぴあ・TEL05707010219999(Pコード・3551975)、各出演者。なお昨年は義援金として、愛知県・名古屋市へそれぞれ三〇万円ずつ合計六〇万円が寄付されている。

演能案内

名大40周年記念大会 観世会 第8回定期自演会

十二月五日(日)午前十時半始 名古屋能楽堂
十二月四日(土) 名古屋能楽堂
能「巻絹」「羽衣・和合之舞」「経正」
狂言「柿山伏」舞囃子「雲雀山」ほか
主催 名古屋大学観世会 鏡 桜

歳末助け合い運動 協賛能 (第三十六回)

十二月五日(日)午前十時半始 名古屋能楽堂

観世流能 蟬丸 高橋 瞭一 梅田 邦久 杉江 元 河村真之介 鹿取 希世
後見 久田 勘助 今沢 美和 須部 南 梅田 邦久 加藤 誠
替装束 松田 高義 加藤 誠 加藤 誠

金春流舞囃子 紅葉狩 鬼頭 尚久 河村総一郎 柳原富司忠 登二 加藤 誠
中村 花子 飯富 雅介 福井啓次郎 竹市 義命
竹内 澄子 野村又三郎

宝生流能 百万 後見 玉井 博祐 愛 地謡 久野 幸三 石森 智幸 外山 通夫 加賀 孝充 八神 正和 佐藤 耕司 衣斐 愛 地謡 久野 幸三 石森 智幸 外山 通夫 加賀 孝充 八神 正和 佐藤 耕司

和泉流狂言 骨皮 今枝 郁雄 大野 弘之 佐藤 友彦 井上 靖浩 後見 佐藤 友彦 佐藤 友彦

喜多流仕舞 采女 長田 郷 和谷 英毅 伊藤 隆美 長田 郷 和谷 英毅 伊藤 隆美

親世流能 国栖 飯富 雅介 柳原富司忠 河村総一郎 大野 洋誠 橋本 幸一 今枝 靖一

附祝言

後見 久田三津子 地謡 近藤 幸江 八神 孝博 古橋 正邦 黒田 勘助 梅田 嘉宏 泉 嘉夫 本田 勲 久田 勘助 嘉宏

朝日カルチャーセンター能楽会

十二月十一日(土)九時半始 名古屋能楽堂

能組 竹生 島 長田 曉 大森万里子 草紙洗小町 加藤 誠子 河村真之介 大野 誠 小袖曾我 平塚 昭子 河村真之介 佐藤みどり 加藤 誠子 河村真之介 佐藤みどり

素謡 海士 川栄 靖英 桂 ワキ橋本 清 安達 原 松島 孝雄 加藤 順子 川島 利雄 小川 一郎

独(親世) 西行桜 シテ 井田 秀雄 浦部 重雄 独(親世) 高砂 伊藤 弘 独(親世) 高砂 伊藤 弘

独(親世) 鐘之段 坪内 孝子 大島 貞子 独(親世) 鉢木 西島 一 伊丹 良子 独(親世) 鉢木 西島 一 伊丹 良子

仕(喜多) 七騎落 加藤 領一 伊藤 英毅 葛城 伊藤 英毅 葛城 伊藤 英毅

舞囃子 賀茂 兼松 美穂 寛田 隆美 鬼頭 誠命 班女 佐野小と子 梅田 功子 浅井 正幸

久田舜一郎還暦記念
松月会 能

十二月二十六日(日)十二時三十分始
大阪能楽会館

喜多流 高林 呻二
狸々乱 植田隆之亮
後見 高林白牛口二
友枝 雄人

老松 寺澤 忠芳
春栄 寺澤 拓海
菊慈童 久田三津子

班女 大西 智久
一調 大倉源次郎

邯鄲 梅若吉之丞
舞離子 荒木 賀光

橋弁慶 久田勘吉郎
久田勘助
大倉慶乃助
野口傳之輔

井筒 大槻 文蔵
仕舞 山本 勝一
鐘之段 地謡 今村嘉太郎
波多野 貴弘
大西 礼久

戦後名古屋能楽史 ⑤
〔第十四章〕 竹尾 邦太郎

昭和三十五年 (一九六〇)

(承前)
盛会の裡に終えた第四回中日五
流能、三月二十九日付中部日本新
聞夕刊は「中日五流能をみて」と
題し西田三好の能評を載せる。昨
年の「鶴」に続き今回も喜多流は
土岐善磨の新作能「青衣女人」、
その後の上演は当地で皆無なの
で、その能評と番組パンフレット
の「作者のことば」(写真版)を紹
介する。
喜多実の「青衣女人」前シテは
青い水衣の色調がよく面が「増
女」であったから、どこかに神韻

醉薑 狂言
善竹 隆平 善竹 忠亮
後見 上吉川 徹

宝生流 辰巳満次郎
安宅 久田舜一郎
野口傳之輔

道成寺

観世流 寺澤 幸祐
福王 浩史
福王 知登
福山 千之丞
間 茂山 童司

後見 武富 康之
山本 勝一
寺澤 忠芳
今村嘉太郎 生一 知哉
齋藤 信輔 松浦信一郎
永田 雄吾 大槻 文蔵
藤谷 音彌 上田 拓司

付祝言

観能券
一階指定席 一、〇〇〇円
二階自由席(当日指定) 一〇、〇〇〇円
二階自由席 七、〇〇〇円
二階学生席 四、〇〇〇円
お問合わせ・お申込み
松月会 0798-73-6586
好声会 06-6324-6199
大阪能楽会館 06-6373-1726

主催 久田松月会

青の水衣と同色の大口、物着で白
の舞衣を着、それに天冠をつけ
た。「走り」や「五体投地」の行
法の型をみせたのちシテは離子の
手の上で橋へゆき、一ノ松で
「いま頂礼の観世音」と大きくゆ
つたりと雲ノ扇をしたのは、まさ
に生身観世音の姿を現わした。

がただよっていた。この杖の扱
いは老女物でもなく、中年の女の病
体を表わすものだから苦心のほど
は十分くんでよく、適切であった
と思う。「哀憐の衆生」と床几か
ら杖に続いて、前へよるよる出る
のが写実的だ。「われもおくれじ
初夜の鐘」とシテは橋へ出る。東
大寺初夜の鐘から始まる松明の行
事を欄干越しに見るのだが、これ
が移りゆく炎の型。前半は総じて
気品のある強い信仰を持った女性
を端的に表現していた。後はワキ
の読む過去帳の中にシテが甦って
くるのだが、面は「泥眼」で前の

①面朝日カルチャーセンター能楽会つづき

海道下り

田澤 義弘
松岡 利治
三輪 島子
長谷川 寿美子
大沢 芳夫

志賀

八神 孝充
嘉夫

藤戸

朝岡 利子
ワキケル 兼松 美穂

小鍛冶

嶋田都彌子 浅井 正幸
岩田フミ子
増水 悦子
石川 進 鈴木 豊

玄象

岩田フミ子
増水 悦子
石川 進 鈴木 豊

安宅

水野すま子 河村眞之介 佐藤いず美
高木田鶴子
新美 智正 大野 誠

春日竜神

西澤 康夫 新美 智正 大野 誠

鶴亀

佐野 豪是
菊本 寿雄
鈴木 武
石田 勝久

舟弁慶

富永 康文
堤 幸夫
木村 健一
甲村 健一

海人

黒田美智子 長谷川美和子
勝島登志子 木全 正江
逸見由利子 桜井 茂子

草子洗小町

伊藤 金作 井野千江子 鈴木 豪是
川井 耀子 菊本 寿雄 佐野 豪是
石田 勝久 阿部 彦俊 岩本 英隆
増水 悦子 石田 勝久 濱本きく子

花篋

岩田フミ子 桂

紅葉狩

荒木 俊彦
桜井 芳子

遊柳

久 大田 幸雄
清子 藤角 照雄

雨月

鈴木 彦一 四朗
豊徳 照雄

砧

田中 米子 川口志満子 大野 誠

屋島橋 進 河村眞之介 大野 誠

狂言 長光 通行人 大沢 芳夫 目代 井上 祐一

頼光 川島千代子
トモ 吉沢 英子
胡蝶 小島 秀博
シテ 安藤 秀博

土蜘蛛

ワキケル 杉江 元 河村眞之介 鬼頭 義命
ワキケル 勝久 正樹 鈴木 久子 大野 誠

附祝言

間 井上 靖浩

野村家三代披露公演

十二月二十三日(木・祝)十二時三十分開演
名古屋能楽堂

番組

狂言 猿

大名 野村小三郎 太郎冠者 松田 高義
猿 野村又三郎 後見 野村 信朗
後見 奥津健太郎

舞離子 鶴亀

玄宗皇帝 片山九郎右衛門 太鼓 前川 光範
大鼓 河村總一郎 苗 竹市 学
小鼓 大倉源次郎 地謡 古橋 正邦
地謡 武田 邦弘
梅田 邦久
久田 勘助

狂言 三人長者

蒲生の長者 佐藤 友彦
せ、なげ長者 井上 祐一
市森長者 大野 弘之
大鼓 河村總一郎 太鼓 前川 光範
小鼓 大倉源次郎 苗 竹市 学
地謡 佐藤 融
地謡 鹿島 靖浩
地謡 鹿島 俊裕

狂言 貝尽し

三宅 右近
後見 茂山 茂

賞 千切木

太郎 野村 萬
当屋 野村与十郎
太郎冠者 野村 祐丞
初心講の連中 野村小三郎
初心講の連中 井上 靖浩
初心講の連中 佐藤 融
初心講の連中 野口 隆行
初心講の連中 奥津健太郎
太郎の妻 野村又三郎
後見 野村 扇丞

賞 賀

夫 茂山千五郎
妻 茂山 千作

賞 千切木

太郎 野村 萬

賞 賀

夫 茂山千五郎
妻 茂山 千作

賞 賀

夫 茂山千五郎
妻 茂山 千作

賞 賀

夫 茂山千五郎
妻 茂山 千作

賞 賀

夫 茂山千五郎
妻 茂山 千作

賞 賀

夫 茂山千五郎
妻 茂山 千作

野村事務所
名古屋市中区平和1丁目20-14
電話090-4402-8999
(10時~18時)

〔入場料〕
雪(正面指定席) 九、〇〇〇円
月(脇正面指定席) 七、五〇〇円
花(正面上手・中正面指定席) 六、〇〇〇円
当日券は残券が有る場合のみ受付

作者のことば

会心の一曲 土岐善麿

新作「青衣女人」は、奈良二月堂のお水取り、すなわち修二会行法に...

二月堂縁起にしろされた伝説によると、お水取りの五日目と十二日目初...

蔵、「木曾・願書」大槻十三、「蝸牛」野村又三郎、舞囃子「二人...



「狂言名作シリーズ」(昭和35年4月26日)左から...

私は心から堪能した。シテを演じた人は全く...

と、冷汗をかいた。五月八日は橋岡久太郎喜寿祝賀...

「卒都婆小町」金剛流三老女の肩に凭せ右手に持つ。老女のきこ...

頭五郎(助吟・橋岡久馬)「野守」鬼頭八郎・奥善助、仕舞三番...

なる者の悪き添ひてあるぞ」のワキの間に、「小町に心を懸けし...

真、脛の鼻かな。萩の花かな) 埒があかない。「さてくゝ気の毒...

「宇高青巖能之会」「九皇会」「宝生会」「観世会」

竹尾邦太郎

昭和三十五年五月に、寿夫さん(華の会)がジャン・ルイ・...

「卒都婆小町」金剛流三老女の肩に凭せ右手に持つ。老女のきこ...

「萩大名」シテ大名七五三、当代千作の本名を継ぎ、二世を名乗...

「観世」シテ大名七五三、当代千作の本名を継ぎ、二世を名乗...

「観世」シテ大名七五三、当代千作の本名を継ぎ、二世を名乗...

「観世」シテ大名七五三、当代千作の本名を継ぎ、二世を名乗...

「熊坂」観世、舞囃子「熊坂」観世、舞囃子「熊坂」観世...

「熊坂」観世、舞囃子「熊坂」観世、舞囃子「熊坂」観世...

「熊坂」観世、舞囃子「熊坂」観世、舞囃子「熊坂」観世...

「熊坂」観世、舞囃子「熊坂」観世、舞囃子「熊坂」観世...

「熊坂」観世、舞囃子「熊坂」観世、舞囃子「熊坂」観世...

「熊坂」観世、舞囃子「熊坂」観世、舞囃子「熊坂」観世...

「熊坂」観世、舞囃子「熊坂」観世、舞囃子「熊坂」観世...



宇高青巖能之会④「卒都婆小町」宇高通成、⑤「萩大名」左より...

「観世」シテ大名七五三、当代千作の本名を継ぎ、二世を名乗...

NHK放送予定(平成16年12月~17年1月)

- NHK-FM能楽鑑賞(毎週日曜午前7時15分~8時)
 - 12月26日「紅葉狩」(再)(喜多流) 塩津哲生ほか
 - 1月9日「采女」(親世流) 親世鏡之丞ほか
 - 1月16日「難波」(吉野天人)(親世流) 山本勝一ほか
 - 1月23日「東北」(再)(宝生流) 高橋章ほか
 - 1月30日「富士松」(御田)(大蔵流) 山本則直ほか
- NHK-FM新春謡曲番組(11:00~11:50)
 - 1月1日 宝生流番囃子「草紙洗」シテ・宝生英照、ワキ・田崎隆三、貫之・小倉敏克、笛・一増隆之、小鼓・大倉源次郎、大鼓・亀井忠雄
 - 1月2日 和泉流「咲嘩」野村又三郎ほか、大蔵流「入間川」善竹忠一郎ほか
 - 1月3日 金春流「西行桜」シテ・金春安明、ワキ・高橋汎、ワキツレ・桜間金記、地頭・本田光洋、地謡・高橋忍ほか
- NHK教育テレビ 能狂言番組(7:00~8:00)
 - 1月1日 金剛流「内外詣」シテ・金剛永謙、ツレ・今井清隆、ワキ・福王和幸、笛・藤田六郎兵衛、小鼓・曾和正博、大鼓・石井喜彦、太鼓・前川光長ほか
 - 1月2日 和泉流「佐渡狐」野村萬ほか、大蔵流「福部の神 動入」山本東次郎ほか
 - 1月3日 親世流「玄象」シテ・親世喜之、ツレ・親世喜正、ワキ・森常好、笛・一増庸二、小鼓・幸清次郎、大鼓・安福建雄、太鼓・親世元伯ほか

能 楽 の 友

発行 能 楽 の 友 社

名古屋市中千種区千種2丁目18-18
 (郵便番号 464-0858)
 電話 (052) 731-7 9 8 4
 F A X (052) 733-2 8 3 7
 振替口座 00800-6-36393

購読料 1年 1 1 0 0 円
 郵送の場合 1年 1 8 0 0 円
 一 部 1 0 0 円

文化庁表彰

平成16年度 地域文化功労者

小鼓方 後藤孝一郎氏 シテ方 吉井順一氏



後藤孝一郎氏

文化庁では、多年にわたり地域の文化振興に功績のあった個人および団体に対して、その功績を讃えるため、都道府県教育委員会に推薦を依頼し、文化庁において選考を行い、「平成16年度地域文化功労者」を決定。能楽関係では、幸清流小鼓方・後藤孝一郎氏(七三)、親世流シテ方・吉井順一氏(七二)の両氏に対して「永年にわたり、重要無形文化財『能楽』

(総合指定)保持者として、能楽の伝承、後継者育成に尽力し、地域の文化財保護に貢献している」として表彰された。

授賞式は十一月九日、東京・如水会館で十一時三十分から行われた。功労者の総数は八十四件、内訳は個人六十八名(芸術文化関係四十一名、文化財保護関係二十七名)、団体は十六団体。東海三県では、後藤孝一郎氏のほか松原久治郎(画家)、山路曜生(日本舞踊家、愛知芸術文化協会理事)、戸田昌尚(書道家)、伊藤秋男(愛知文化財保護審議会委員)、松山鐵夫(三重県文化財保護委員)、野上早三博(日本弦楽指導者協会三重県支部長)の諸氏が受彰。

観世寿夫記念法政大学能楽賞

小林 責氏 受賞 山本則直氏 受賞

法政大学(清成忠男総長)は、一九七九年(昭和五十四年)に「観世寿夫記念法政大学能楽賞」を設定し、すでに二十五回の贈呈を重ねているが、本年も各方面の識者の推薦による候補者について、選考委員(白井五郎・法政大学常務理事、野村萬、水落潔、西哲生、表章、西野春雄、山中玲子)が慎重に審議した結果に基づき、第二十六回の受賞者として、狂言研究者

小林 責氏

小林 責氏 長年にわたる氏の狂言研究は、近代や地方の狂言まで視野に入れた精力的なものであり、特に「狂言事典」は、能や狂

山本 則直氏 規矩正しく剛直でありながら巧みなる軽妙さを兼ね備えた氏の演技は、声量豊かな謡とともに、当代狂言界屈指の技量と認められ、特に本年の「文蔵」一調「貝尽」などは見事な舞台成果であった。曲趣に沿った問語りによって多くの能の成功に寄与している功績も大きい。

催花賞

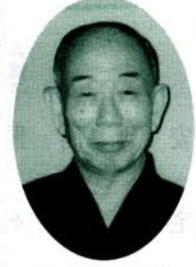
能楽タイムズ

法政大学は、第十六回の催花賞の決定に当たって、各方面の識者から推薦された候補者について、法政大学能楽研究所と別項の能楽賞選考委員とが慎重に選考した結果、受賞者として「能楽タイムズ」を決定した。

能楽タイムズ

〔贈呈理由〕一九五二年(昭和二十七年)三月の創刊以来五十余年、流儀を越えた情報機関誌として、能楽界の様々な出来事を報道・記録し、能楽の普及と啓蒙に大きく貢献してきた。時に鋭い警鐘の役目も果たし、また能楽評論を掲載し続け、戦後から現代に及ぶ能楽界の動向や歩みの貴重な記録となっている。

観世流 梅田邦久氏 新職分



梅田邦久氏

観世流ではことし九月、新職分として、浅井文義、梅田邦久、岡久廣、武田宗和、林喜右衛門の五氏を認定、十月二十二日観世能楽堂で認定式が執り行われた。

中間関係では観世流職分として梅田邦久氏が始めてである。氏は昭和六年生まれ。昭和二十四年故片山博通師に内弟子入門、当代片山九郎右衛門師に師事、昭和

名古屋能楽堂正月特別公演

名古屋能楽堂正月特別公演

平成十七年一月三日(月)午後二時始

名古屋能楽堂

能 翁

梅田 邦久 今枝 郁雄 河村真之介
 後見 泉 嘉夫 後藤孝一郎 後藤嘉津幸
 狂言後見 井上 靖浩 地謡 柳原富司忠 竹市 学

末広かり

果報者 佐藤 友彦 太郎冠者 佐藤 融
 都の者 鹿島 俊裕
 後見 大野 弘之
 笛 福井啓次郎
 小鼓 河村総一郎

狂言「鳳の会」第38回公演

一月八日(土)午後一時三十分始 名古屋能楽堂

解説 名古屋女子大学教授 林 和利

素囃子 神 舞

狂言 夷 大黒

狂言 柑 子

狂言 寝 音曲

狂言 茸

☆演者と語ろう「Q&A」

終演後会場、井上祐一、佐藤友彦を囲んでお客様の狂言に関する疑問、質問に演者が直接お答えします。

主催 鳳の会

入場料(全席指定)

A席 五、〇〇〇円
 B席 三、〇〇〇円
 学生 二、〇〇〇円
 会員A席 四、〇〇〇円
 会員B席 二、五〇〇円
 チケット取扱店
 Pコード 357・986
 井上祐一宅(FAX) 052・834・8607

能 衣

祖父江修一 借元 正樹 河村総一郎 鬼頭 義命
 和合之舞 高安 勝久 杉江 元 福井啓次郎 大野 誠

後見 高橋 瞭一 梅田 邦久

地謡 高島 良一 梅田 嘉宏
 八神 孝充 久田 勘助
 須部 幸親 泉 嘉夫
 清沢 清一

主催 能楽普及事業実行委員会
 名古屋文化振興事業団
 協賛 名古屋文化振興事業団
 名古屋能楽協会 名古屋支部

入場料 前売一般 四、五〇〇円(当日五、〇〇〇円)
 学生前売 二、五〇〇円(当日三、〇〇〇円)
 取り扱い所 名古屋能楽堂(052・231・0088)
 チケットぴあ 0570・02・9999
 市内プレイガイド

法政大学能楽賞
受賞者の略歴

小林 責氏

武蔵野大学名誉教授。狂言研究家。1928(昭和三年)東京生まれ。61(昭和36)年早稲田大学第二文学部日本文学専攻卒業。72年武蔵野女子大学専任講師、同助教授を経て81年同大学教授。2000年の退職まで同大学で教鞭を執るかたわら、国立能楽堂(三役)研修講師、文化庁文化財保護審議会専門委員、芸術祭執行委員会審査委員、同企画委員、楽劇学会理事、東洋音楽学会理事等を歴任し、能界と学界をつなぐ重要な役割を果たしている。近代の能楽史や地方狂言の研究などに先駆的な業績が多く、山口・佐渡の鷺流狂言の保存活動にも精力的に取り組んできた。1950年代から野村万作に師事し、研究だけでなく、狂言の普及・発展にも尽力している。

山本 則直氏

狂言方大蔵流。日本能楽協会員。1939(昭和十四)年二月三日、先代山本東次郎の次男として東京に生まれる。兄は現東次郎弟は則俊。幼少期より父の厳しい稽古を受け、44(昭和一九)年、「いろは」で初舞台。56年「三番子」を披露。64年、兄弟三人揃って「茶壺」で、65年には「鷓鴣」のシテで、芸術祭奨励賞を受賞。77年、「武蔵」「首引」「文蔵」などの演技で、芸術選奨文部大臣新人賞を受賞。

催花賞
能楽タイムズ
(発行者・丸岡圭一氏)

能楽書林発行「能楽タイムズ」の前身は、大正三年七月に丸岡桂が創刊した「謡曲界」(終刊・昭和一九年三月号)。戦時下の統制で、検閲店・わんや書店・能楽書林が併合され、三社の雑誌が統合されて「能楽」として昭和一九年七月に発刊されたが、昭和二〇年九月号で廃刊となったのを受け、昭和二七年三月二〇日、超流儀の新聞「プロイド判」として創刊された。発行・編集責任は丸岡大二。昭和五四年二月、大二の死去

を目的とした青年会等の活動を一門で行うかたわら、「鷹姫」「ジゼル」「桂の短冊」等の新作や、「若菜」「川上」の復曲にも参加。アメリカ、ヨーロッパ、東南アジア等々、海外公演への参加も多い。山本家の狂言を支える重要な柱であるの言うまでもないが、それだけではなく、独自の個性を持つ狂言役者として高く評価され、活躍している。長男泰太郎氏、次男則孝氏、孫の凜太郎君が後継者。

に伴い発行者は子息圭一氏に代わり、現在に至っている。創刊以来、演者と観客を結ぶ全流にわたる月刊情報誌として、報道・舞台評論・研究・随想等を掲載し続け、広く能楽の普及と斯界の振興に尽くしてきた。2004年一月で六三三号を数えている。発行元の能楽書林は、観世清之門下の謡曲研究家歌人の丸岡桂(1878-1919)が、明治四〇年(1907)一〇月、旧来の謡本の章句の不備と節付の訛誤を憂い、その是正と平明を目的として、東京・神田に観世流改訂本刊行会を起したことに始まる。改訂本は従来の謡本を一新し、かつ諸流謡本に質的革新をもたらした画期的謡本として高く評価されている。

桂の死後、代表は、妻の貞(てい)、長男で作家の明、次男で能楽評論家の大二と継承され(一時「丸岡出版社」の時代もあった)、現在の圭一氏に至る。観世喜之家・梅若六郎家の謡本、幸流小鼓・葛野流大鼓・高安流大鼓・金春流太鼓の手付本や、能楽関連の図書を出版し、2007年には、創業満百年を迎える。

地域文化功労
受彰者の略歴

後藤孝一郎氏

昭和六年生まれ、昭和二十三年初舞台、五十二年から岐阜護国神社の「鷓鴣能」六十一年から「長良川新能」を手掛け、また大学能楽クラブ活動を指導、地域の能楽の普及振興に尽力、五十三年に重要無形文化財総合指定の日本能楽協会員に認定、平成四年岐阜県芸術文化顕彰受章、幸清流小鼓方職分、桂会主宰。平成十二年岐阜市の岐阜県ふるさと文化賞を受賞している。

吉井順一氏

昭和七年、福井県生まれ、三十五年観世流職分、神戸観世会理事長、能楽協会神戸支部長、同支部相談役など歴任、日本能楽協会員、平成十年度兵庫県文化賞、十二年度神戸市文化賞を受賞、地域の文化振興に貢献している。

さわってみよう
能の世界

社団法人能楽協会名古屋支部、能楽協会、日本能楽協会主催による「平成16年度文化庁芸術団体人材育成事業」として、明春一月二十二日(土)名古屋能楽堂で「ユネスコ世界遺産に指定された「能楽」を体験してみませんか」と呼びかけ、「能楽鑑賞」「囃子」「謡の実技体験」が催される。

入場は無料だが、整理券が必要で希望者は往復ハガキで申し込み、返信のハガキが入場券となる。(定員三〇〇名)申込みの宛先は、名古屋市中区大須3-2-40、福井方 能楽協会名古屋支部。締切りは12月23日。

名古屋清韻会

平成十七年一月十日(祭)九時半始
名古屋能楽堂

鶉 飼

素謡 岩田 正子 木下 芙蓉
佐藤加代子
富田 郁子 野村 和子
久保田和代 緒方 陽子
浅井 庸子 田中 文子

盛 久

中原 基夫 林本 政夫
佐藤 尚雄
地謡 下山 幸重

砧

緒方 陽子 伊藤 陽子 田中 文子

舞囃子 三輪

川崎あきえ 田中 泰子
福井啓次郎 福井 圭子
福井啓次郎 中村喜久子
福井啓次郎 加藤 洋輝
福井啓次郎 鹿取 希世

自然居士

山本 淳子 河村真之介 竹市 学
後藤嘉津幸 竹市 学
福井啓次郎 鹿取 希世

芭蕉

名倉 菊子 福井啓次郎 鹿取 希世
加藤美智子 福井啓次郎 鹿取 希世

錦木

山本美代子 山本美代子
宮澤 祐子 宮澤 祐子
春日井夕紀子 春日井夕紀子
河野カズエ 河野カズエ
谷口 寛子 谷口 寛子

仕舞 俊成忠度

加藤新一郎 加藤新一郎
桑原 信夫 桑原 信夫
富士道周明 富士道周明

舞囃子 白楽天

渡辺 節子 河村真之介 大野 誠
後藤孝一郎 河村真之介 大野 誠
後藤孝一郎 河村真之介 大野 誠

弱法師

古井 佐季 河村真之介 大野 誠
後藤孝一郎 河村真之介 大野 誠
後藤孝一郎 河村真之介 大野 誠

融

御牧 紀代 山本 哲也 元伯 学
後藤嘉津幸 竹市 学
後藤嘉津幸 竹市 学

舞囃子 西行桜

北原良一郎 山本 哲也 元伯 学
福間 克彦 河村真之介 大野 誠
柳原富司忠 大野 誠
加藤 千一 山本 哲也 竹市 学
後藤嘉津幸 竹市 学

平成16年度文化庁芸術
団体人材育成支援事業
さわってみよう能の世界

一月二十二日(土)午後一時半開演
名古屋能楽堂

能楽鑑賞、囃子、謡の実技体験

要整理券、定員300名
対象者は、小学校3・4・5・6年及び中学生とその同伴者(大人)
申込みは必ず往復ハガキで
名古屋市中区大須3-2-40
福井方 能楽協会名古屋支部宛
小・中学生氏名、学年、住所
同伴者(大人)氏名
※返信のハガキが入場券となる(締切り12月23日)

関連記事②面上掲

主催 社団法人 能楽協会名古屋支部
能楽協会・日本能楽会
後援 愛知県・名古屋市教育局
名古屋文化振興事業団

名古屋宝生会定式能(第49期)

一月二十三日(日)午後一時始
名古屋能楽堂

西行桜

倉本 雅 橋本 幸
飯富 雅介 河村真之介 大野 誠
福井啓次郎 福井啓次郎 鹿取 希世

筑紫の奥

後見 今枝 郁雄
石森 智幸 石黒 孝
青木 亮 馬場 四夫
外山 通夫 辰巳満次郎
賢治 内藤 飛能

仕舞 卷

絹ヶ七 竹内 澄子 和久 莊太郎
花 月キリ 玉井 博祐 馬場 四夫
辰巳満次郎 辰巳満次郎 辰巳満次郎

草 薙

後見 玉井 博祐 柴田 勲 佐藤 耕司
衣斐 愛 寺部 一威 石黒 正吉
久野 幸三 和久 莊太郎

名古屋宝生会

主催 名古屋宝生会
名古屋市中区大須三丁目一〇一
島田橋住宅二一三三〇
電話FAX 〇五二一八〇三三
携帯TEL 〇九〇一七四一六三三
[要会員券]
当日券一万円(2枚綴 年内通用)

戦後名古屋能楽史 ⑥

〔第十四章〕 竹尾 邦太郎

昭和三十五年（一九六〇）

（承前）

五月二十日、前年四月十六日に「狂言鑑賞の会」を主催した野村又三郎が新たに「やるまい会」と銘打つ自家の会を興し、その記念すべき第一回公演。番組は「雁」河村丘造・佐藤卯三郎・佐藤秀雄・素雄「早舞」藤田六郎兵衛・田鍋惣太郎・西尾孫太郎・鬼頭八郎、「金岡・替装束」野村又三郎・野村万作、「無布施経」野村又三郎・井上礼之助、小舞三番「暁の明星」野村万作「石河藤五郎」野村万之丞「ざんざん」野村又三郎、「抜鼓」野村万蔵・野村万之丞、「唾の一声」野村万作・野村又三郎・野村万之丞、本狂言五番のうち二番のシテ、一番のアトと小舞を勤め、催主・又三郎大奮闘である。

なお「唾の一声」は現代フランスの劇作家アヌイ（一九〇一—一九八七）の「唾のユミユリス」から取材した飯沢匡の新作狂言。初演は昭和三十三年十二月九日、冠者会（野村太良を激励し芸の育成を図るため、父万蔵の肝入りにより昭和二十一年十一月発会）第十五回公演。当時、新劇の俳優が勉強のため狂言を採り入れることがあり、この初演も「野村万作、祖母・野村又三郎、太郎冠者・野村万之丞、つんば・岸田今日子」の配役。作者飯沢匡は「日本古典文学大系・狂言集 下」の月報で「新作狂言と私」と題し、次の様に述べる（抜粋）。

私が新作狂言を書くのは全く狂言形式を保存したいからである。むしろ狂言の形式に素晴らしい新しさを感ずるからである。

狂言を見てると寝呆けたような歯切れの悪い演出の翻訳劇なんか見ると、どれ位清々しい思いをするか判らないのである。一番スピードを重んじる現代人

成功であった。一つには狂言の人たちも新劇の客に狂言を見せるといって、ひどく頑張ったせいもあったが、やっぱり狂言そのものの持っている新しさ完璧さが人を打ったのであろう。

一 中略—この時から新劇の人たちが狂言に関心を持つようになり、長岡輝子さんも大蔵院に入門するし、若い俳優たちでも今でも狂言を習っている人はかなりの数いるようになった。一 後略—

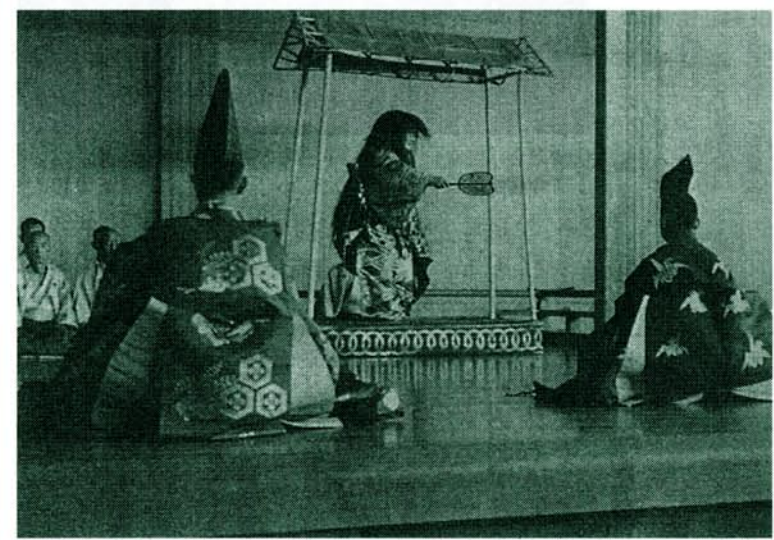
五月二十九日は第三十七回名匠鑑賞会。舞囃子「東方朔」梅若泰之・武久、「俊寛・落葉ノ伝」観世喜之、「貫賢」井上松次郎、独吟「四季」林恩蔵、仕舞「藤戸」柴田初太郎、「道成寺・赤頭」梅若六郎(53)、高安滋郎(43)、野村又三郎(39)、佐藤秀雄(48)、囃子方は藤田六郎兵衛(58)、田鍋惣太郎(76)、山本敬一郎(62)、鬼頭八郎(59)、地頭梅若泰之(43)、後見観世喜之(58)、鐘後見梅若武久(50)。主催の田鍋惣太郎は「道成寺」を勤めること四十七回目、「梅若の道成寺は当地初めてで大盛況でありました」と自著「小鼓芸話」にいう。そして、これが実現には昭和二十二年四月十二日、

京都梅若別会で二世梅若實（七八—一九五九）の「道成寺・黒頭替装束・無鬚之崩・数拍子・三度返之次第」を勤めた折、当の嫡男六郎との談合あつてのこと、三年ぶりに約束履行となる。

六月二日、他事だが、中村勘三郎・中村歌右衛門・尾上松緑らの渡米歌舞伎第一回公演。能・狂言に取材した所謂松羽目物と言われ「勸進帳」「身替座禪」などのほか「籠釣瓶」を演じ七月十九日に帰国する。

月が替り六月四日、梅若猶義の主宰する梅猶会の名古屋演能第二回。素謡「杜若」梅若猶義、仕舞三番「敦盛」加藤丈太郎「松風」杉村竹翠「融」佐藤太夫、「隅田川」梅若猶義、「飛越」河村丘造、仕舞三番「雨月」柴田初太郎「花笠」井戸良造「天鼓」岡田朗詠、「安達原」梅若盛義、能二番の大鼓に葛野流の斉田喜兵衛が同行。なお「隅田川」は塚に子方は入れるが、中で語らせるだけで舞台へは出さなかつたという。

翌五日、喜多流鑑賞会は仕舞四番「玉之段」新熊弘憲「実盛」中尾栄一「鳥頭」岡村保道「融」和谷亀二郎、独吟「駒之段」二井栄逸、舞囃子「八島」長田驥、「半



能「邯鄲」左よりワキツレ大臣・西村欽也、シテ柴田初太郎、子方久田徹二
『歸童閑談』より転載

儀式課長（のちに権宮司、熱田神宮能楽殿運営委員長）が祭主となり完工祭が行われる。

六月十九日、観世会第三回。「巻絹」河村鉦二、素謡「雲雀山」六車真三、仕舞三番「賀茂」久田秀雄「阿漕」岩田与司「杜若」丹下三義、「頼政」片山博通、「吹取」河村丘造、「楊貴妃」観世鏡之丞、「国栖」大西信久。シテ方に片山博太郎・大西智久・藤井久雄、大鼓に谷口喜代三の来演がある。この年は当地観世会発会以来十周年、「十周年を迎えた名古屋観世会」と題する座談会が当地の観世流長老・林恩蔵と柴田初太郎の両名に植村真太郎名古屋能楽会副会長が加わり、西田三好の司会で七月十六日、覚王山の料亭井清亭（敷舞台の鏡板は名古屋能楽堂の地下稽古舞台に寄贈され、料亭はすでに廃業）で行われ、「観世」九月号に収録されているので、関係部分を次に再録する。

定期の番組は
植村 先日定期能（六月十九日

の観世会）には午前師範の稽古能がありました。よいことだと思いますね。

あれは今年始めた試みですが、立派な能が舞えるようにしたい念願からです。当日は各師家にきて貰って、指導していただくことになっていました。

植村 稽古能を充分にして、やがては本番にはいれることにもなれば大成功です。

林 ですから皆さんには稽古能もみていただきたいと思います。

西田 定期能の番組へのご希望は。

植村 稀曲をときどきいれてほしい。また素人の素謡コンクールもやってほしい。

林 定期能にはいまままでに全国職分家の方々には全部出演していただいています。これからは二世の能のことも考えています。

植村 全国的に総ての人の能が見られることは名古屋観世会の一番よい点ですね。

西田 色々とお話を承りました。林・柴田両先生の功績は非常に大きいと思います。両氏の努力がなかったら、名古屋のようなやりにくいなところ、十年間にこれほど成長しなかつたと思われま。両氏に深く感謝の意を表して終りいたします。

六月十五日、名古屋の地下鉄第二期工事、栄町一池下間の三・四キロが開通。熱田神宮・長谷晴男

「清水」女、童はいざ知らず、大の男が湯の湯の水の如きを汲みにやられる不満に、口を尖らせ仏頂面のシテ太郎冠者・靖浩、主従の有り様を端的にみせる。

太郎冠者のささやかな抵抗は、水を汲まずに桶は鬼が出て投げつけた、の報告。主・友彦は秘蔵の桶あくまで取り戻すとこだわる。清水へ出掛ける主、思惑外れて嘘の糊塗は先廻りして鬼に変装の太郎冠者。怯える主に調子づく太郎冠者、破綻見え見えの浅慮も亦端的にみせる。（26分）

「望月」旧主・安田友春ノ妻ツレ三津子、遺児花若・子方勘吉郎を助け敵・望月秋長ワキ弥三郎を

◆ 酣秋の舞台から ◆

第十七回久田勘鷗の会「青陽会」

「金剛定期能第七回」と「第二回塩津哲生の会・正和能」

竹尾邦太郎

討つ小沢刑部シテ勘鷗、各役緊張のうちにクライマックスに至る快調なテンポが惹きつける。勘鷗先代の秀雄も直前に好舞台を残したが、勘鷗も骨格の大きい堂々たる押し出しで、これも貫禄十分な弥三郎と渡り合い、仇討ち本懐をとげる。

前場はツレと子方がシテに再会のところ、シテの前へ進み寄る子方が「父に逢いたる心地して、右手扇をシテの左肩に置けば、「こはそも夢か、でシテも右手扇を子方の左肩へ置き、見交わす目と目合、親共演の心が大きいに通い合、その心強さに（主従と）頼

む情もこれなれや、とシオル子方とツレの有難涙に長まり平伏するシテ、一幅の絵である。

ワキが出、従者アイ祐一の迂闊でワキの素性を知るシテ、奇遇を驚くも逸る花若を制止、深慮に遠謀を説く毅然たる態度に硬骨ぶりをみせる。クセは首御前に扮し羯鼓を打つツレ、クセ留へ敵を討たせ給へや、にパツと反応「いざ討たう」と亢奮の花若、緊迫した雰囲気は居立ち小刀の柄に手をやるワキ、短慮許さじとシテ、一瞬、四者塑像と化したかに焦点びたり合った印象である。その場を取れば、シテは花若には羯鼓、自身は獅子を舞うとして支度一旦中入すれば、ツレも橋懸まで花若に手を取られて退き、一ノ松で思い入れ、杖を手放すとする（幕）。

アイは立シヤベリに獅子は石橋の事跡を述べ、後見座の花若に羯鼓を勧め切戸へ退く。花若・勘吉郎の羯鼓はきびく、と場慣れて達者、舞の中、常座から幕へ指す右手の撥を手放すと乱序（次郎・舜一郎・総一郎・悟）、花若はスミに下居、ワキに向き合う。

後シテは紅白段唐織を被き一ノ松、舞台を見込み颯と右へ屈み、向き直り二ノ松へ後退りすると一氣に正中へ。被衣の唐織の両袖に手を通すと勇壯な獅子舞である。キリは獅子頭を脱ぎ、花若を敵の方へ押しやれば、敵に擬する笠を軽々と跳び越える花若と左右から敵を刺し通す勢も凄まじい。夫婦・親子の共演を珍しくみた。（一時間23分・9月23日・第17回久田勘鷗の会）

「野宮」シテ三津子、面若女・襟白二・白摺箔着付・紅白段唐草文唐織、左手に木葉。居合わせる旅僧ワキ勝久に素性問われ、逆に問い返す気丈夫に凛とした気位をみせ、ワキに心を許せば問答・掛合に長月七日の野宮の神事にまつわる事ども明かしてゆく回りも確りした口跡。正先、鳥居の前に木葉を手向け、戻りワキに合掌、立つと前場の型どころ。「物儂しや、と小柴垣を見込み、「今も火焼屋の幽かなる、と右へ目付柱の方を眺める憂愁の趣も上々である。クセは上ゲ端あと、「寄るべ

〔4面へつづく〕



④青陽会「野宮」久田三津子、⑤「柿山伏」佐藤友彦、シテ今枝靖雄（杉浦賢次氏撮影）

悪かれたよ
うな殺生へ
の執念、
ただ罪をの
み持網の、
と網を手繰
り寄せる辺
り（写真）鬼
気迫り、
あら熱や、
と網を左後
方へ投げ捨
てる。情勢
切迫へげに
恐ろしの気
色、をハッ
タと打合に
みせて地獄
の苦思はキ
リの型どころ、へ焔煙、と頭を取
って頭を上げ、へ雲霧、では左右
に面使とするのが、息苦しさに深
掻く姿とも思えた。（1時間20分
・9月25日・青陽会）

た五部の大乘経、その経巻の軸木
から木榎樹が生え、その実を数珠
にして念仏百万遍唱えれば往生必
然、との霊夢を善光寺参籠中に授
かつたワキ尊性、早速河内国に赴
き、シテ老宮人にその事伝えられ
ば、シテはその奇特を多とし、木
榎樹へ案内、神仏習合から菅公配
流の事も語り、木榎樹の実を
授けようとする、自身は天神の使
い白太夫神と明かし消える、とい
う。

過ぎずの初同（恭憲・通成ら）の裡
にツレは地前に、ワキも脇座に戻
り下居（写真）へ和光の影にきて拜
む尊かりける、と合掌する。昔
公配流の時のことなど敷衍するク
りからクセは、へそれ仏の昔神の
今、で後見がシテの水衣の肩を下
ろし、杉箒をひくと、シテは地と
の掛合のうち居クセに。ロンギに
なり、へあの梢（木の実こそ）、と
居立って立木キツと見上げ立つ
と、へ必す授け申さん、と目付柱
へ進み、へ我は天神の、とワキへ
振り返りへ御使、と指込開キする
のが、如何にも確かに請け合つた
の力強さ、後シテの力を暗示す
る。狂言来序で末社神アイ宗彦、
立シヤベリに尊性の霊夢のことを
語り、三段ノ舞を騒々しく舞って
退くと後場。

「無益」と過ぎるワキに、「いや
さればこそ」と有め、掛合は静か
に確りと、互いにアシラヒ合う裡
に身上明かし、ワキの気を惹いて
ゆくところなど位も充分。初同
（菊生・昭世ら）しつとりとした中
入地へ現はれ出でたる実盛が、と
ワキにアシラヒへ名を洩らし給ふ
なよ、で立つと、へ亡き世語も、
と一足引いて羞恥の心をみせ、へ
御前を、立ち去るとみえて、池の
辺、と正に直ルのはワキとの惜別
の心か。へ姿は幻、と一足引いて
廻り込み地一杯に橋懸へ入るとこ
ろ、一入の余情。

後シテは白垂・梨子打・鱗地雲
氣輪宝矢立文様白地厚板着付・幾
何文様紫地半切・金地唐花唐草文
様袷法被・肩脱・太刀の姿。厚板と
半切はシテの求めに込えた山口憲
能装束研究所々長が明治初期海外
に流出したものの復原、法被は前
田家伝来という江戸期のものを修
復したという。成程、老武者なれ
ど出立花やか、夜の錦の直垂は、
この鈍く光る金色の袷法被であ
る。クリに大小前の床几に掛り、
シテ語は緩急抑揚はきく語り説
得力。へ申しもあへず首を持ち、
と扇開き両手で首を捧げるよう
立つと正先、首を洗うところから
クセ、キリと意味のある型が続く
処きびく極め、遅しい老武者の
生気が漲る。就中、へ鞍の前輪に
押しつけて、の踏み込む左足の圧
力からへ首掻き切つて、とスカッ
と大きく切つて投げ捨てる処、ま
た、へ二刀刺す処を、と袖巻き上
げるやへむすずと組んで二匹が間に
と手を組み廻り込むと退り膝つく
処、更には、へ手塚が下になる処
を、では合膝返シから安座の処、
力一杯の活躍も鮮やか。哲生力量
發揮、充実の一番だった。（1時間
37分・10月2日・第二回塩津哲生
の会・喜多能楽堂）

〔③面よりつづく〕
なき、と立ち、へ行方も鈴鹿川、
と左から右へ面使ヒ、へ八十瀬の
波に、と詰メ下を見る心持も佳。
後シテ、緋大口に白地長絹の気
品は六条御息所。車争いにへばつ
と寄りて、と右ウケ面使フとこ
ろ、虚を衝かれ怯む心か。序ノ舞
では右袖きれいに被き巧味。へ露
打払ひ、で左小柴垣を打ち、面伏
せ虫の音沁々聴くと一転、へ風
茫々たる、と大きく招いて出る
が、へ野の宮の夜すがら、と退り
へ懐しや、とシオル胸の裡も切な
い。破ノ舞すみ、キリはへ此処は
元より、と大小前から前（写真）、
へ出で入る姿は、と左手で鳥居の
柱を掴み、右足踏み入れ颯と退
き、トメは乗込拍子に常座、直つ
て右ウケ留拍子。所要二時間二
分、大曲を終始緊張のうちに破綻
無い見事に舞い切る。

れ、淡々とした口吻の中に「業に
望む心の悲しさ」色濃く滲ませ
る。へ立ち添ふ方や漁火の、と釣
竿取つて立ち、へ影も仄かに、と
目付柱へ漁火を眺め、へすはや手
操の、と釣糸を右左と竿に巻きつ
け解く繰返しも手綺麗に、へ俄か
に疾風吹き、と屹と面使ヒに脇正
を見廻す。へこはそも如何にと、
竿を捨て退る驚愕は、へ叫ぶ声、
に両手を翳し耳を塞ぐと静かに廻
り込み、中入。疾風に荒れる暗い
海が、徐々に収まるかの寂々とし
た送り笛（学）が象徴的。

後は立廻に網へ魚を追い込むと
ころ、へなお執心の網を置かん、
と目付柱近く網を見込むが、最後
は二ノ松で頭を取つて眺め、魚を
追う態に舞台へ入ると、左、右と
追い、大小前で小廻りから両手を
あげ網へ追い込むと下居。縄を両
手に取る。きびくした動きには

「道明寺」天満天神が衆生済度
を願ひ、土師の里は道明寺に埋め
分）

有難き御夢想候ぞ」と同意求
めるかにシテにアシラへば、その
奇特を喜ぶシテは、当の木榎樹へ
誘う心に二・三足出、ワキも少し
出ると、問答から掛合に、シテは
木榎樹の因縁は神仏一体の縁と結
論づけ、へ唯これ水波の隔て、に

俥容は悠揚として迫らぬ態度で舞
上げる。キリは、へ枕は袂、と膝
をつき左袖で面を蔽い、へ上は尊
き、と立木を見上げて立つと立木
前、へ注ぎて枝々より、と立木の
枝を掴んで挿すと、実際に木の
実がバラバラとこぼれ落ち、シテ
はそれを扇に受ける態からワキに
与える（写真）と、へこれこそ念ひ
の珠を貫く、と両袖キリキリと巻
上げ常座へ、両袖ハラリと解き留
拍子踏む。シテ以下三役、地謡、
稀曲だが良く纏まり好演、こなれ
た立派な舞台だったが木の実が落
ちてきた時は吃驚、因に写真で舞
台に点々と見えるのがそれ。（1時
間37分・9月26日・金剛定期能第
七回・金剛能楽堂）

「鎌腹」暮らし向きをめぐる太
郎シテ万作と妻アド和意の凄まじ
い衝突。取める仲裁人アド幸雄か
ら山道具を受け取ると、太郎は仲
裁人を楯に付き、鎌で腹を切ると
妻に喚ぶが、太郎の性根を知ると
は驚く仲裁人を無理矢理引つ立て
引つ込んでしまふ。独り残された
太郎、独り言に鎌腹の手立て様々
に考え出すところ、可笑しくも切
ないのは、薄志弱行に非ず命愛お
しむ心。キリ、「山から戻るは菊
千代ではないか」と脇挂へ呼び掛
け、「洗足の湯を沸かして給れ
や」と妻への言伝頼む声の哀調
に、万作、男心の機微（24分）

「實盛」遊行上人ワキ閑の説法
聴聞に日参の老翁シテ哲生、姿は
上人だけ見
えて余人に
は見えない
だけに、ワ
キとの問答
は余人を挟
まぬ通じ合
う心、淡々
とした中に
力強く明
快、素性問
われ「何と
名を名の
れ」とシテ
にアシラフ
辺りも気骨
をみせる。
坦々と戦語
りに入り掛
かると、

「一つ所望でござる」と声を掛け
るが誰も居らず、喉の渇きに仕様
事なく、先づ磔を打ち、次いで木
に抱きついて揺すり、それも駄目
で登った樹上、不安定な体勢で居
るところを柿主・友彦に見つかり、
散々になぶられる山伏・靖
雄。なぶられる俣の山伏の素直さ
になぶる柿主が却って憎げ。「熟
柿よいものぢや」と中味を吸り、
手を汚した態に振ってみせる。（18分）



青陽会「阿漕」祖父江修一（杉浦賢次氏撮影）



④金剛定期能「道明寺」前、左よりシテ豊嶋三千春、ツレ豊嶋三
見嗣、ワキ高安勝久、⑤「道明寺」後、左よりシテ豊嶋三千
春、ワキ高安勝久、ツレ豊嶋幸洋（原田七寛氏撮影）

上人だけ見
えて余人に
は見えない
だけに、ワ
キとの問答
は余人を挟
まぬ通じ合
う心、淡々
とした中に
力強く明
快、素性問
われ「何と
名を名の
れ」とシテ
にアシラフ
辺りも気骨
をみせる。
坦々と戦語
りに入り掛
かると、

平成17年度「山本定期能」の演
能日程（予定）は次のとおり。
入場料は一期分（三回券）一万五
千円。問い合わせは、大阪市中央
区徳津町一丁目3-6、TEL 0
6・6943・9454。

●一月九日（日）	十二時始	神歌	山本 勝一
白楽 天	林本 大	鞍馬参り	善竹 隆司
●四月二日（土）	一時始	草子洗小町	成田ひかり
●四月二日（土）	一時始	草子洗小町	松浦 信夫
●六月四日（土）	一時始	葵 上	今村 一夫
●七月三日（日）	一時始	藤 戸	山本 順之
●九月四日（日）	一時始	融	松浦信一郎
●十一月十二日（土）	一時始	望 月	波多野 晋